中山文化研究所紀要　第三冊

14.5
253

14. 5-253
1200501215794

始

14.5
253
孤本

中山文化研究所紀要

第三册

14.5-253

中山文化研究所紀要　第三册

少女の宗教に就ての研究

東京中山文化研究所　月田寛
木下照
菊池弘

序言

宗教が科學・哲學及び藝術と共に人間文化の要素として、野蠻蒙昧の人種より始めて、文明開化の高等の人類に至るまで、人類の個人生活及び社會生活の上に、重要の任務を有することは言ふまでもない。しかも、宗教の任務とするところは、結局、人々の主觀に、その生活と世界との最高且つ終局の意味を開示するところに存するのであるから、宗教と名づけらるるところの精神活動は我々人間の價値生活の頂上に位するものであると言はねばならぬ。さうして、教育の一切の作業は、兒童の精神

をして、價値の體驗に對して感受し易からしめることを要旨とするものであるから、兒童の教養の上に、宗教を度外視してはならぬことは勿論であるが、しかしながら、今日に至るまで、我邦に於て、兒童の教養の方面に於て宗教が等閑に附せられ、尠なくとも學校教育に於て宗教が重く視られなかつたことは事實である。それはまことに悲しむべき、又憂ふべき事實であるとせねばならぬ。それ故に、この事實は速やかに排斥せられて、宗教が兒童の教養の上に重く視られるやうにならねばならぬのである。それに就きて、第一に緊切なることは

(イ)兒童の精神にありて、宗教が如何に形成せられて居るか。

(ロ)その宗教性感情は如何なる機會にあらはれるか。

(ハ)傳統的の宗教の印象が、兒童の行爲の上に如何なる影響を致すものであるか。

先づ此等の問題を解決することである。無論、宗教と名づけられるものは人類の精神の特殊なる現象として、與へられたる事實であり、現にその他の精神活動と關聯して居るのであるから、心理學的にこれを研究することは固より可能である。さうして、その研究は疑もなく事實の研究である。それ故に、これを心理學的に研究することによりて、宗教の發達を助長し又催進する上に確固たる方針が立てられるのである。しかるに、此等重要なる事項につきて、これまで心理學的の研究をなして確實の成績を擧げたる報告は甚だ稀有である。それは言ふまでもなく、その研究方法の確實なるものが得られぬといふことであり、又その研究の方針に缺陷と認むべき點が尠なからぬためであると思ふ。

○

宗教心理學の上にて、その研究方法として用ひられたものには種々あるが、その第一に擧ぐべきはホール—スターバック質問票法である。スタンレイ、ホール[1]は米國「クラーク」大學にありて心理學を研究せる間に、特に宗教心理學に就て幾多の研究をなし、その學派に屬するスターバック[2]は「宗教意識の生長の實驗的研究」と題してその成績を報告した。かやうにして、ホール、スターバック兩氏によりて大成せられたる質問票法は被驗者に對して一定の形式を有する問題を提出し、それに對して答辯を筆錄せしめて檢査する法である。さうして、スターバックはこの法によりて種々の人々に於ける宗教的生活の生長及び發達の過程を明にしやうと企圖したのである。しかしながら、スターバックの研究にありて、その主なる興味は、宗教生活の發達の上に橋梁を架する所の回心と、それから固有の回心なしに發達するところの宗教の形式及び過程に對して、回心に由る發達が如何なる關係を有するやを明にする點にあつた。それ故に、その研究は、宗教的信仰の外的現象の形式及び作業の形式と、その個人及び社會的身體の機能の上に及ぼす關係を明にするに過ぎなかつたと評せねばならぬのである。

質問法によりて、宗教に關する自傳的の材料を得てそれによりて宗教の根本法則を明にすることも企てられた。フエンニヒスドルフ[3]の法がこれに屬する。フエンニヒスドルフの問題は十項に別れその重要とするところは「バイブル」及びクリストに對する態度、寺院及び禮拜に對する態度の如何

(1) Stanley Hall, American Journal of Religious Psychology and Education.
(2) Starbuck, The Psychology of Religion. An Empirical Study of the Growth of Religious Consciousness.
(3) Pfennigsdorf, 1913

を明にすることであつた。フーゴー、レーマン(1)の法も亦これと同一の目的に出でたものであるが、その問題は特に祈禱及び歸依を主としたものであつた。これを要するに、これ等質問法の主とする所は宗教性の外的動機にして、殊に敬神の實行及び敬神の習俗等を知るに過ぎざるものであつた。

宗教心理學的傳記研究の目的にて質問票を用ひたる人もあつた。これは固より宗教上著明なる人格の生活の傳記的研究を主とするもので、シュリューテル(2)の質問票の如きは兒童期、過渡期及び成熟期の三期に別け、種々の問題を擧げて、その宗教につきての研究をなしたのである。フルーノイ(3)は始めホール、スターバックの實驗的方法を用ひしが、後には自ら謂ふ所の觀察法に歸した。それは試驗者の要求により、又それに關係なく造られたる宗教的體驗及び宗教の發達に關する文書を輯めて、之を分析するの法であつた。ロイバ(4)の研究方法はこのフルーノイの方法に類似し、しかもそれに異なる所は人種學的の研究方法を採用せることに存した。ウイリアム、ゼームス(5)の法はホール、スターバック法に比して明かに進歩せるものであると言はれて居るが、その研究の方針はスターバック及びロイバに異なりて、むしろシュライエルマツヘルの研究の方針と親密の關係を有するものである。さうしてジェームス自身はその方法を純粋經驗的方法と名づけて居るが、ジェームスは宗教につきて形而上學的の價値判斷をなすことをなさずして、與へられたる事實を分析したのである。その經驗的といはれるのはこの意味に於てである。これを要するにジェームスは宗教と名づけられる精神過程の領域に於ける經驗心理學上の問題を研究し宗教的經驗の固有の本質を明かにすることを企圖したので

(1) Hugo Lehmann, Zeitschrift f. angew. Psychologie. 1916.
(2) Schlüter, Archiv f. Religionspsychologie 1914.
(3) Flournoy, Beiträge z. Religionspsychologie. Autor. Uebersetz. von Regel. 1911.
(4) Leuba, Theology and Psychology. 1918.
(5) William James, The Varieties of Religious Experience. 1904.

ある。それ故にジェームスは宗教生活の歴史的客觀的構成につきては研究せず、只個人的、主觀的、人格的の宗教につきてのみ研究したのである。それは畢竟、シュライエルマツヘルが教義的及び禮拜的の表現形式はすべて宗教的内部生活に續きてあらはれる性質であるとせるところに同一の所見を本としたのである。

○

その他、宗教心理學上の研究の方法につきては諸家の發表もあるが(1)、余等は、この方面に於ける研究の第一著手として、高等女學校に於ける少女の宗教性感情及びその感情に本づきてあらはれる行動につきて觀察することを企てたのである。さうして、質問票によりての研究がただ宗教性の觀念を知ることに止まるの弊を避けて、その宗教性行動の底に存するところの感情のはたらきを窺知せむことを欲して、被驗者に提出する問題を選ぶことに十分の注意を拂つたのである。余等が用ひたる質問票は次の如くである。

質問票

余等が應用したる質問票は、兒童にありてその精神の上に宗教が如何に形成せられたか、又如何なる場合に宗教的感情があらはれたか、又傳統的宗教の印象がその意志行爲の上に如何に影響せるかの諸點を明かにすることを期圖して、問題を選び、次の十三問題と定めたのである。さうして、この問

(1) Georg Wobbermin, Die Methoden der religionspsychologichen Arbeit.
A. Fischer, Religionspsychologische Untersuchungsmethoden im Dienst von Kinderforschung und Pädagogik. 1927.

題を選定するに方りてカビツシユ(1)及びイルゲ(2)兩氏の論文に學ぶところが多かつたことを明記して兩氏に對して敬意を表する。

(1) Richard Kabisch, Wie lehren wir Religion?
(2) Willi Illge, Das Religiöse in Seelenleben des Volksschülers. Zeits. f. pädag. Psychologie. 1932

問題

次の問題につきて考へて居られることをそのまま簡單に答へて下さい。分らぬことは答へなくても差支ありませぬ。

一、神や佛を考へたことがあるか、あればどういふ機會であつたか。
答

二、世の中に神や佛があると思ふか。
答

三、心の中に良心の聲を聽いたことがあるか。
答

四、罪惡の大きなるものは何であると思ふか。
答

五、罪惡の小なるものは何であると思ふか。
答

六、神や佛といはれるものはどういふものであると思ふか。
答

七、幾歳頃から神や佛の名を知つたか。
答

八、神や佛は何でもできると思ふか。
答

九、天國或は極樂とはどういふところであると思ふか。
答

一〇、神や佛の奇蹟又は不思議をばどう考へるか。
答

一一、神をまつり佛を拜むこと（神社、寺院、禮拜、儀式、讀經）をどう思ふか。
答

一二、子供が神をまつり佛を拜むのを見てどう思ふか。
答

一三、神や佛に祈つたことがあるか、若しあつたらばどういふ場合であつたか。
答

高等女學校第　學年
姓名
年齢

この質問票はこれを活版に附し、豫て依囑せる當該學校に送り、學校當局及び主任教諭の厚意ある

助力によりて、各教室にて、これを各個生徒に配布し、各個の問題につきて大略の説明をなしたる後に、即坐におの〳〵の所思をその質問票の餘白に筆錄することを乞ふたのである。さうしてこの要請に應じて答辯を與へ呉れられたる生徒の數は、第一學年より第五學年に至るまで總計一千百三十二名、學校は東京市内の二校、廣島縣地方の一校であつた。

宗教的體驗の動機

第一問『神や佛を考へたことがあるか、あればどういふ機會であつたか』との質問に對して答辯をなしたるものの中にて調査の用に供したるものは一千百十九名の答辯であつた。その中にて『ありませぬ』『ない』と答へたもの五十三名、『まだほんとうに考へたことはない』と答へたもの五名、『別に深く考へたことはありませぬ』と答へたもの二名、『特に考へたことはない』と答へたもの二名、『何とも答辯を書かないもの』が十一名、都合七十三名ほどあつた。しかしながら、此等『神や佛を考へたことはない』と答へたものも、その實は、特別に神や佛につきて考へを深くしたことがないといふ意味で、一たびも神や佛を考へたことはなく全くそれに無關心であるといふ意味でないことは、其他の諸項に對する答辯にてよく知られることである。ただ一例（第四學年、イ、ミ、）にありては『神や佛を考へたことがあるか』との質問には何等答辯しないで、その次の『世の中に神や佛があると思ふか』の質問に對しては『ないと思ひます』と答辯したものがあつた。これは普通に世間で言は

れるやうな神や佛を否定したもので、言はば俗間に傳へられるやうな神佛はないものであると思ふと言ふのである。それ故に第六問の『神や佛といはれるものはどういふものであると思ふか』との質問に對して『ただ精神的のものだと思ひます、この神や佛の姿は人間の作つた像に過ぎぬと思ひます、私は姿を見ただけではちつともありがたくも何ともありませぬ』と答辯してゐるのを見て、その答辯の意味が察知せられる。又、その他の例のすべてにありて『神や佛を考へたことはない』と答辯せるに次ぎて『神や佛はあると思ふ』と答辯して居るのである。これによりて見ると『神や佛を考へたことがない』といふのも『別に深く神や佛の本質につきて思考したことがない』といふほどの意味に外ならぬのであるから、被驗者のすべては、一定の機會に神や佛を考へたことは確實であると言はねばならぬ。固より神佛の觀念は必ずしも常に宗教性感情を伴なふものではないから、神や佛を考へたから、と言つても、それがすなはち宗教の現象であるとすべきではない。たとへば、實際神や佛を考へたにしても、それを批判し、疑惑し、否定するやうな場合にありては、神佛はただ觀念として、そこに現はれたのみで、その人の體驗の内容となつたものでないことは明かである。余等は此の點に注意し、神や佛の觀念に伴ふて、それに對する敬虔・歸依・信順・依憑などの感情をあらはしたと認められるものをば宗教的體驗となし、如何なる動機に際して、それがあらはれたかを研究したのであるが、その成績を數字にて示すときは次の通ほりである。

（一）死亡

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
血族	三六	五一	二九	一一	九	一三六
姻戚	四	一一	四	—	二	二一
知人	四	三七	二三	九	二	七五
合計	四四	九九	五六	二〇	一三	二三二
百分比例	三一•〇八	三七•二	一九•二四	一六•六六	一四•二八	一〇•四九

(二)疾病

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
自身	一五	一七	二二	八	—	六二
他人	三三	一二	一一	五	三	六四
合計	四八	二九	三三	一三	三	一二七
百分比例	三三•一八	一〇•九〇	一一•三三	一〇•八三	三•二九	一一•四三

(三)苦惱

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
(イ)心配	五	二	二	—	—	九
(ロ)苦しい立場の時	二	五	六	七	六	二六

(ハ)困つた時	—	一一	一六	八	三	三八
(ニ)逆境に遇ふた時	—	—	—	—	—	二
(ホ)受驗の時	三六	八	三	一	—	四八
(ヘ)學課の出來ぬ時	一	一	—	—	—	二
(ト)惱みの時	—	二	—	一	三	六
(チ)人に惡く思はれた時	一	—	—	—	—	一
(リ)叱責せられたる時	二	一	—	—	—	三
(ヌ)罰せられた時	一	—	一	—	—	二
合計	四八	三〇	二八	一七	一二	一三五
百分比例	一三•一八	一一•二七	九•六二	一四•一六	一三•一八	一一•九三

(四)恐怖

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
(イ)夜道を獨行した時	一	一	—	一	—	三
(ロ)淋しき道を獨行した時	一	一	—	—	—	二
(ハ)物を恐ろしく感じた時	一	一	—	一	—	三
(ニ)盗が入つたと思つた時	一	—	—	—	—	一

合計	四	三	一	二	一	一	九
百分比例	一・〇九	一・二二	—	一・六六	—	〇・七九	

(五)喜悅

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
(イ)喜びの時	七	九	六	一	二	二五
(ロ)嬉しい時	一	—	—	—	—	一
(ハ)難有かつた時	二	—	—	—	一	四
(ニ)幸福を感じた時	一	—	二	—	一	四
(ホ)危難を逃れし時	一	—	—	—	—	一
(ヘ)受驗成績優等のとき	一	—	—	—	—	一
(ト)入學の時	二	一	—	—	—	四
合計	一五	一〇	九	二	四	四〇
百分比例	四・二	三・六六	三・〇九	一・六六	四・二九	三・四三

(六)悲哀

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
	一二	四	一六	二	五	三九

百分比例	三・二六	一・五〇	五・四九	一・六六	五・四九	三・四四	

(七)災難

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
	七	一	二	—	二	一二
百分比例	一・九二	〇・三七	〇・六八	—	二・九一	一・〇六

(八)願ひ事

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
	一〇	二	一	一	—	一四
百分比例	二・七一	〇・七五	〇・二四	〇・八三	—	一・三三

(九)守護を願ふて

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
	四	五	二	三	—	一四
百分比例	一・〇九	一・八七	〇・六八	二・五〇	—	一・三三

(一〇)善と思ふた事をした時

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
	四	—	三	—	一	八

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
百分比例	一・〇九	—	一・〇三	—	一・〇九	〇・七〇

(一一)惡と思ふた事をした時

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
百分比例	一九	八	六	三	三	三九
	五・二	三・〇〇	二・〇六	二・五〇	三・二九	三・四

(一二)思考

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
(イ)自然の崇高	一	二	二	二	五	一二
(ロ)未　來	一	—	—	—	—	一
(ハ)地球の生滅	一	—	—	—	—	一
(ニ)閑　寂	—	—	—	—	—	—
(ホ)不思議	—	—	二	一	—	三
(ヘ)世界の成立	一	—	—	—	一	二
(ト)生　死	—	—	—	—	—	一
(チ)內　省	二	一	二	—	—	五
(リ)靜　慮	—	二	五	二	五	一六
	二	二	—	二	二	六

(ヌ)力盡きたり と考へし時	—	二	三	一	四	一〇
(ル)考へ迷ひし時	—	一	二	—	三	三
(ヲ)人間の微小	—	—	—	—	—	—
(ワ)過去を顧みて	—	—	—	—	—	—
(カ)因　果	四	一	一	—	—	七
(ヨ)日本國に就て考へし時	一	—	—	—	—	—
(タ)種々考へのある時	一	—	—	—	—	—
(レ)奇　蹟	—	一	—	—	—	—
(ソ)心に就て考へし時	—	—	—	—	—	—
(ツ)無　常	—	—	—	—	—	—
(ネ)自分の性質を考へた時	—	—	—	—	—	—
(ナ)運　命	—	—	—	—	—	—
合　計	一三	一四	二〇	一〇	一九	七六
百分比例	三・五七	五・二六	六・八六	八・三三	二〇・八七	六・七一

(一三)聞法

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
(イ)講話	一一	三	一二	二	一	二九
(ロ)說教	一	—	—	二	—	三
(ハ)修身教授	三	一	一	一	一	七
(ニ)他人の談話を聞きて	一七	九	六	六	一〇	四八
(ホ)讀書	一〇	一〇	八	六	五	三九
合計	四二	二三	二七	一七	一七	一二六
百分比例	二一・五三	八・六四	九・二七	一四・一六	一八・七四	一一・一三

(一四)宗教の會合に列して

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
(イ)法話會	一九	一	二〇	—	—	四〇
(ロ)教會	一	三	二	五	四	一五
(ハ)日曜學校	七	二	二	四	—	一五
合計	二七	六	二四	九	四	七〇
百分比例	七・四一	二・二五	八・二	七・五〇	四・二五	六・一八

(一五)宗教の儀式に際して

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
(イ)法事	五	一	一	—	—	七
(ロ)供養	—	—	—	—	—	二
(ハ)讀經	五	一	一	—	—	七
(ニ)命日	三	三	一	—	—	七
(ホ)葬式	三	—	—	—	—	三
(ヘ)祭禮	—	—	—	—	—	一
(ト)墓參	四	二	—	—	—	八
(チ)盂蘭盆會	二	—	二	一	—	五
合計	二二	七	一〇	一	—	四〇
百分比例	六・〇四	二・六三	三・四三	〇・八三	—	三・五三

(一六)神社佛閣參拜

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
(イ)拜禮	四七	六	二一	四	三	八一
(ロ)神社佛閣の前を通る時	二	—	—	—	—	二
(ハ)佛間を通つた時	一	—	—	—	—	一
合計	五〇	六	二一	四	三	八四

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計	百分比例
	三●七三	二●五五	七●二	三●三三	三●元	七●四二	
（一七 雜類							
（イ）迷ひ子になつた時	二	—	—	—	—	二	一●六四
（ロ）リレー代表となつた時	一	—	—	—	—	一	三●〇〇
（ハ）心の落つきて居るとき	一	—	二	—	—	三	一●七一
（ニ）獨坐の時	一	一	—	—	—	二	一●六六
（ホ）事を成し遂げやうとする時	一	一	—	—	—	二	一●〇九
（ヘ）食事の時	—	—	一	—	—	一	一●九四
（ト）就床時	—	—	二	—	—	二	二●〇〇
（チ）日本歴史を讀みて	—	—	三	—	—	五	五●〇〇
（リ）遠足の時	—	—	—	—	—	—	—
合計	六	八	五	二	一	二二	二●二二
百分比例	一●六四	三●〇〇	一●七一	一●六六	一●〇九	一●九四	

此の如く高等女學校の生徒が神若しくは佛を考へたる動機は種々雜多で、百分比例の上にて、その數の多きものより順次に擧げて一覽表を造るときは、次の通ほりである。

神佛を考へたる動機	實數	百分比例
死亡	二三二	二〇●四九
苦惱	一三五	一一●九三
疾病	一二七	一一●四三
聞法	一二六	一一●一三
神社佛閣參拜	八四	七●四二
思考	七六	六●七一
宗教の會に列して	七〇	六●一八
宗教の儀式に際して	四〇	三●五三
喜悅	四〇	三●五三
悲哀	三九	三●四四
惡事と思ふた事をした時	三九	三●四四
雜類	二二	一●九四
守護を願ふて	一四	一●二三
願ひ事	一四	一●二三
災難	一二	一●〇六
恐怖	九	〇●七九
善と思ふた事をした時	八	〇●七〇
合計	一〇八八	一〇〇●〇〇

〔註〕奇零以下の數は四捨五入したるによりて總計一〇〇●〇〇に多少の不足あることを附記して置く。

(1) Hildegard Hetzer und Fritsch Frisch, Die religiöse Entwicklung in der Reifezeit. Archiv f. d. ges. Psychologie. 1928.

身體的苦痛

神や佛を考へたる動機の内にて、統計上その數の最も多かりしものは死亡・苦惱・疾病の三種であつたが、その疾病と死亡とは主に身體的苦痛に屬するもので、この年齡期のものにありてはその苦痛が勿論よく自覺せられる筈である。さうして疾病が重劇で醫家もこれを如何ともすることが出來ず、ただ死を待つて居るといふやうな場合に、偉大なる力をながめて、それにすがりて助けを求めやうとしたり、それにすがりて不思議にもその重き病が治癒したと信ぜられるにより、いよ／＼その力の偉大なることに驚異の心を起し、そこにこの偉大なる力をあらはすものが有りとして、それに神とか佛とかの名を附けるのである。この場合、神とか佛とかの名は家庭若しくは社會にて教へられたるものを、その儘に、自身に偉大なる力と信ずるものに用ひたるものであることは無論である。

近時、ヘツチエル及びフリツシユ(1)兩氏が成熟期の年齡に於けるものの日記四十通の中に宗教につきての表現を示せるもの六百二十七回を精査したる結果に據るに、その環境の事情は各別なるに拘らず、宗教の事項を問題とせるには一定の時期がありて、毎日記に宗教的表現を示せるものの各年平均數は次の通ほりであつた。

年齡	男子	女子
七歳——十二歳	〇・四	〇・五

(1) Starbuck, Psychology of Religion.
(2) 柳原貞次郎，宗教教育の一研究（今田氏に據る）
(3) 海老澤亮，宗教教育の心理的基礎
(4) 今田惠，宗教心理學（日本メソヂスト宗教教育叢書第九編）

十二歳——十四歳	四	二
十四歳——十六歳	三	三
十六歳——十八歳	七	七
十八歳——二十歳	二・五	三
二十歳——二十二歳	五	二・五

この表によりて見れば十二歳以下の兒童にありて、宗教につきて表現するものは殆ど無きに近いが、十二歳に至りて頓に宗教につきて表現する、殊に女子にありて數の多きを見る。その内、ただ一例にのみその日記の中に何等宗教的の表現をして居なかつたといふ。

この他、西洋にありては回心、我邦にありては入信の年齡の調査せられたものがあるが、回心とは急劇に宗教的自覺をなすことを指し、入信とは佛教に言ふところの發心と略ぼ同樣の意味にて、自覺的に宗教に關涉するやうになることをいふのである。スターバツク(1)の報告によれば女子にありては十三歳及び十六歳にありて回心が最も多數である。その始期は十歳にして十三歳まで急速に上昇する。柳原貞次郎氏(2)が我邦の基督教徒につきて調査したる結果によれば回心者は青年期に最も多く、男女を通じて最多なるは十八歳前後とするといふことである。海老澤亮氏(3)の調査によれば女子に於ては十七歳が最も多い。今田惠氏(4)は我邦の基督教徒に於ける受洗の年齡を調査し、受洗が十六歳より二十歳までの間に最も多數であることを示して居る。何れにしても、兒童にありて宗教の表現を認め得

ることは、小學校卒業の年齡期以後にあるものとせねばならぬのであるが、その宗教の表現が、外的に宗教の事項に興味を有するのみで、その他の生活事項と何等の關聯を有せざるものと、それが內的體驗によりてあらはれるところの眞性の宗教とは、これを區別して見ねばならぬことは勿論である。

余等が取扱ひたる被檢者は、すべて高等女學校の生徒にして、その年齡は十四歲乃至十九歲を算し、已に宗教的盲信の時期を去り、その宗教が外的の模倣と崇拜形式の取得とに終つて居るものではない時期であつた。疾病は固より自身に苦惱の甚しきもので、それに對して苦惱することは勿論、他人殊に血族のものの疾病をば自己の體驗に比較してその苦惱に同情せざるを得なかつた年齡であつた。さうして、それに對して到底人力の如何ともすることの出來ぬことを考へた後、その苦惱を除くために人間より以上の大なる力をながめて、それにすがらざるを得なかつたのである。さうして、それ故に、その神や佛と名づけるものに對して、眞面目に祈願し、哀訴し、信順し、又敬虔の心を以てこれに接したのであつた。ここに、その二三の例を次に抄錄しやう。

〔例〕（一）第三學年、ハ、マ。祖母の病氣の時神樣にお祈りしたのでなほつたことがある、ほんとに神樣は偉大な力を持ていらつしやると思つた。

（二）第二學年、ワ、ヨ。私達が病にかかるのも神が皆することだと思ひます。

（三）第三學年、イ、カ。病氣や怪我やいろ〳〵の惡運など、一番自分の信じて居る父母、先生にもどうにも出來ぬことのあつた時に神や佛が頭に浮ぶのであります。

（四）第三學年、オ、サ。病氣の時に佛樣神樣が早くなほして下さればよいのにと思つた。

（五）第一學年、ノ、ミ。私の母が重い病に罹つたとき、私は一心に神や佛をおがみました、そのときめがあつてか、死にさうになつた母が今では元氣になつたのです、私はそのとき、神や佛は本當に私達の願をおきき入れになれるのかと、私は何ともいへないやうな氣がしました。

（六）第二學年、ロ、イ。兄が重大な病氣でもはや生きることが出來ないかも知れない時に、私が東京に居たとき、危篤といふ電報が來たので、どうか私が歸るまでも生きて居らつしやるやうにと思つたとき、神に祈らずには居られませんでした。

（七）第一學年、ア、ヒ。親戚のものが足に針をさしてこまつたとき巢鴨の御地藏樣のお札をのみ、足にはりますと、不思議に針がとれましたので、佛を考へたことがあります。又よくあぶないことなどがあつた時は自分のつけてゐたお守がわれてゐたりして居ますから佛樣を考へました。

（八）第二學年、オ、イ。他人の病氣の場合に、もうたすからないと思つて居たのに病氣がなほるので神や佛を考へたことがあります。

（九）第一學年、カ、ミ。私の祖母が腎臟をわづらつたとき、私は毎日々々入谷の不動樣へお願ひに參りました。

（一〇）第四學年、エ、ヒ。人の病氣又は重大の時神樣がどうにかして下さつたらと考へ又は祈る。

（一一）第一學年、ナ、ヤ。母が大變出血致しましてあやういと言はれました時に神樣や佛樣を考へ

ました。

(一二)第一學年、ミ、シ。私が病氣の時、今死んだらどこへ行くのかと思つたからです。

(一三)第一學年、マ、サ。私が病にかかつたとき、今病がひどくなつて死んだら神樣や佛樣がどうして下さらうかと思つた。

(一四)第一學年、ヤ、カ。病氣になると、色々の神樣があります、その中の神樣一とつを信じてなほすのであります。

(一五)第一學年、テ、ヤ。ある信心深い人が私の家の人が病氣にかかつたといふ夢を見たといひました、その時はほんとうに神佛をつく〴〵と考へて見ました、本當に夢の知らせなんかあるのか知らと。

(一六)第二學年、ク、ヒ。一昨々年の夏、私と妹と弟との三人が赤痢にかかつたとき、私と弟は割合に輕かつたのですが、妹はとても重く、もう助からないだらうといはれたほどでした。私は「ベット」の上で、もし私が六十年生きて居られるものならば、その三十年をば妹に上げますからどうぞ妹が助かりますやうにと神樣や、亡くなつたお姉樣に一心に祈りました、妹の病が峠をこしたと聞いたとき、私の喜びは非常に神樣や佛樣をありがたく思ひました。

(一七)第一學年、ヒ、ト。私が小さいときに病氣になつてお醫者がもう助からないとおつしやつたのを、或人が神樣を一心一向になつてすがりさへすれば神樣が我身の苦しさをお受けになつて下さ

いますから、おすがりなさいと母樣に敎へ下さつたので母が一心にすがつたら私が今のやうに丈夫になつたと、母樣がおつしやいました。私はそのとき、神は他界にあるといふことをはつきりと知りました。

(一八)第一學年、ア、ハ、。私の家の前の小さい子が生きるか死ぬるかのとき、その子の父や母が佛樣に毎日〳〵お願して佛樣に差上げたお水をその子にのませたら、その子がだん〳〵よくなつたといふ話を、私はその子の母から聞いたとき、佛樣のありがたさがよくわかりました。

(一九)第四學年、フ、カ、。病人のあるとき、母等が神に祈るのを見るとき、少しづつ神佛を考へることがあつた。

(二〇)第一學年、カ、ア、。父母のもとを離れて一人で居るとき、お腹がいたくなつたとき等、神樣を考へました。

この例の多くは、疾病に際してその治癒を自分が考へたる神佛に祈り、神佛にたすけられて治癒せることを感謝し、その不思議の力に驚異の念を起したのである。中には疾病を起すのは神の所爲であるとなし(第二例)、佛樣や神樣が早くなほして下されば善いのにと自分勝手のことを考へ(第四例)、或は疾病の將來につきて考へ、今死んだら何處へ行くのかと心配した結果、神佛の助けを求めむとし(第十二例)、病が重くなつて死んだら神樣や佛樣がどうして下さらうかと、自分の未來の不安に對する神佛の意志を忖度したものもある(第十三例)。

○

疾病に比して、神や佛を考へる動機となつたことの多きものは死亡であつた。死亡は疾病よりも一層悲慘なる人生の事實であり、親しき人が忽にして目の前から消滅するのであるから淋しいといふ感情や恐ろしいといふ感情などが、これに伴なふてあらはれるものであるから、この機會に神や佛を考へることの多いのはむしろ當然のことであらう。しかしながら、答辯の大多數にありてはただ單に『他人の死亡に際して神や佛を考へた』と記載せるのみで、その事由を明かにすることが出來ぬのであるが、その中、比較的多數の場合にありては、その事由を略記したものがある。その二三の例をこに鈔錄する。

〔例〕(一)第三學年、ヨ、ル、。お祖母様がおなくなりになつたとき神様が迎にいらしたとおつしやつたので神様を考へました。

(二)第一學年、ニ、シ、。叔父様が亡くなられたとき私は非常に悲しみましたが、佛様が迎に來たのだと思つて佛様の事を考へました。

(三)第三學年、オ、ヨ、。父の死去後に佛の前にすはり、この中に魂があると母から聞き、いつも佛の前で、かならず佛様のことを考へました。

(四)第三學年、キ、シ、。肉親の人がなくなつたとき、何となく寂しい心持になつて、神や佛にすがりたくなつた。

(五)第一學年、タ、マ、。私がとても可愛がつた赤坊の弟が亡くなつたとき淋しくて泣いたりして神や佛を考へました。

(六)第一學年、シ、ミ、。私の本當の伯母様が亡くなつたときに、机に向ひながらじつと考へた。佛といふものはどんなものであらうなどと思ひつめた。

(七)第一學年、ヒ、ヒ、。二人も妹が死んだときに、お經を聞いて、つく〴〵と佛様のことをありがたいものだと考へました。

(八)第一學年、ハ、ミ、。父が今の世を去りし時佛様になつたのかしらと思つた、そして父が私の神様のやうにいつも守つて下さるやうな氣がします。

(九)第一學年、ク、チ、。親類の方がなくなられた時、私達兄弟はだれも死なず、丈夫にねることを思つた時、佛様が私達をお守り下さつてゐるのだと佛様の有難さを感じました。

(一〇)第一學年、コ、チ、。弟や祖父の亡くなつた時神や佛がゐらつしやるのならどうしてたすけて下さらなかつたと考へた。

(一一)第三學年、カ、テ、。姉が死んだ時にほんとうに神や佛があるならなぜたすけて下さらないのかと思つた。

(一二)第三學年、ミ、フ、。何故父を私達から奪つてしまつたのかと思つた。

(一三)第一學年、カ、ケ、。親しい友が亡くなられた時どうして神はあの方を！と思つた。

(一四)第一學年、ヨ、シ、。他家のお葬式を見た時、何故神様はあの人を死へ導いたのだらうと思ひました。そして何故その人はもう世間へ現はれることが出來なくて佛になつたのだらうと思ひました。

(一五)第一學年、モ、ユ、。母が亡くなつた時、もし本當に神や佛があるのならそんな意地悪な事をしないであらうと思ひました。

(一六 第二學年、セ、ミ、。人が死んだ時にお母さんが『あの人は立派な人であつたから佛様になられる』と言はれたので私はどこにどんなにあるのかと思つた、すると或人が此の世、此の空氣の中にいつもいらつしやると言つた。

(一七)第一學年、ム、ヒ、。弟が死亡した時弟も佛になつたと思ふと、嬉しくもあり悲しくもあつた。

(一八)第一學年、ヨ、キ、。私の弟がなくなつた時きつとあの弟も佛様になる事でせうと思ひました。

(一九)第一學年、ニ、テ、。おなくなりになつた時もうあの方は佛様になつておしまひになつたなどといふ場合。

(二〇 第二學年、ム、カ、。祖父、祖母、親友、伯父等亡くなつた時に、此の方は本當に神や佛になるのであらうかと考へた、が私にはたゞ不思議とのみ思はれた。

(二一)第三學年、マ、キ、。懐しい母に死に別れ、親しい友にゆかれて、私はしみ〴〵とした佗しい

心でその青ざめた顏を見た時、『もう此の世の人ではない佛様にお成りになつたのだ』と胸一杯の悲しさをこめて合掌しました。

(二二)第一學年、イ、ヒ、。祖父が死なれて、今は佛様の所へ行つておられるだらうか、佛様の近くにおられることだらうと何時も思つてゐます。

(二三)第三學年、サ、カ、。祖父の亡くなつた後佛壇に禮拜するごとに祖父は今どうなつてゐるのであらうか、神佛とはどんな事であらうかとさびしさにたへられず色々と神佛について考へたことがあります。

(二四)第二學年、ニ、ヨ、。人の死目にあつた時臨終間際になつて手を合したのを見て大切なものだと思ひました。

(二五)第二學年、タ、ヤ、。私のお祖母様が亡くなつた時は小さい時でしたが、神様は私達の運命をおさだめになつて、いくら泣いてもわめいても神様がおめしになつたら私達は遠い國に行つて死んだ人は佛になると思つてゐました。今考へると少々矛盾して居て、もつと深く考へて修養の本など讀んだら本當のことがわかると思ひますが、はつきりした考へは持ちません。

この例によりて見るに、普通の場合、親近の人々の死亡に際して、悲慘の情に動かされ、自身の死亡に考を及ぼして恐怖の念を生じ、偉大なる力にすがらうとする感情があらはれるのを常とするが、それに併びて、種々の心の狀態を呈することが知られるのである。或は死亡を以て神や佛が迎に來た

のだと、多分説教などにて聞き知つたことを思ひ出して悲しみの心を和らげ（第一例、第二例）、或は人が死ぬれば佛となるといふやうなことを聞いて居つたものが、人の死亡に際して果して佛になつたか、又佛とはどんなものであるかにつきて考へ（第十六例、第十八例、第十九例）、或は兄弟が佛になつたと嬉しい心持になつたものもある（第十七例）、或は又、人の死亡に際して何故にその人を此世から奪つたか、何故あの人を死なしたか、若し佛や神があるならばなぜ助けて下さらないのかと苦情を言ふものなどもあつた（第十一例、第十二例、第十三例、第十四例、第十五例）。

精神的苦痛

精神的の苦痛に際して、神や佛を考へたものは疾病に際して神や佛を考へたものよりも、その數が多かつた。さうして、その中にも受驗の時に苦慮したことが、神や佛を考へる動機となつたことが多かつた。

〔例〕（一）第一學年、ハ、ユ、。入學試驗の時佛様や神様にお參りをした、そしてパスしたのできつと神や佛が私のことを聞いて下さつたと思つた。

（二）第一學年、ア、ヤ、。此の學校に入るとき、くじがあたるやうにと神や佛に願つたことがあります。

（三）第一學年、コ、ユ、。試驗の時書き終つてから神佛に祈ります。

（四）第一學年、フ、エ、。試驗の時忘れた字を思ひ出した時神佛は有難いと思ひました。

（五）第一學年、オ、マ、。試驗の時、時間が餘つた時など、しらべてゐると、悪い所が分つた時などに、神や佛が助けて下さつたのだと思ひました。その事が悪かつた時などは、自分がいつか悪い事をしたからその罰だらうと思ひました。

（六）第一學年、シ、ミ、。試驗を受ける時に神様や佛様だつたらよいがと思ひます。

（七）第一學年、カ、マ、。試驗の時に、佛様に拜んだらよいお點を取つたので佛様は有難いと思つた。

試驗を受けて、その成績が善ければとの念願と、落第若しくは成績不良であつてはとの心配から、神や佛にすがらうとする心が起つた。いかにも女學校生活に相當の精神的苦痛である。

それから何等かの事故に遭遇して困却したときに、神や佛が考へられた場合もその數はかなり多かつた。この場合、その困却した事實も決して一様でなかつた。又神や佛を考へた心持も甚だ種々であつた。次にその二三の例を擧げる。

〔例〕（一）第二學年、ワ、フ、。何かとても困つたときにこんな時に神や佛がいらつしやつたらどんなによいかと思つたことがある。

（二）第四學年、ト、ノ、。自分が苦しんでゐる時、悲しい時に神様や佛様がこれをたすけて下さつたらなどと考へます。

(三)第一學年、ス、ヤ。勉強が出來ないと、ほんとに神佛が居ればよいと思ふ。

(四)第一學年、ア、ム。よく勉強しても出來なかつたりした時は、神樣どうしてよくしてくれなかつたかと思ふやうな場合です。

(五)第二學年、ア、テ。難かしい勉強又は仕事がある時等神樣のやうだつたらよいと思ひます。

(六)第三學年、フ、フ。自分が精神的に苦しい時や問題にぶつかつた時人間以上のことが出來ると思はれて崇高とされてゐる神や佛のことを考へ出させてくれる。

(七)第一學年、ハ、ケ。大變心配し困つた時お祈りをして、心が安らかになり心配したこともよくなつた時有難くなつて考へました。

(八)第二學年、ヨ、ケ。自分が困つた時『神樣助けて下さい』と言ふが又自分にとつて一生懸命の時は神樣や佛樣が守つて下さると思ひ氣が輕くなつて好く出來る。

(九)第二學年、ヒ、ト。或一つの事件に對して考へ、そして苦しんだ時、始めて信仰に頼つて行くより他はないと知りました。その時始めて神や佛といふものを深く感じました。

(一〇)第一學年、オ、サ。何か困難な場合に出會つた時、神や佛は何でも知らない事はないのですから、神や佛に聞きたいと思ふ場合があります。

(一一)第四學年、タ、ミ。自分の最も困つたことに出會つた時に、他の者に頼るものがない場合は自然神を考へる、佛はあまり考へない。

(一二)第二學年、ウ、ス。自分が困つた時、自分にとても出來ないやうな時、神樣のお力にすがると心強く思はれます。

(一三)第一學年、イ、ヤ。むづかしい問題を考へる時、神や佛はこんなむづかしい問題でも解けるだらうかと考へたことがあります。

かやうにして、神や佛の助けを求めると言つても、それは概念的に教へられたる神や佛に對してすることで、その內部の要求から湧き出でたる神や佛に對して祈願するものであると認めらるべき場合は少なかつた。しかしながら、さういふ場合でも、困却に際して神や佛を考へることは倫理的の意味に於て敬虔の心をあらはすことのあるのは無論である。

〔例〕(一)第二學年、セ、ミ。何か自分が苦しい立場に置かれた時や、又悪いことに出會ふ度に私はいつも神を考へます。そしていつも神は完全だ、その子供の私も完全だ、この目に見える私は本當の私でないのだと思ふと或る一つの大きな喜びを見出します。

(二)第二學年、イ、ケ。自分がつらい所におちいつた時に神樣を考へてその事を切りぬいて行きます。

(三)第二學年、ト、ト。私は悪いことはして居ないのに、人が私の事を悪く言つた。その場合に神や佛は私が悪くないと知つて居られると思ふ時に神や佛を考へた。

(四)第一學年、シ、ト。私が何もしなかつたのですが友達に悪く思はれた時『何と思はれたつてい

いわ、私の正しいことはちやんと神様や佛様が知つて居られるから』と考へたことがあります。

悲哀及び災難に際して神や佛のたすけを求めやうとしたものもある。その心持は固より他の場合の困難に於けると同様である。

恐怖が宗教的感情を起すことが多いといふことは、普通に唱道せられて居るところであるが、余等の例にありてはそれは淋しき道をあるいたときの恐怖並に恐ろしく感じたときなど、僅々の數に止まつて居る。(全人數の〇・七九%)

此の如き精神的苦痛の種々のものが神や佛を考へることの動機となつたことは、第一學年に最も多く、學年が進むに從ひて、漸次にその數が減却する。これは固よりその環境の狀態に相應するものであると考へねばならぬ。叱責及び懲罰に際して神や佛を考へたことの場合の少ないのは、その精神の發達の程度に關係するものであらう。

精神的安樂

精神的の苦痛(心配、困却、苦惱、逆境、叱責、懲罰等)に際して、神や佛を考へたものに比較すれば、その數は固より尠小であるが、しかも全人數の三・五三%に於て、喜悅が神や佛を考へる動機となつたのである。

【例】(一)第二學年、ウ、イ。私達が毎日の三度三度の食事も十分腹一杯に食べて、樂々として生

活してゐますが、もしも神様や佛様がなかつたならば、さまよつてゐて、世の中は、治まらないと思ひました。

(二)第二學年、シ、カ。神や佛がなかつたら私達は毎日の生活に困ることだらうが神や佛があるから樂々と日ぐらしが出來るのだといつも神や佛の事を思つてゐる。

(三)第一學年、カ、リ。弟が廊下から落ちた時に、玩具の自動車がそばにあつた。けれどそれとすれすれになつて落ちた時ほんとうに神様や佛様がお守りして下さるので自動車にぶつつからずにすんだのだと思ひました。

(四)第三學年、ス、ハ。何時の間にか神や佛を教へられて居り、(お母様やお姉様から教へられたのだと思ひます)こまつた時や、嬉しい時には、必ずおいのりを致しました。今でも……。

(五)第三學年、モ、リ。自分が危險からのがれた時に佛や神の事を考へた。

(六)第二學年、タ、フ。私達が何時も悲しい時、又嬉しい時に此れは皆神や佛の仕業だらうと思ふ。

(七)第三學年、ワ、ト。うれしい時、かなしい時。嬉しい時は神や佛の力だと、悲しい時には、神や佛のお力をおかし下さいと。

自分の生活につきて深く考へ、しかも自分の力の微弱なることに氣がつきて、かやうに神や佛に對してその恩を謝するの心が起つた例もある。危難をのがれて嬉しかつたときにそれが神や佛の力によ

(1) Voss, Das Werden kindlicher Frömmigkeit, Zeitschr. f. pädag. Psychologie. 1927.
(2) Grunwald, Pädag. Pscyhologie. 1925.
(3) Miehle, Die kindliche Religiosität. 1921.
(4) Lechner, Die Religiosität und Suxualität im Kindesalter. 1929.

つたものであると考へた例も尠なくなかつた。

聞法

宗教の講話若しくは説教を聽聞し、又は宗教に關する書籍を讀み、或は他人が宗教につきて話せることを聞きて、それがために神や佛を考へたと記述せるものの數は割合に多かつた。(全人數の一一・一三%、すなはち約一割强であつた)。しかしながら、それはただ宗教的觀念の外的理解に止まるのみでその心の内に宗教的感情が動いたものは尠なかつたやうに思はれる。勿論、宗教性感情の發呈は宗教的觀念と同時にあらはれるものであるが、しかしながら此の如き宗教的觀念の外的理解にありて、恭順・從屬・讃歎・謙遜・法悦などの宗教的感情が常に必ずそれに伴なひて起るものとはせられぬ。フオツス[1]、グルンワルド[2]、ミーレ[3]、レヒネル[4]等の諸家は兒童の多數のものはその學齡期にあつて已に内的歸依の頂點に達することがあると説いて居るが、これ等諸家の説には反對の意を表するものが多い。余等の例にありても亦、聞法によりて、眞に宗教的感情をあらはしたと確認すべきものは認められなかつた。尠なくともそれはただ少數の例に於てのみ認めらるべきものであると信ぜられるのである。

宗教の會合に列するとか、宗教の儀式に際してとか、神社佛閣の參拜とかといふやうな事項も廣き意味にていふところの聞法に外ならぬものであるから、それが果して常に宗教的感情をあらはしたの

であるかどうかは、更に個々の場合につきてこれを精査せねばならぬことである。

〔例〕(一)第二學年、ハ、チ、。皇太神宮や、明治神宮に參拜した時自然に頭が下ります。そんな時とても有難い氣持になります。

(二)第一學年、ナ、フ、。私は神や佛をとてもあらたかなものであると思ひます。それは神前、又は佛前に額いた時の氣持であります。

(三)第一學年、ナ、サ、。神社やお寺などにおまゐりに行つた場合など、神や佛はありがたいものだと思ひます。

(四)第一學年、ナ、ク、。考へたことがあります。それは神や佛の信仰や尊さ等を考へた事があります。お佛間に入つて佛の前で拜む時には何時も神や佛の事が自然と頭に浮んで來ますので時々考へます。

(五)第一學年、ミ、ハ、。みのり會のあつた日、自分も眞の道を進んだならば必ず神樣の目に入つてゐるかと思つた。

宗教の講話若しくは説教と言つても、演者若しくは説教者の人格や叙述の態度などにも關係して、これを聽聞するものに對して影響を致すことに著しき差異を示すことは言ふまでもないことである。しかしながら、何れにしても、聞法によりて起りたる宗教的觀念が果してどの位の程度までその人に宗教的感情をあらはすやうに感作するものであるか、別に詳細に調査せねばならぬことである。

宗教的思考

神や佛につきて思考することは、推理的に出來ることであるが、それは尋常の思考の形式に屬するものである。宗教的思考と名づけられる場合は、それが直觀的にあらはれ、尋常の思考のやうに推理的のものでなく、早く言へば神や佛が不思議に創造せられるのである。さうして、ここにそれを不思議といふのは、それが尋常の推理によらずして、根本に動くところの感情の强きがために、さう思考せねばならぬのが不思議と感ぜられるからである。

それ故に、外的に宗教的思考と思はるるものでも、內的に見れば推理的に神や佛につきて考へたに過ぎぬものもある筈である。余等の場合にありては、被檢者が已に相當の年齡に達して、その思考の作用はかなりに發達して居るのであるから、思考の上から神や佛につきて考へたことを記述したものが少なくなかつた（全人數の六•七一%）。その著しきものを擧げて次に示さう。

〔例〕（一）第二學年、ス、ユ、。深山の中の靜寂の中に、美しいけがれない自然にひたる時。

（二）第二學年、ナ、ス、。日本が戰爭で負けさうな時に、よく神風が吹き、日本が勝つことが出來たといふやうな時に不思議でよく神を考へたことがあります。

（三）第四學年、イ、シ、。常にこのことについて考へてゐる。しかし偶像ではない。大自然の無限、永久、善、美などに覺めかけて來た頃から、自己の小さい事を知り、苦しんだ時、殊にこの偉大な

力について考へた。

（四）第四學年、オ、レ、。夏の夜等、空にある星について話し合つたりして、何か目に見えぬ大きな力を感じました。宇宙の力とでも言ふのでせうか。兎に角、人力ではかり知られぬ偉大な力が此の宇宙の間に働いてゐる事だけは、おぼろげながら信じてゐます。神、佛等はやはりこの大きな力の事ではないでせうか。

（五）第五學年、フ、ア、。偉大な自然に接した時、何かしら大きな力が自分に働いてゐるのを感じる。考へやうに依つてはこれも神佛の力と思へるのではないだらうか。又祈つた後の心身が何とも言へない安らかさを得るのも神があるからこそと思ふ。

（六）第五學年、ハ、ソ、。靜かな寂しいばかりの自然にかこまれて自分よりもつともつと不幸な人々の中に入つて私は本當に感謝するといふ事を覺えました。この時私は神を肯定することが出來たのです。

（七）第三學年、シ、イ、。一番神を考へた事は、去年の夏、岡山の金光樣におまゐりした時である。私にはあの時位神を考へた事はない。

（八）第五學年、ニ、マ、。どういふ機會と言つて具體的な機會ではありませんが、私の心の中に何か大きな力にすがりたい熱望が起つて來たのです、そしてそれが何であるかを考へ考へして得たのが神佛だつたのです。

(九)第五學年、ミ、タ。父のない家庭の淋しさをしみ〴〵と感じるやうになつた時一番強く考へました。

(一〇)第二學年、ヤ、ヨ。それは自分の心を見る時に、惡いことをしてゐると、良心に恥かしいと同時に神佛にも恥しいと思ひます。

(一一)第三學年、テ、ハ。ただ自分と言ふものはどんなものであつて、どういふ位置にあるかなどと思つて居りましたら、神が浮び、神より偉大なものはないと考へました。佛はないと思ひます。

(一二)第三學年、シ、ユ。時々、夜空を見上げる時にふと考へてみる。

(一三)第一學年、テ、エ。地球がどうして出來たかと思ふ時考へる。

(一四)第一學年、オ、ア。此世はどうして始つて何時終るか、又生死を考へる時神佛を思ひます。

(一五)第二學年、タ、シ。私が死んだら何處へ行くのであらうか、と思つた時神佛を考へる。

(一六)第一學年、イ、イ。死や生のことを考へた時に思つた。

(一七)第二學年、ミ、ユ。人の生命に差別のあることや、又いやな出來さうもない仕事を命ぜられた時、つく〴〵神や佛が私達の心にゐらして下されば出來ない事はないと思ひました。

(一八)第三學年、ナ、カ。人生の果敢さを知つた時つくづくと神や佛を考へずには居られない。それはいろ〳〵な方面があるが此所では書き盡くせない。草木の伸びて行く時、自分に善いことが出來た時に考へる。

(一九)第二學年、ミ、ミ。自分の力、考へが盡き、自分をどうしたらよいのかと考へた時、又は毎日の自分の生活の幸福を知つた時本當に靜かな氣持で考へます。

(二〇)第二學年、フ、ト。自分自身の力を頼り得なくなつた時、どうしても神や佛を思ひます。けれどもそれは必ずしも神佛といふはつきりした對象をもつて祈つたのではありませぬ。

(二一)第四學年、ウ、ケ。自分一人で考へて、如何してもその解決が分らなかつた時、自然祈る氣持になり、何とも言ひやうのない力が湧いて來る、その時神とか佛とかいふ本態は、分らないけれど何かあると思つたことがある。

(二二)第五學年、セ、ム。幼い時よりも成長するにつれて神佛といふはつきりした考へはないにしても、我々人間の如何に小さく何も出來ないものであるかをつく〴〵考へるやうになりました。私共人間がどんなに偉がつたところで人間は人間だけのものであるといふことを知つてこの宇宙間の絶對な力を自然に於て、又人間の運命を考へた時に、ひし〳〵と感ぜさせられます。

(二三)第三學年、ノ、ミ。私は四年頃から神を考へました、人と異つた複雜な周圍をもつて生れて來た私は自分の運命を考へる時何時も出て來るのは神樣と言ふことです。佛といふことはあまり考へませんでしたが近頃養父母を亡ひ佛も考へてみました。

(二四)第四學年、ヒ、カ。人が生れるかと思ふと又死ぬ者がある、運命に就て考へる時神佛を思ふ。

以上の例によりて見られるが如く、深山の靜寂なる自然の境に接して靜思せるとき、大自然の無限につきて考へたとき、天體を見てその偉大なることに考へ及ぼしたときなどに神や佛につきて考へることは已に高等女學校の初學年のものにありても、起るものであることが知られる。內省によりて自己の微弱につきて考へたる場合に偉大なる力の助けを求むる心も亦この年齡のものに起る精神の現象である。ただこの場合問題とすべきことは神や佛と名づけられて居るものが果して如何なる本質のものであるかといふことである。このことに就ては後章にこれを叙述する。

神佛の存在

『世の中に神や佛があると思ふか』との質問に對して、答辯したるもの總計一〇九五例の內容をば、その多きものより序列すれば次の通ほりである。

答辯	實數
有ると思ひます	八六
有る	九三
有るか無いか不定	七四
無いと思ひます	四六
無し	一七

全く答辯せざるものが十六例ほどあつた。しかしながら、その唯一例（第四學年、サ、キ、）に於てのみ、神や佛を考へたことがあるのみで、祈つたこともないと記してあるのを除くの外、餘の十五例にありては、その殘らずが、他の欄內に於て、疾病、災難或は困却の場合に神や佛に祈願したと記して居るのであるから、それ等のものは世の中に神や佛があると思ふて居つたのであるとせねばならぬ。

これに次いで神や佛が無いと明瞭に答辯せるもの十七例にありてもその唯一例（第四學年カ、ハ、）を除くの他は、すべて一定の場合に神や佛に祈つたと記してあるから、神や佛が世の中に無いといふのもそれはその姿がないといふほどの意味であることが知られる。

神や佛が無いと思ふと答辯したるものは四十六例ほどあつたが、その中には問題の意味を狹く取りて現實の世には神や佛はない、神や佛は天國極樂にあると答辯したものが二例（第三學年シ、ユ、。第二學年シ、カ、）ほどあつた。その他の場合にありても、神や佛が無いと答辯した意味は、既成の宗教の形式の上に傳へられるやうな神や佛が世の中に無いといふことであることは、その他の事項に對しての答辯を參考すればよく知られることである。中にはこの理由を示したものもある。

〔例〕（一）第一學年、ヨ、シ、。唯世間の人々は昔からの傳へで、有るものと思つて、神や佛を信じて居るのだらうと思つて居ます。

（二）第二學年、タ、フ、。無いと思ひます。神佛はすべて皆我々の心の中にやどつて居て下さると思

ひます。

(三)第三學年、シ、ユ、。ないと思ふ。人が正直にして居たため後に神がおすくひになつて金持になつたと言ふ話を聞くが、それは自分が何も良心に恥じない事をして實直に生活した爲だ。だからもしあるとすれば良心の事を神や佛といふのではあるまいか。

(四)第四學年、ヒ、ヨ、。無いと思ふ。もしあれば世の中はもつと美しくある筈だ。冷たい運命にもてあそばれたりする人はない筈だ。

(五)第四學年、シ、タ、。世の中に神や佛があるとは思はない。神佛は要するに心の中にあるものだ。

これ等の例によりて明かに知られるが如く、世の中に神や佛がないと答辯したる意味は全く既成の宗教の形式の上にて傳へられたる偶像がないといふ意味に外ならぬものである。

○

神や佛がある若しくは有ると思ひますと答辯したるものは一千百三十二名の内にて九百七十九名の多數に上ぼつて居る。それに無い若しくは無いと思ひますと答辯したるもの、並びに何等答辯せざるものの内にも神や佛に祈つたことを記して居るのを併せれば、大體に於て、被檢者の殆ど全部にありて、神若しくは佛と名づくべきものの存在をば自から覺知したことは疑を容れぬことである。固よりその覺知したことの内容につきては更に精査を要することで、後章に於て、それに就て叙述するが、

ここに參考の資料として、神や佛があると答辯したものの中に、その理由を擧げてあるものの著しきものを鈔錄しやう。

〔例〕(一)第一學年、カ、ソ、。神や佛がなければ私共は暮して行かれませぬ、否日本帝國世界中の國が亡んで仕舞ふと思ふ。

(二)第二學年、ミ、ミ、。私の心には確かにあります、そして、いつも私を見守つて居て下さいます。

(三)第五學年、オ、キ、。あります、言ふものでなく偶像ではないのです。

(四)第一學年、マ、マ、。ある、或人が眞心こめて一生懸命すれば到底出來ないと思つて居たことでもお助けによりて完成することが出來るから。

(五)第一學年、コ、ツ、。有ります、靈魂といふものがあるそうで、ある本を讀むだとき、世の中に神や佛があつて何時も私の家に居るやうな氣が致します。

(六)第二學年、カ、ト、。始めは、何となく信じられぬ氣がしてゐたが、母、姉と共に教會へ通つてゐると、この世には神や佛がなくつてどうして、私達はこんなに暮せるかと思ふやうになりました。私は、この世には、必ず神佛がいらつしやり、常に私達を見つめて居られると信じて居ります。

(七)第三學年、ミ、コ、。あると思ひ、又そんなものはないんだと思ふこともあります。お父樣が御病氣におなりになつた時に、毎晩神樣においのりをしたら、とう〳〵おなほりになつた時、つくづく神樣がいらつしてよかつたと思ひました。又、いくら自分がおいのりをしてもかなへられなかつ

た時にないと思つた。

(八)第〇學年、〇、〇。あるとも思はれないとも思はれますが、信心すれば神佛はあると思はれてくると思ひます。

(九)第五學年、ウ、ア。あるともないとも申せると思ひます。すなはち其の個人の精神態度によるものと思ひます。神や佛があると信じた人には神佛は存在します。それですから無神論者に神佛があると强調する事も不可能であると思ひます。私は神佛はあると思ひます。

(一〇)第四學年、オ、ミ。無いとは斷定出來ませんし、はつきりした信念も持つて居りません。問ひつめられれば答に窮しますが、前の様に、ある大きな力が存在してゐる事は事實だと思ひます。

(一一)第五學年ミ、タ。あるとも思ひないとも思ひます。信仰をまだ持ち得ぬ爲にないと否定することも、又あると信ずることも出來ません。只此の世の中に於て人間以外の大きな力があるといふことだけは常に思つてゐます。けれども、それを神とか佛とかいふよりも自然といふ言葉で呼びたいと思つてゐます。

(一二)第三學年、ス、ヨ。小さい時はあると思つてゐました。今は無いとも思ひませんが小さい時よりうすらいで來て居るやうです。でも心であると思つて生活して居るのですから今はあるものときめて居ります。

(一三)第三學年、オ、カ。神佛があるか否かは私の小さい時から考へて居る問題ですが、今だには

つきりわかりません。良心のひらめいて居る時にはその人の心の中に神佛があり惡心の出しやばつてる時は世の中には神佛と名のつくものはないと思ひます。

(一四)第三學年、マ、ヨ。神や佛のことを考へると、今はつきりとしなくなりますが、小さい時からの考へで、ないとは言ひ切れません。頭の中はないやうに思ふ時もありますが、心のすみで、神佛に祈る心のあることを思ひます。

(一五)第二學年、コ、ヒ。あると言へばあり、無いと言へば無いものです。あると言ふことにばかり心をおくのはよくなく、無いといふのもいけません。

(一六)第三學年、サ、ヒ。子供の頃はあると思つてゐたけれど、現在は、絶對にないと思つてゐる。しかし無いと思ひながらも、祈らずには居られない所をみると、ある大きな力にすがらずにはゐられない氣持を、自分は意識せずに持つてゐるらしい。

(一七)第二學年、ワ、フ。世の中に本當に神や佛はないけれども人々が神や佛といふものを心の中に想像してゐるのだと思ふ。

(一八)第一學年、タ、ヨ。世の中にはないと思ふが、一つ〳〵の心は、神や佛がまもつて下さると考へてもいいと思ふ。

(一九)第三學年、〇、〇。私は神様や佛様のあることは人々に聞いたりして有るやうな氣も致しますが、唯宗教問題でなく人の心の中に神佛が住んでゐるのではないでせうか、明らかな意識と言つ

たやうなものはありませんけれど、心の中の良心がそれだと思ひます。

(二〇)第三學年、イ、カ、。私には神や佛があるかないかと言ふ事が、大層大きな不思議です。けれど、さういふ事を、あくまでもつきとめて「ない」とか「ある」とかいふことをちやんときめたくはありません。私達の空想の中にある「おとぎのくに」や天國のやうに、私達の心の中にあると思ひ、いつまでも、さういふ風に思ひたいと思ひます。

(二一)第二學年、タ、セ、。言葉だけある。

(二二)第四學年、ニ、ス、。よくわかりません。神とか佛とか死など考へると堪らなく不思議な心細い氣がします。しかし、私達を引つ張つて良い方に導かせる何ものかがあると思ひます。

(二三)第二學年、コ、イ、。家がクリスト教である私はそんな事を考へてはいけないと思ひつつも本當に神様がおいでになるのかしらといふことは幼稚園の頃より前からも考へてゐました。私は未だ半信半疑でゐます。これも信仰が淺いからでせう。

(二四)第五學年、ヤ、ユ、。あるとはつきり斷定を下すことは出來難いと思ひます。目に見えぬものですから、併しそれはその人の信仰問題です。私はあると信じて居ります。

(二五)第一學年、ハ、コ、。やつぱりあるのだと思ひますが、心のけがれて居る時はないと思つてしまひますが、心の清い時には、本當に有難い氣持で一杯になる時もございます。

(二六)第一學年、オ、ミ、。幼い頃童話等で聞かされ、有難いと思ひました。(ある、ないは別とし

て)祖母が大の信仰家なので私は此頃あると思ふやうになりました。

(二七)第三學年、タ、シ、。私は、あると思つて居りますが、いくら眞直な氣持で、その人に對してゐても、どうしても私の氣持を分つて下さらない時、かへつて、惡意に取られる時には、世の中にこれで神や佛があるのかと思はずには居られなくなります。

(二八)第四學年、シ、ミ、。目には見えなくてもあらゆるところにあると思ひます。

(二九)第一學年、ホ、キ、。あると信じます。何故かと言へば神佛のお慈悲がなくては、自分の行はうと思つた事も出來なくなり、世の中は暗やみになつてしまひます。

(三〇)第五學年、ワ、マ、。確にありますが、それは我々の精神方面の世界にあるものです。

(三一)第二學年、ホ、ミ、。それは目に見えなくても私達の心の中にあると思ひます。そして何時も心の中の神や佛を信じて正しく進んで行けば神や佛に心が通ずるのだと思ひます。

(三二)第二學年、ト、シ、。世の中に神や佛はないと思ふ、けれど神佛はよい事をした時、其の時は神佛が自分の心にあらはれるのだと思ふ。何時もほがらかに、生活する人は神佛であらうと思ふ。

(三三)第三學年、フ、ソ、。私はあると思ひます。この世の中に神佛がなければ決しておさまつて行くものではないと思ひます。又世界の人類の一人一人の心の中にも神佛がかならずひそんでゐるのだと思ひます。

(三四)第二學年、ヤ、フ、。私は實在しないとは思ひません。それは尊い人の心では、はかり知れぬ

眞理の形として表されてゐる物だと思ひます。ですから私は、神や佛のやうな、無形の尊いものがある事を信じます。人が少しでも清い心になれば、それだけ神に近づくのだと思ひます。

(三五)第三學年、セ、ユ、。世の中に勿論神佛があると思ふ。吾人が森羅萬象に對してひそかに感謝する心だらう。

(三六)第一學年、タ、レ、。學問上にはゐないと言ふ事になりますが、神や佛を信ずる人にはあると思ひます。私も神や佛がゐらつしやるやうに感じます。

(三七)第三學年、ソ、ヒ、。實際見たのではないのですから、私には何とも言はれません、けれどある事が本當ならいいと思ひます。

(三八)第三學年、タ、マ、。神佛はないとは信じられません。多くの人もないとは信じませんでせう。『神や佛があるか無いか』といふことは固よりその本質に就ての思考に關係するものである。次に神や佛の本質につきての思考に關する答辯を擧げてこれを分析しやう。

神佛の本質

『神や佛といはれるものはどういふものであると思ふか』との質問に對して答辯したものは九百九十五名であつた。さうして、此等の答辯者が神や佛の本質につきて自己の思考するところを叙述した內容は甚だ種々雜多であつた。稍ゝ繁雜に涉るの嫌もあるが、神や佛の本質につきてこの年齡期の

ものの多くが考へて居るところの實際を窺ふために稗益があると考へるから、その內容を分類して、次にこれを列擧しやう。

(第一) 神佛は人々をたすける(救ふ)ものであるとせるもの　七〇例

ここにたすけるといふ意味は、苦しみを救ふといふことで、生前にも、又死後にも、神佛は我々人間の苦しみを救ふものであるとするのである。

〔例〕(一)第一學年、ツ、フ、。人間の出來ないことでも出來る、人間が惡事をして地獄で苦しんで居る人を助けてあげやうと何時も愛して下さる。

(二)第一學年、ナ、ト、。清く美しいお慈悲深い御心を以て何時も私達の困難の場合は、お救ひ下さる、私達にはなくてならない方と思ひます。

(三)第三學年、ヨ、ミ、。私達の苦しみを救つて下さる有難いものであると思ふ。

(四)第一學年、キ、フ、。私達が苦しんで居る時、陰ながら助けて下さる人と思ひます。

(第二) 神佛は不思議の力にて人々を明るい世界に導くものであるとせるもの　六五例

たとひ罪あるものをも許し、又はその罪を償つて、人々をして善い方へ進むやうにとつとめられるのが神佛であるとするのである。

〔例〕(一)第一學年、ホ、キ、。生前によい行をして清く一生を過し、人々の爲によく盡くした人が

亡くなり、死の後も私達に有難い教を殘して下され、どんな惡人でも今までの惡い事を悔ひ改めればお許しになつて人間を正しい方にお導きになる寛大な心の御方だと思ひます。

(二)第四學年、ア、ト、。眞直ぐな道の外れをせぬ眞の心をもつて進むやうにと、身の修養を說いて居られる。

(三)第二學年、フ、ア、。罪深い私達人間をその賴みによつて明い世界に導き出して下さるものと思ひます。

(四)第二學年、イ、ケ、。不思議な力を持つて居られ、私達をよい方によい方にと連れて行かれます。本當に有難く思つて居ります。

(五)第二學年、オ、ト、。私共罪人の罪を償つて下さり、又良心を呼び起して惡魔に打ち勝つことの出來るやうにお導き下さいます。

(第三) 神佛は一切の人々に對して慈愛の心を垂れたまふお方であるとせるもの　六四例

〔例〕(一)第一學年、タ、サ、。どういふものと一がいには言へないやうに思ひます。その人々により神佛といふものに對し考へが違ひますが、私はあらゆるところに神樣がいらつしやると思ひます。そして目には見えなくてもあらゆるものに愛をそそいで下さるものだと思ひます。その愛に反抗する人がつまり罪人だと思ひます。

(二)第四學年、ヨ、シ、。惠み深く、その中にも、犯し難く、善惡のさかひをはつきりして居られ、我々の心の底を見拔いて居られ、萬一氣付かずに犯した惡いことは氣付いて、眞心から神佛の前に謝し再び犯さぬことを誓ひ實行さへしませば、同じ神佛の子として愛して下さり又諭していただける方だと信じてをります。

(三)第一學年、ヒ、タ、。大變やさしくそして智德のすぐれてゐる方だと思ひます。そしてどんな惡人でも少しよい行をした人ならばお情深いみ心をお垂れになつて下さると思ふ。

(四)第一學年、ハ、ユ、。たとひ身分はいやしくても心掛が尊く何事でも根氣が强く勉强に熱心で思ひやりの心が深く、仙人達のしてゐる生活、及びあらゆる人のやる事を成しとげる事。

(五)第一學年、フ、フ、。神樣は姿がなく、ただ心だけだと思ひます。そして惡い人をせめ、よい人をたすけて下さるやうなものだと思ひます。佛樣は人間と同じやうなものだと思ひます。慈悲深い人だと思ひます。

(六)第一學年、ア、ム、。道德のすぐれてあはれみ深く慈悲があつく何でも出來る人、天照太神、おぢい樣、おばあ樣のやうな人。

(第四) 神佛は我々の身邊に居て我々の生活を見守つて下さるお方であるとせるもの　五五例

〔例〕(一)第一學年、ハ、キ、。いくら見えない所で惡い事をしても、よい事をしても、どんな事でもお分りになるといふ御方、どんな事でもお出來になるといふ御方で又私共を守つて下さる。

(二)第一學年、ノ、ト、。自分の事ばかり考へず、世界の何もかもが幸福で、平和な世界をつくり

皆何の心配もなく暮して行けるやうにと考へて下さる方達をいふのであると思ひます。

(三)第三學年、セ、ヤ、。神や佛といふものは誰の心にもあるものといふことは承知して居りますが慈愛に滿ちたやさしい人が別にあると信じます。そして我々人間の生活をじつと見守つて居て下さると思ひます私には此れが神や佛であるやうに思ひます。

(四)第一學年、タ、ク、。神樣は日本國民をお守り下さつてゐる。佛樣は祖先をまもつて下さる。

(五)第三學年、ミ、キ、。神樣は、私達が良いことをしたときに共に喜んで下さつたり、悪い事をした時には、「いけない」とお叱りになる、つまり私達のお父樣のやうなもの、佛樣は、私達をいつまでも〳〵見まもつて居て下さるやはり神樣であると思ふ。

(六)第三學年、タ、メ、。いつも私達の身邊に居て、私達をお守りして居られるものであります。さうして、やはり私達と同じやうな人間でありますが、その人が眞に私達の行つていかなければならない事を知り悟つた方が神佛となるのであらうと思ひます。

(七)第三學年、ト、シ、。やさしく、又こわく良い人の身には何時でもついてゐて下さつて、色々な事を教へて下さる。又何でも知つてゐらつしやつて人間でも動物でも植物でも、どんな生物にも一番大切なもの。

(第五) 神佛は人々の心の狀態の一種特別のものであるとせるもの　四十八例

此種の答辯の中には單に人々の心の中にあるものと記したるものもあるが、又稍ゝ詳かにその所見

を述べてあるものもある。先づその例として次に示すものは直接に人々の心の狀態であるとせるものである。

〔例〕 第二學年、ヤ、フ、。神佛とは人の心の事ではないかと思ひます。本當に清淨な心境をかりにたとへて表してあるものだと思ひます、ですから、誰でも神佛になれるのではないでせうか、人間は「神」といふ最も完全な尊い無形のものに向つて進むことが一番善い事なのでせう、「神の心に通ずる」といふのも人の心が神のやうに清い心になつたことだらうと思ひます。

それから次に、人々の心とは別のもので、その心の中に潜むで居るものとせるものもあつた。

〔例〕 (一)第四學年、オ、シ、。目に見えない、心の中にあるものだと思ひます、その人の信念の中に潜むで居ると思ひます。

(二)第四學年、ア、エ、。神や佛は人の心の中にあるもので、その人の精神生活に生きて居て、それは崇高な生活とか美しい行とかであると思ひます。

(三)第四學年、ク、キ、。人間の各々の心の中に存在するもので、人々によりて神や佛の有るなしの主張が違ふのは人々の心の持方の相違によるものだと思ふ。

(四)第五學年、ヨ、エ、。人々の感情の中にのみ存するものであると思ふ。

(五)第五學年、ハ、ソ、。神は心の中にある自分以外の大きな存在、或は自分の靈であると言つても善いかもわからない。それは小さい哀れな我々の心のすがり場、慰安所である。

(六)第二學年、ミ、ミ。私たちの信仰です、そしてその人の心持によりてそこには神は宿るでせう、そして私たちのあゆむべき唯一の正しい道をいつも切り開いて下さるのです。

更に卒直に、神や佛は我々の心が產み出したるものであるとせるものもあつた。

〔例〕(一)第一學年、ハ、チ、。神や佛は形のあるものではありません。自分の心によつて生れるものであると思ひます。

(二)第二學年、タ、ハ、。形のない人の頭にある考へのやうなもので人間があると思へばあつて、無いと思へば無いやうなものであると思ひます。

(三)第五學年、ク、ア、。人々各個人々によつて違つてゐると思ふ。勿論抽象的なもので人の眞念によつて出來てゐるのだと思ふ。

(四)第五學年、キ、ス、。人の偉大なものにすがらふとするその心を表はしたものが神佛であると思ふ。そしてそれにより慰めを得、喜びを得、感謝を得るものが神佛であると思ふ。

(五)第四學年、ナ、シ、。物質的(?)に現存するものではなく、個人の心の中のあたたかい位置をしめたもので宗教的に存在する神佛と結びついたものだと思ひます。

(六)第四學年、キ、ミ、。唯精神的のものだと思ひます。あの神や佛の姿は人間の作つた像にすぎぬと思ひます。私は姿を見ただけではちつとも有難くも何ともありません。

神や佛はその形はないが、しかもそれを信ずるものの心の中に、たしかにあらはれるものであると

記述せるものが七例ほどあつた。

〔例〕(一)第一學年、ウ、ヨ、。神や佛は別に形にあらはれた者でなく、その人が信心を持つてゐればその人の心にだけは、たしかにあるので、どうとはつきりしたことは分りません。

(二)第二學年、フ、ミ、。普通の人の目には見ることは出來ないけれども、心から神や佛を信仰してその愛を見出した時に自分の心の中に神や佛といふものが出來るのだと思ひます。

(三)第五學年、タ、ム、。ただ信じると言ふ事に於てのみ存在するものであり、信じる事によつて表はれ得るものであると思ふ。

(四)第五學年、ス、ヤ、。自分の心の中にあるもの、眞に求め求めて眞の信仰を得た時、心からの安心を得た時自分の心の中に佛をしつかりと抱き佛の手にすがることが出來る。佛はなやみ苦しむ私達に歡喜をあたへ安心をあたへ心を統一してくれるものであると思ふ。

(第六)　神佛は不思議なる偉大の力であるとせるもの　四五例

〔例〕(一)第四學年、マ、ジ、。この宇宙間には人間の力でははかり知ることの出來ない或大きな靈の力が存在してゐて、私達を支配してゐる、それを或人は神と言ひ、又佛といふのではないでせうか。

(二)第五學年、ナ、マ、。人間以上の力で人々に慰安をあたへ一度は自已をすてさせる力のある神秘なもので人間がそれを理解するのはあまりに已惚が強い、唯信ずることだ。

(三)第四學年、イ、ミ。常に私達をよい方へと導いて下さる、目に見えない一種の力があると思ひます。

(四)第四學年、ソ、ハ。私共が日常いろ〳〵と生活してゐる、反省したり、悲んだり、世の中がいろ〳〵と進歩し又とまつたり人が死んだり生きたりするのは宇宙のある力によつてゐるのであると思ふ。だからこの見えない不思議のひれふしたい力を神又は佛といふのであると思ふ。

(五)第五學年、ト、シ。人間の理想でそして人間以上の大きな力を指して言ふのであると思ひます。

(六)第五學年、ウ、ア。人間の精神上に生きる、人間の理想的な、人間以上の力を精神を有してゐるものであると思ふ。

(七)第五學年、サ、ミ。所謂偶像でなく、私達の目には目えないそして說明することの出來ないやうな或大きな力であると思ふ。人間の良心かと思つた時もあつた。

(八)第三學年、マ、ヨ。神佛は良心であると思ひます。が小さい時からの宗教心によつて、目に見えない大きな力だとも思ひ、自然だとも思ひます。

(九)第四學年、フ、カ。神や佛に救を求める人が多いから小さい時は神佛と言ふものは何か人間より偉大な力を持つた不思議な人の一種であると思つたり、又神は天照太神の御子孫、佛とは釋迦の御一族だと思つてゐたこともあつたが、今は神佛といふものは人が色々考へて考へ拔いて到達した自

分自身の心を信頼し、安らかになれる人間自身の中にある一つの大きな心の力ではないかと思ふ。

(一〇)第五學年、ヌ、ユ。信より生ずる絶大(對)なる力、この力を我々は神といふ。

(第七) 神佛は生前に徳のあつた人、善行を積むだ人、忠義を盡したる人、若しくは偉い人の死したるものであるとせるもの　四四例

〔例〕(一)第一學年、フ、タ。人が生前世の中で善いことばかりして死んだ人がなると思ふ。

(二)第一學年、マ、モ。人が生きて居る時の行爲を讃へて死んだ後も何時までも尊びていふのだと思ひます。

(三)第二學年、イ、ミ。徳が高くて後世になつても永遠に崇められて居る尊い方。

(四)第二學年、ミ、コ。その人は始から神様の御子であるが、人間に生れてその徳を一般にひろめる、だから死後神又は佛となる。

(五)第二學年、ハ、レ。君の爲に忠義をつくした人が死んで神となると思ひます。

(六)第三學年、カ、ト。御國のために亡くなつた人々である。

(七)第一學年、フ、チ。偉人や聖人が亡くなつてから天に昇り、私達の目に見えないやうにしていろ〳〵よい事をして下さるのです。

(八)第一學年、シ、ミ。立派な人が死ぬと神様や佛様と言はれる。

(第八) 神佛は全智全能のものであるとせるもの　四三例

〔例〕（一）第一學年、ナ、ク。神や佛と言はれるものは私達の眼に見えないもので最も尊く、私達を救ふもので、私達の出來ないことでも出來るし私達に見えなく分らないものでも何でも分るといふ尊いものです。

（二）第一學年、ヒ、エ。非常に大きい目で、いくら山や壁があつても世界中見えない所はないやうに見て居られると思ひます。

（三）第四學年、ナ、ヤ。全智全能にして人智を以て知ることが出來ない絶對のものだと思ひます。

（四）第三學年、ク、ミ。精神上からも何からも缺けて居ないものだと思ふ。

（第九）神佛は人の心の奥にある良心そのもの、若しくはその良心によりて正しい事をすることである、又良心といふものと同じやうに考へてもよいとせるもの　三九例

〔例〕（一）第一學年、イ、イ。人の心の奥にある、良心そのものであると思ふ。

（二）第四學年、カ、ム。各自が持つてゐる自分のよい立派な良心をさすと思ひます。

（三）第四學年、フ、ク。神や佛は私が考へますと自分の心の中にある良心といふものと同じやうに考へてもよいと思つて居ります。「あらいけない」と思つた瞬間に宇宙全體あらゆるものに恥じてゐるのですから神や佛も心の一部のものと考へて居ります。

（四）第一學年、シ、カ。神や佛はなく、人が良心によつて正しい事をすることを佛だとも思へますが、又あるやうにも思へます。

（五）第三學年、フ、ヨ。時によつていろ〳〵に考へますからはつきりは分りません、けれども此頃は自分の「良心」又は他人の「良心」でも神であり佛であると思ひます。そして神は、なさけ深い、やさしい、正しい事を好むものですけれど、その良心は、言葉の上では、自分の他人のと言つても、本當は、どれもみんなのものだと思ひます。そして世の中にはいろ〳〵のたくさんの神や佛があると思ひます。

（六）第二學年、ム、カ。大きな心で人を愛し、正しい考への下に、人を叱つたり、はげましたりして下さるある眼には見えないところの慈悲にみち〳〵たお方だと思ひます。又自分の良心は自分の心の中にある神や佛だと思ひます。

（第十）神佛は尊いもので、多くの人に崇め尊ばれるものであるとせるもの　三五例

何といふことなく、神佛といふものの前に立つとき自然に頭が下がるほどに尊いといふほどの意味で尊いとせられるのである。

〔例〕（一）第三學年、イ、テ。多くの人に崇め尊ばれるもの。

（二）第三學年、タ、ト。どういふものか知りませんが、その前に立つ時決して邪心で居ることが出來ないと思ひます。

（三）第一學年、ス、フ。尊いもので、自分はどんな事でもかなふと思ふ。自分もなりたいと思ふ。

（四）第四學年、マ、ア。無形だと思ひながらも神と言つた瞬間はどうしても無形なものだと思はれ

ませぬ、自然に頭が下る程尊いしかも恐しい威厳のあるもの、様な感じが致します。

(五)第四學年、ナ、ヤ。精神的な何人にも犯すことの出來ぬ尊いものであると思はれます。

(第十一) 神佛とは普通の人が死んだ後のものであるとせるもの　三二例

〔例〕 (一)第一學年エ、ヨ。佛は人が亡くなつてからいふ言葉。

(二)第一學年、ト、マ。佛様は誰でも死ねばなれると思ひます。神様は悟りの道をお開きになつた方と思ひます。

(三)第一學年、ヤ、サ。今まで丈夫に暮して居た人が死んだ時に神や佛になるものであると思ふ。

(四)第三學年、ニ、チ。何も彼も兼ね備えて居られるとは思ひませぬ。自分の知らない方ではないと思ひます。自分のよく知つて居る近しい方だと思ひます、自分に一番懐しかつた亡くなつた方が神だと信じます。

(第十二) 神佛は目に見えぬ偉らい人であるとせるもの　三一例

〔例〕 (一)第一學年、タ、シ。目に見えない煙のやうでとても偉らい人のやうに思ひます。

(二)第一學年、ス、シ。これは世の中の偉らい人を言ふと思ひます。しかし人間ばなれをした神佛はいらつしやる等とは考へられません。

(三)第二學年、キ、テ。此の世にない、古の正しい日本精神のある立派な人だと思ひます。

(第十三) 神佛は人間の靈魂、死したる人の靈魂、善い事をした人の靈魂、先祖の靈魂、さとりを得

た人の靈魂、若しくは靈的生命であるとせるもの　三〇例

〔例〕 (一)第四學年、ニ、キ。神や佛といふものは人間の魂とも言はれると思ひます、又人間のやうに罪のないもの。

(二)第五學年、ム、ア。死した人の魂所謂精神であると思ひます。

(三)第一學年、ヨ、キ。善い事をした人の魂であると思ひます。

(四)第四學年、キ、キ。人間で善い事をして死んで行くと靈界へ行つてもどん〳〵出世して佛か神になる皆これ等は靈だけがなつて居る。

(五)第四學年、ナ、ミ。神や佛はそれを信じる人の心のみに生きる一種の靈だと思ひます。そしてそれによつてのみ安心といふものがあると思ひます。

(六)第四學年、ナ、キ。佛は先祖の御靈だと思ふ。そして佛は各戸別であるが神は皆同一のものだと思ふ。

(七)第四學年、ハ、ト。一種の靈的生命と思ひます。けれども精しいことは分りませぬ。

(八)第一學年、コ、タ。例へば父母が死んでもその父母の體は亡びるが氣持は亡びないで私達を勵まし守るやうなもの。

(九)第二學年、キ、ユ。目に見えないもので、死んだ人が極樂や地獄へ行つてから魂だけが殘つてそれが神様や佛様になるのだと思ひます。

(一〇)第二學年、ヨ、カ。人々の苦しみを救ふ人の心。死んで佛になつた人の心。

(一一)第一學年、ナ、ヒ。魂、姿はないが立派な人が死んだ後の心。殘つた永久の精神。

(第十四) 神佛は惡るいものをば懲罰し、善いものには幸福を授ける、世の中のことを裁くものであるとせるもの　二八例

〔例〕 (一)第三學年、イ、シ。惡い者には罰をあたへ良い者には幸福を授けて世の中を救ふものである。

(二)第一學年、マ、マ。正しい者や眞面目の者にはいつも御惠をかけさせられ、又惡い事をした者は、その人が自分の罪惡を世に知られて居ないと思つてゐても、いつか惡い時が來るやうになさる。

(三)第三學年、カ、エ。神や佛は正義には味方をするけれどもその反對の事にはどんな事でも味方をしない又それに對しての刑を行ふ。

(四)第五學年、ヒ、ヨ。目には見えないけれどもどこにもいらつしやつて私共が人が居ないといつて善い事や又惡い事をしても自分より他の人にはわからないけれども神や佛はいつでも私達のする事を見て居て善い事をした人には御褒美として何か善い事があり、惡い事をした人には罪として何か惡い事が起る。このやうにして人間を平等にして下さる方だと思ふ。

(第十五) 神佛は心が清く、けがれがなく、おだやかで、正しく、美しいものであるとせるもの　二八例

〔例〕 (一)第二學年、ク、ナ。心の美しい人だと思ひます。美しい心の人であり美しい行をした人が尊敬されるのだと思ひます。

(二)第二學年、カ、キ。心の清い、やさしい御方だと思ひます。それは目に見えない神樣の事でもあり、人々の中にもあると思ひます。

(三)第二學年、サ、カ。善惡の判斷がついて惡はせぬ、永久的なもの、清く汚れのないものだと思つて居ります。

(第十六) 神佛は父母、母、親又は親のやうな方又は心の親、遠久の親、理想の親若しくは親心であるとせるもの　二二例

〔例〕 (一)第二學年、ニ、ヤ。神や佛は、私達が惡い事をすると、情なくてならぬと思はれ、ちやうど我々の親のやうであります。

(二)第一學年、オ、ヨ。私共の心の親と思つてゐます。

(三)第一學年、イ、ヨ。私共の遠久の親と思ひます。

(四)第二學年、マ、ミ。お父樣、お母樣。

(五)第二學年、エ、ミ。私達の理想の親。

(第十七) 神佛は人々の行爲を監視するものとせるもの　一八例

〔例〕 (一)第一學年、ワ、マ。この眼には見えないもので、自分の性行を一々見て居られる方だと

思へる。

(二)第二學年、タ、ヒ。私達を惠んで下さり、又惡いことをした時は怒つて下さる、私達を監督して下さる人。

(三)第一學年、カ、キ。私達の出來ない不思議な力を持つて居られ、常に私達を御惠み下さり、何時も私達の生活を見て居て下さる尊いお方。

(第十八) 神佛は人間以上のものであるとせるもの　一七例

人間以上とせるは主にその不思議の力を持ちて居ることを指せるものであるが、その中には人間以上の存在と假定せるものもあつた。

〔例〕 (一)第五學年、オ、ヒ。人間以上の力を持つた靈妙不可思議なものであると思ふ。

(二)第五學年、サ、ユ。人間よりはるかに超越したもので、人間は常に神佛を最上のものとして神佛によつて人間は自信を持ち安心して生活出來ます。理想と崇める尊いものであると信じます。

(三)第四學年、タ、レ。精神界に人間以上の存在があると假定したもの。

(四)第五學年、ウ、ハ。本は人が作つたものとは思ひますがさう思ひたくないと思つて居ります。人間のとどかない崇高のものであると思ひます。

(第十九) 神佛は修行して悟を開いたもの、若しくは悟りの道を開いた人であるとせるもの　一六例

〔例〕 (一)第二學年、ク、フ。心の修養の出來た人で修業をして悟を開いたやうな人だと思ひま

す。

(二)第二學年、モ、ユ。人間の惱みの總べてを解決したもの。

(三)第三學年、カ、サ。人の踏むべき道を行ひ、修行をして悟りの道を開かれた人であると思ひます。

(第二十) 眞心(誠心)が直ちに神佛であるとせるもの　一四例

〔例〕 (一)第三學年、イ、ト。何事でも誠の心でやり盡されたものを神佛と思ふ。

(二)第三學年、オ、カ。一本の眞直な棒のやうにしつかりとして正しく良い事が果しない事を神佛と言つて良いと思ひます。

(三)第三學年、コ、ミ。眞心でつくすことの出來る人の心が神や佛の心で私たちでも神や佛の心になる事が出來ると思ひます。

(四)第二學年、セ、タ。眞實の心の美しさが、人間を離れて輝き出る力の持ち主ではないか。

(第二十一) 神佛は德のすぐれて高いものであるとせるもの　一二例

〔例〕 (一)第一學年、ド、ハ。德のすぐれて居て慾を出さないのを神や佛と思ひます。

(二)第二學年、タ、カ。德の高い立派な、又正しい人の味方をして下さる方だと思ひます。

(三)第一學年、ク、カ。私達の目に見えなく、此の世の人ではなく、德のすぐれた人。

(第二十二) 神佛は人々のために盡した人、若しくは人々のために盡す人であるとせるもの　一〇例

〔例〕（一）第二學年、ク、ト、。正義の人で、又人情の厚い人など、人としての美點を持ち世の中の人の爲に、身を打ちこんで盡して下さつたやうな方をいふのだと思ひます。

（二）第〇學年、〇、〇、。人の爲になることをした偉らい人を私は神や佛と思ひます。

（三）第一學年、オ、ミ、。人の爲に自分を忘れてつくす樣な人が偉らいと思ひます。

（四）第一學年、ス、マ、。幼い時から智慧がよく、人をあはれみ、人の爲に盡す人。

（第二十三）　神佛は人格者なりとせるもの　一〇例

〔例〕（一）第一學年、ナ、チ、。人格者で私達の模範となるやうな人。

（二）第二學年、タ、キ、。私共の世の中で、慾もなく、慈悲のある人格者だと思ひます。

（三）第三學年、サ、チ、。私達の想像する人格、又は心の持主に過ぎませぬ。私達の信ずる空想上の人格者だと考へます。

（四）第四學年、オ、フ、。自分の理想とする最上人格の備はつた精神的の存在だと思ひます。

（五）第二學年、ハ、フ、。神樣とは心の修養の出來た人格者を言ふのだと思ひます。佛樣は佛道を悟つた人だと思ひます。

（第二十四）　神佛は正しい道を踏むだものであるとせるもの　一〇例

〔例〕（一）第三學年、イ、ツ、。よく分りませぬが人として恥づかしくない事をし、正しい道を誠の心で歩んだ人は皆神佛だらうと思ひます。公の神佛になることは出來ないかも知れませぬが、たしかに神佛になる價値は十分にあると思ひます。

（二）第二學年、ム、イ、。神や佛と言ふと本當に立派な考へを持つて居られることを言ふので、人間が立派な事をし、人間の道の正しい事をして居る人を言ふと思ひます。

（三）第一學年、ヱ、フ、。國に忠勇、親に孝をする人は後に神樣のやうになる。例へば楠正成、正行、佛樣はお釋迦樣のやうな人。

（第二十五）　神佛は忠義を盡す人であるとせるもの　一〇例

〔例〕（一）第一學年、ミ、フ、。國に忠義を盡し又天皇陛下に忠義を盡し、又親に孝行をし惡いことをしない、これを私は神や佛と思ひます。

（二）第三學年、イ、シ、。神や佛と言はれる人は、正直で惡いことを考へず、何時でも善を行ひ、愛國心のある人。

（第二十六）　神佛は我々人間の理想であるとせるもの、若しくはその理想の境に達したるものとせるもの　九例

〔例〕（一）第二學年、ワ、フ、。神や佛と言はれるものは神や佛を信じる人々の心の中の或る一つの理想であると思ふ。

（二）第二學年、ヨ、サ、。我々が生活して行く上の最大理想であり、これによつて人は正しい道へと導かれると思ふ。私に取つては一寸したあやまち罪に對して一番恐しいのは神佛であるから、たえ

ず私をむちうつて好い方へと導く先生であり、親以上の親しいものであると思ふ。

(三)第五學年、キ、ハ、。人間の最も大きな理想、それを全部具へられ又私達には想像の出來ない位の方であると思ふ。

(第二十七) 神佛は聖人でありとせるもの　八例

〔例〕 (一)第二學年、タ、フ、。神や佛といふものは良心の人であつて、聖人である、人格者である。

(二)第二學年、コ、ハ、。悟りを開いた立派な大聖人、人間でない。

(三)第三學年、キ、ヤ、。自分の心の指導者、目に見えぬ聖人。

(四)第二學年、シ、カ、。聖人である人をいふ。

(第二十八) 眞實なる人間の姿が神佛であるとせるもの　八例

〔例〕 (一)第三學年、セ、ュ、。眞實なる人間の姿それ自身なのだ。

(二)第三學年、ミ、フ、。眞實なる人間の姿自身が神佛であると考へられます。

(三)第三學年、コ、サ、。人間のすべての悪い點のない方。

(第二十九) 神佛はその行の立派なる人であるとせるもの　八例

〔例〕 (一)第二學年、ノ、ヒ、。心の正しい尊い、慾のない人、行のよい人。

(二)第一學年、ナ、ト、。人物が立派であつて人間の道からはづれてゐない方だと思ひます。

(三)第二學年、カ、イ、。正しい道を踏んで行く人であると思ひます。

(第三十) 神佛は萬物を造り、又それを支配するものとせるもの　七例

〔例〕 (一)第三學年、ヨ、ル、。此の世の造り主で私共を造つて下さつた方、天に居られる私共のお父様、一寸もまがつたことのない方、天地萬能の方。

(二)第三學年、ア、タ、。私達をこの世の中に造り出して下され、そしてお育て下さると思ひます。

(三)第一學年、ス、フ、。總べてのものを司り總べてのものの善悪を見分ける。

(第三十一) 神佛は人間の目に見えないものとせるもの　七例

目に見えないとせるものの中でも、他にその力などにつきて表現せるものは尠なくなかつた。ここには單に人間の目に見えないものと記せるもののみを算したのである。

〔例〕 (一)第一學年、ソ、カ、。人間の目に見えないものだと思ひます。

(二)第二學年、ウ、ア、。物ではなくて目に見えないものであると思はれます。

(第三十二) 神佛は運命である、若しくは一切の運命を支配するものとせるもの　六例

〔例〕 (一)第四學年、ス、ヒ、。神は天照太神から、聖上までの歴代の皇室、佛は死者の靈とか、骨又は骸、釋迦など、神佛を合せて考へると『運命』のことだと思つてゐる。又もや〳〵したもののやうにも思ふ。

(二)第三學年、イ、カ、。運命、めぐり合はせ。

(三)第五學年、ス、マ、。この宇宙萬物の運命といふやうなものを支配する偉大なもの、結局神も佛

も一つのものだと思ひます。

（第三十三）神佛のことはこれを言葉に出すことが出來ぬと答へたるもの　六例

〔例〕（一）第一學年、セ、ヤ。何だか漠然としてどういふものと口で形容出來ませぬ。

（二）第二學年、ソ、シ。心の中ではいろ〳〵考へて居りますが紙に書けませぬ。

（三）第五學年、ヒ、チ。言葉ではつきりと申されません。

（第三十四）神佛は人々の心の不安をなくし、苦しみをなぐさめるものであるとせるもの　五例

〔例〕（一）第五學年、フ、タ。絶對的のもので、私達人間の弱い心をなぐさめて呉れるものです。

（二）第三學年、ミ、ヨ。我々の心を安らかにするものだと思ふ。

（第三十五）神佛は願事をかなへて下さる方とせるもの　五例

〔例〕（一）第一學年、サ、フ。常によく私達を守護して下さり、お願ひも時によつてかなへて下さる。

（二）第五學年、ヤ、タ。總べての願をかなへて下さるものであると思ふが、神佛を信じなければ願はかなへて下さらないと思ふ。

（第三十六）精神の修養の立派に出來たものが神佛であるとせるもの　五例

〔例〕第二學年、ヤ、ト。眞實を求めた人。即ち精神修養の出來たものと思ひます。

（第三十七）心が圓滿にして缺ぐるところのないものであるとせるもの　四例

〔例〕第一學年、サ、エ。人を憐れむ心が強く、才智が秀れて行も正しく心が非常に清らかで缺點が一つもない人。

（第三十八）神佛は自然そのものであるとせるもの　三例

〔例〕（一）第四學年、フ、タ。この天然、自然が我々の神佛であると思ひます。

（二）第四學年、ウ、ケ。形にあらはれない目で見えないものであるが自然界のいろ〳〵の不思議な事を見るにつけ、人間業で出來ないことの出來るえらいものであるやうな氣がいたします。

（第三十九）神佛は自身を忘れて他人のために盡すものであるとせるもの　三例

〔例〕第一學年、ハ、コ。自分の身を忘れて人々のために一身をささげる人。

（第四十）神佛は人々を極樂に參らせて下さるものとせるもの　三例

〔例〕（一）第二學年、タ、タ。私達が死ぬる時極樂へ參らせて下さるもの。

（二）第一學年、コ、タ。私達を淨土へ招くものであると思ふ。

（第四十一）神佛は自分の先祖であるとせるもの　三例

〔例〕第二學年、ク、ト。我々の先祖の方々をお祭したものだと思ひます。

（第四十二）神佛は自然法則であるとせるもの　一例

〔例〕第五學年、イ、フ。宇宙の大から、砂礫の小に至るまで、あらゆるものを支配する眞理、偶然、運命等、云ひかへて自然の法則に存在する絶對のもの、（目に見えぬものを實在しないといひ

切る人は不仕合な者　人格的の神といふより、内にあり、外にあり、兩者にあるもの（人として云へば、眞心の生きる時のみ神は存する）。

○

（第四十三）　その數はまことに僅少であるが、しかも、他に類例を見ざるほどに特別の表現をなしたものが五十八例あつた。これを雜類として、その所見の要旨を次に掲載する。

（イ）宇宙一ぱいに滿ちて居るもの　四例
（ロ）私達と一處に居るもの　三例
（ハ）神秘的のもの　二例
（ニ）人間究極の姿　二例
（ホ）奇蹟的の事をなすもの　三例
（ヘ）淨土へ行つた人　二例
（ト）人間がたより信ずるもの　二例
（チ）不思議のもの　二例
（リ）善事をなした人が生れ變つたもの　二例
（ヌ）超人間的のもの　二例
（ル）一種の光のやうなもの　二例
（ヲ）絶對的のもの　三例

（ワ）煙のやうなもの　一例
（カ）自然にあらはるるもの　二例
（ヨ）人間の奥の最後の一點　一例
（タ）この世に居られないもの　一例
（レ）不自由のない事　一例
（ソ）死んだものを地獄に行かぬやうにするもの　一例
（ツ）昔のえらい神樣　一例
（ネ）一切萬物の恩　一例
（ナ）大變立派だらうと思ふ　一例
（ラ）とても〳〵想像出來ぬ　一例
（ム）萬物のすべて　一例
（ウ）修道の道しるべ　一例
（キ）この世の中になくてはならぬもの　一例
（ノ）目に見えぬ一とつの人間　一例
（オ）心の中に描く偶像　一例
（ク）自己の本質　一例
（ヤ）私達の求める眞理　一例

帝國

(マ)宇宙に存する崇高の精神　一例
(ケ)ありがたい　一例
(フ)大我のある人　一例
(コ)本體のわからぬもの　一例
(エ)善い行、善い教　一例
(テ)信心の深い人　一例
(ア)けがれのない白衣に長い髭をおたらしになつて、いつも神々しくにこ〳〵として居られ杖をおもちになつて蓮の池などにお立ちになつて居られる——こう想像する　一例
(サ)よく繪などで見る白い長い着物をきたやさしい人　二例
(キ)人間を完成したやうなものでせう　一例
(ユ)人間最上の位置にあるもの　一例
(メ)天地自然のめぐみ　一例

○

(第四十四)　具體的の名稱を以て、神佛はどういふものであるかを示せるものは二十四例ほどあつた。その名稱は次の通ほりである。

釋迦　六　天照太神　三　神社　二
觀音　二　キリスト　二　親鸞　二

孔子　一　法然　一　天皇陛下　一
光明皇后　一　地藏　一　靖國神社　一
佛樣　一

○

神佛といはれるものがどういふものであるかはわからぬと答辯したものは五十四例で、それは大抵單にわからぬと記してあるが、中に多少の說明を加へたものもある。その二三の例をここに擧げる。

〔例〕(一)第三學年、タ、レ。非常に私達の生活の上に大切なものだとは思ひますが、まだ本當のことは少しも分りません。

(二)第三學年、ノ、チ。子供は皆神の樣だと云ひますがそれでは少し物足りないと思ひます。子供は成人の樣に惡い心は持つて居なくとも、自覺し、そして人の爲につくす事が少いから、子供のやうな純な心持で自分の天命を自覺し、どんな困難にも打ち勝つて行きつゝある人も神や佛だと云はれると思ひます。ですけれど神や佛の全體などはとても分りませぬ。

(三)第三學年、ア、ト。よく分りませぬが神も佛も人の心の中に生れ、人の心の中に成長する、尊いものではないかと思ふ。そしていつも〳〵人を善い方へと導びくもの。心の中にあつても普通の人の心ではない。けれど考へれば考へる程分らなくなつて來る。

(四)第四學年、シ、タ。どういふものであるとも思はない。しかし全然神佛や宗教を否定する勇氣

もない。

(五)第二學年、ニ、ト。分りませぬ、眞白いものと思ふだけです。

(六)第一學年、ヤ、ナ、。分りません。さういふことを考へないで唯神佛があると信じてゐる。

(七)第一學年、フ、モ、。よく偉人などを神樣のやうだと云ひますが私にはよく分りませぬ。

(八)第二學年、ミ、テ。神や佛があると云ふ事は信じてゐますが、どういふものかはとても私には考へられません。たゞあるといふ事を信じてゐるだけです。又特に知りたくもありません。自然に分るまで待つつもりです。それまでは私の心の中にぼんやり見える神佛を尊び拜んでゆかうと思ひます。

○

此の如く、余等が研究の對象となしたる高等女學校在學の年齢期にあるものが、『神や佛といはれるものはどういふものであると思ふか』との質問に對して答辯せるところを見ると、その內容はまことに區々であつた。しかしながら、たとひその表現の上には種々の差異を示したにせよ、その大多數のものにありて、不思議なる偉力の存在を認めてこれを神佛であるとすることに一致せることは、その答辯の全體を見れば明かにこれを認むることが出來るのである。偉大なる力としてこれを表現したるものは勿論、威力といふやうな言葉は用ひざりしものも、そのすべてが、普通の人間の及ぶ能はざる特性を有せることを示せるを見れば、不思議なる威力の存在を認めたことは明瞭である。答辯をな

したるものはその年齢が既に十四歳以上に達したものであるから、その精神の作用は自己の身體・意志・作業及び自己の位置を進めることに關して一定の支配をなすことが出來るのを通例とする。それ故に異常の身體的苦痛・精神的苦痛・作業不能等に際して、自力の無力なることが知られて、しかも周圍の人々の力にては助けを受けることが出來ぬと知らるるに至れば、神や佛を考へ出して、その偉大なる力を仰て、助けを求めるのが普通である。

又、此期の年齢のものにありては、自身の周圍にあらはるる現象及び過程につきても考へることが出來る。さうして、その自然の現象に一定の法則があることを認むるによりて、そこに目に見えざる力がありてはたらくことが考へられるのである。因果の關係につきて考へ、物の由來を明かにしやうとするによりてその最後のものとして神や佛と名づくべき力の存在を感知するに至ることも余等の例に示されたのである。

しかしながら、その多數の場合にありて、偉大なる力の存在を認むるといふものも、それは自身の心の內から湧き出でたる感情に本づくものではなく、他から注入せられたる知識の結果に外ならぬのである。既に上章に叙述せるが如く、余等の例にありて、少女が神佛を考へたる動機は種々であつたが、それは實際、家庭若しくは家庭以外にありて、曾て耳にしたことのある神とか佛とかといふところの言葉を對象としたもので、畢竟ずるに、外から注入せられたる神佛の觀念をば、自己の神佛の觀念としたに過ぎぬものが大多數であつたことが知られる。元來、神佛と名づけらるべきものは主觀的

のもので、それを特殊の力として客觀的のものにせられるのであるが、上述の大多數の場合にありては、それに反して客觀的に認められたる特殊の力を主觀的のものとするのであるから、その神佛の觀念は習得したるままに、ただ記憶するに止まりて、その觀念に從ふて信順・恭敬・歸依などの感情があらはれることなく、神佛はただ觀念として理解せられるのみで、それに宗教的感情が伴はず、結局、それが宗教的體驗となることが無いのが常である。

此の如き場合にありて、神や佛と名づけられるものは、要するに思考の上のもので、一定の要求によりて、その眼の前に成立せしめられたものである。それ故に、若しその神や佛が要求に相應せぬときにはそれに對して抗議し、又は非難することなどが行はれるのである。余等の例にありても、この事實は明かに認められた。

疾病とか、死亡とか、危險に遭遇するとか、苦痛に惱みたるときなどに、神や佛に祈つたといふことは多數のものが叙述せるところであるが、それが俗諺にいふところの『苦しいときの神頼み』に過ぎぬものであるとすれば、宗教的感情よりして湧き出づるところの不思議の力を指して神佛としたものであるとは言ふことが出來ぬ。心理學的に見て、宗教は人間がすべての存在の究極の根本に、體驗的の關係をなすものであるとすれば、その精神の作用は微妙なる感情に屬するもので、その大部分は意識の表面にあらはれず、ただ一小部分のみが明瞭なる意識の内にあらはれるのであるから、これを十分明瞭に表現することは大人にありても決して容易のことでない、といふこともこの場合、勿論考

慮の中に入れねばならぬ。

余等の例にありて、多數のものは神佛の本質を示すためにその特性（屬性）を記して居る。すなはち、神や佛といはるるものは、次のやうな特性を有するものとして居るのである。

一、人々をたすける（救ふ）ものである。
二、人々を明るい世界に導くものである。
三、人々に對して慈愛の心を垂れるものである。
四、人々の生活を見守るものである。
五、全智全能のものである。
六、人々から崇め尊ばれるものである。
七、世の中を裁くものである。
八、人々の行爲を監視するものである。
九、萬物を造り、又それを支配するものである。
一〇、一切の運命を支配するものである。
一一、人々の不安をなくし、苦しみを慰めるものである。
一二、人々の願ひ事をかなへるものである。
一三、自己を忘れて他人のために盡すものである。
一四、宇宙に遍在するものである。

一五、目に見えぬものである。それにつきて何等言葉を出すことが出來ぬものである。

さうして、多數の場合にありて、神佛は此の如き特性を有するものとせられたる力が、人格化せられて、身體のある人間、若しくはそれと同じやうなものとして考へられたのである。

○

宗教は言ふまでもなく、人間の精神の現象である。さうして、その精神の現象は、特殊の對象に對して起さるるところの自我の特別の態度である。それ故に全く主觀的のものである。余等の例にありても、神や佛と言はるるものは人々の心の狀態の一種特別なるものであるとせるものが四十八例の多きに達した。中にも神や佛と言はるるものは我々の精神が創造せるものであるとなし、又神や佛はそれを信ずるものの心の中に、たしかにあらはれるものであるとせるが如きは、宗教の何物たるやを明かにし、神や佛と言はるるものの本質を稍々正當に說明したものであるとすべきである。

かやうに、神佛を以て全然、人間の精神の產物とし、一定の場合に方りて、人々の精神の力によりて、神佛は創造せらるるものであると考ふることは、心理學上より見て、當然とすべきことであるが、しかしながら、この年齡期にある少女が自から心理學上の說明を十分にすることの出來ぬことは言ふまでもないことである。しかしながら此の如き表現を見れば、その心の境地がここにまで到達せるものであるとして差支ないことであらう。

○

これに對して神や佛とは普通の人が死んだ後のものであるとせるものが三十二例ほどあつた。これは言ふまでもなく、我邦にて從來佛教徒の間に行はるる俗信に、人が死んでから極樂に往生して佛に成るといへるを聞きて、さう考へたのであると認むべきものである。神や佛をもつて人間の靈魂であるとするなども、俗信に從つたものであらう。人間が死亡するときに靈魂は消滅することなく、それが殘りて神や佛となるものであると考へたのである。その他、神や佛の本質につきて種々雜多の考を述べたもののあつたことは、已に前述した通ほりである。

○

神と佛とは、多くの場合にありて、兩者同樣のものとして答辯せられたが、中に神と佛とを別けてその本質につきての考を述べたものが、十餘例に上つて居る。二三の例を擧げる。

〔例〕（一）第二學年、ツ、ミ、。佛樣は人が死んでから淨土に行つて、神樣は人が死んでから天國にいつて。

（二）第四學年、セ、チ、。佛樣とは死んだ普通の人がなるものと思つて居ます、神樣は佛樣よりゑらいものだと考へて居ます。

（三）第一學年、ス、ヤ、。神とは世にゑらい人がなくなると西洋では神といふ、佛とは世にゑらい人がなくなると日本では佛といふ、それから今では人が亡くなると佛といふやうになつた。

（四）第五學年、カ、ニ、。神は日本帝國創立以前の人々であり、佛はこの物質的生活を離れたる靈界

の人間。

(五)第三學年、ヒ、マ、。神は世の中で特別立派な行をした方が亡くなられて神となり皆を見守つて居らつしやるのだと思ひます、佛は人間の一とつの道を開かれた方だと思ひます、お釋迦樣のやうに、銘々の家の祖先も佛樣だと思ひます。

(六)第四學年、ス、カ、。佛は大我のある人で散心なく定心でおほはれて居る人、神は私達を救つて下さつても、如來樣からめぐみを受けて居て、佛樣より段が下の人。

神と佛と區別はしてあるが、その區別の標徴は固より明瞭でない。さうして、その本質につきては同異の點がはつきりとして居らぬ。或は神を上位に置き、或は佛を上位に置くなど、まことに區々である。

○

これを要するに、余等の例にありては少數のものを除くの外は、神や佛の本質につきての觀念が明瞭でないばかりでなく、その思考が甚だ雜駁でとりとめのつかぬ狀態である。元來、宗教性感情は固より人々の先天性素質に相應して、その心の奥より湧き出づるものであるが、しかしながら感情は自我(自己意識)がその環境の對象に對してあらはすところの態度であるから、宗教性感情のあらはれることにはその對象としての宗教的觀念の明かにして且つ正しきものの存在を必要とすべきである。勿論これは主觀と客觀とを別けて外面的にこれを說明するのであるが、實際內面的に言へば、我々の主

觀がそれに對する環境のある對象に面して、一定の態度をあらはし、それが意識せられたるものを客觀に投射したものが宗教的觀念として表現せられるのである。すなはち、神や佛といはるるものは、主觀の狀態が客觀化せられたものであるから、神や佛につきての觀念が明瞭でないといふことは、要するに、その人の主觀の態度が十分宗教的でないといふことを示すものである。

この年齡期に於けるものの神佛の觀念がその大多數にありて人格的のものであることは、固よりその精神の作用に相應したものであるとすべきである。さうして、中には神佛の觀念が極めて原始的のもので、我々人間と同じやうな形態のものであるとする類が尙ほこの年齡期に存して居ることは、注意を要することである。

道德意識

『心の中に良心の聲を聽いたことがあるか』との問題は、自身の行爲の善惡正邪をば、感情の狀態にて、意識したことがあるか、更にくわしく言へば、『善惡正邪の判斷をなして、正善は爲すべし、邪惡は爲すべからず』とする意志の作用を行はしめる動力、若しくは悔恨の心をあらはして邪惡の行爲に對して不愉快の感情を起すなど、心の閃などといふべきものを意識したかといふことを知るために良心の聲を聽いたかと質問したのである。しかるに、この問題の意味が十分に徹底せずして、『わかりませぬ』と答へたものが十二例、それから何とも答へなかつたものが三十四例、『ありませぬ』と

答へたものが三十二例あつた。それに對して『心の中に良心の聲を聽いたことがある』と答へたるものは千〇五十四例であつた。

〔例〕（一）第一學年、フ、ア、。あります。それは少しでも虚言をついたり、人に口答へなどした時後で心の中からああ惡かつたと悔いて「神佛に詫びなさい」といふ良心の聲を聽きます。

（二）第二學年、ミ、カ、。あります。朝起る時、睡たいのでもう少し寢たいなと思つて寢間の中に居たが、こんなに朝寢をしてはいけないと良心が言ひ聞かせたので起きました。

（三）第一學年、タ、マ、。あります。算術を友達とここまでやつて來ると約束して夜になつてもやり切れなく睡たくて仕方がない時、「そんな事でどうする」といふ事を聞いたやうです。

（四）第一學年、ア、ヤ、。あります。お母様などに叱られた時など、はじめはお母様の方が惡いと思ひますが、後で良心がそんなやうなことではいけないと言つて、何時も後悔させられます。

（五）第一學年、タ、セ、。電車の中でおばあさんが前に重い荷物を背負つて乘つて居たのを、隣の私よりも小さな小學生が席を讓つたとき「なぜあなたは小學生よりも大きいのに席を讓つてあげなかつたのです」と良心に言はれて大變苦しかつたことがございます。

（六）第二學年、ミ、ユ、。電車に乘り子供や老人が滿員で腰掛けられずに居るので、立つて上げやうと思ひますが恥づかしいのでもぢ〳〵して居りますと心の中で良心が「立て〳〵」と云つて居るやうなので席を立つて讓つて上げます。

（七）第三學年、ヤ、エ、。學校の歸り道或盲目の女子が道に迷ふてゐたのを見て助けて上げた時、大變善い事をしたと思つて嬉しかつた。

（八）第一學年、オ、ア、。あります。何か惡い事をしかけてもあゝ惡かつた、と思つて止めた時。人に云はれなくて善い事をした時。良心の聲は神佛の御聲であると思ひます。

（九）第三學年、ノ、ミ、。自分が惡い事であると知りながら、しやうか、止めやうかと迷ふて居る時「してはいけない」と何かゞ押へるやうな氣持が致します。意味は分りませぬが良心とはかういふものだらうと思ひます。

（一〇）第二學年、ヨ、キ、。あります。例へば自分でよくない事を思つて居ると、室に誰も居らなくとも急にはつとして良心の聲を聞くと、何と私は馬鹿だらうと思つて責められる。そして誰かに心の中まで見透されるやうで恐しくてたまらない。

ここに示したるものは、二三の例を擧げたに過ぎぬが、その他の場合にありても、大體その表現は類似せるもので、所謂良心の閃きをその意識の中に認めたるものにして、その良心そのものを指して神佛とすべきであると答辯し閃きをその意識の中に認めたるものにして、その良心そのものを指して神佛とすべきであると答辯したものがある（上章「神佛の本質」の條下を見よ）。或は『私達の心の中に生きて居らつしやるもので、良心といつも離れられぬ尊いものである』とし、或は『良心のいはれるままに行動をとるものである』と答へたものもあつた。かういふ場合、その神佛といはれるものは倫理的の眞理と做されたも

ので、此の如きは畢竟ずるに宗教と道徳との區別が判然として居ないものと言はねばならぬ。

道徳的判斷

余等の質問票にありては良心とは感情のはたらきとして自己の行爲の善惡正邪の判斷をなして、正善のことをなすことには愉快を感じ、邪惡のことをなすことには不快を感ずることを一種の動力として意識する方面のことを指すものとして、問題を提出したのである。これに對して、主に智能のはたらきとして人々の行爲の善惡正邪を判斷する能力の如何を見るために『罪惡の大なるものは何であると思ふか、罪惡の小なるものは何であると思ふか』との質問を提出した。さうして、この質問に對する答辯は個人の間に著しき差別のあることを示した。又甲にありて罪惡の大なるものであるとせられたものが乙にありては罪惡の小なるものであるとせられた。それから全くこれに相反するものもあつた。

何等の答辯をも與へなかつたもの、及び罪惡に大小は無いと思ふとのみ答へたものを除き、罪惡の大小につきて答辯したるものの内容を擧ぐれば次の通ほりである。

罪惡の大なるもの（數字は例の數を示す）

殺人	二三三	不孝	一八八
虚言	八九	良心に反する行爲	八六
竊盗	一三七	法律に反くこと	四三

神佛に背く心	三〇	惡と知りて行ふこと	二七
殺生	二三	虚僞	二三
神佛を粗末にすること	一六	人を騙すこと	一六
共產黨	一三	神佛を信ぜぬこと	一二
人の心を傷つけること	一一	人に迷惑をかけること	一〇
惡を反省せぬこと	九	放火	八
利己主義	七	賣國奴	七
僞善	六	人を陷れる	六
人を精神的に殺すこと	五	罪を反省せぬこと	四
自分を顧みぬこと	四	人を嫉むこと	四
影日向のことをする	四	神との誓を破ること	三
人を憎むこと	三	我儘	三
自分の罪が他に及ぼすことを知らぬもの	三	自分のためにする罪	二
天地自然の恩惠を忘れる	二	意地惡	二
人を困らせること	二	人を辱めること	二
人を裁くこと	二	親殺	二
國家觀念を缺くもの	二	本心を欺くこと	二九
		人道にはづれること	一九
		病氣になること	一三
		不正直	一二
		神佛に對して虚言すること	九
		自殺	七
		惡を自覺せぬこと	六
		表面に現はれぬ罪	五
		不正	四
		喧嘩	四
		人に害を及ぼすこと	三
		誘惑されること	三
		死すること	二
		良心を知らぬもの	二
		人の信頼を裏切ること	二
		殺されること	二

その他、單に一例に過ぎぬけれども特別の事項を擧げたものがあつた。それは次の如くであつた。

神佛に感謝せぬこと。神佛を寄すること。神佛を尊ばぬこと。神佛に對して不良のことをなす。神佛の名の下に何でもたよる。自分の缺點をかくすために神佛を汚す。神佛の繪を踏む。日本精神に反く。日本人たることを忘れる。心の中で人を殺さむと思ふ。神に耻ぢないこと。人を怒らすこと。人を助けぬこと。人を罪すること。人を泣かす。惡口。人を疑ふこと。人を呪ふこと。約束を破ること。カンニング。宇宙の眞理に背く。耻を知らぬこと。無慈悲。浪費。自分の運命を見捨ること。耻を耻と思はぬこと。立腹。惡心。飲酒。喫煙。收賄。兄弟喧嘩。天に逆ふ。身分を忘れること。いたづら。享樂の生活。生きることを考へぬこと。人生に反く。自己執著。吝嗇。自分の務を果さずして死ぬること。自分を大切にせぬもの。傲慢。表面を飾ること。ものを輕く見ること。我等日常のこと。卑怯。煩惱。惡事をして白狀せぬこと。食べたがる。禮儀を知らぬ。勉强せぬ。感謝の生活をせぬこと。目上の人に背くこと。純を失つた心。自分をよく思はせむとする心を起すこと。誠を考へぬこと。人間の價値を考へずして勝手のことをすること。望むまじきを望むこと。惡事をして佛に救はれぬと思ふこと。良心にまけること。つくりごと。罪人を笑ふ。自分の罪を人にきせる。不正義。人をからかふこと。

罪惡の小なるもの（數字は例の數を示す）

虛言　一二一　竊盜　八三　過誤　五二

惡事を悔悟すること　四五　兄弟喧嘩　三六　惡い事を知りつつ行ふ　二八
惡口　二六　人をだます　二四　影日向をすること　二三
知らずにすること　二三　殺生　二〇　惡心が行に出ぬ　一八
幼時の罪　一七　いたづら　一六　喧嘩　一四
切迫して心ならずすること　一〇　不孝　九　立腹　八
傲慢　七　考めの足らぬために犯した罪　七　善いと思つて誤つたこと　六
命令を守らぬこと　五　病氣　五　我儘　五
神佛に背く　四　ふざける　四　人の物をほしいと思ふ　四
意地惡　四　約束を破る　四　朝寢　四
自殺　四　物を粗末にすること　四　怠惰　四
人を怒らすこと　四　嫉む　三　親子の愛情に引かれて犯したる罪　三
反省せざること　三　一寸した惡事　三　不深切　三
他人に及ぼさぬ過誤　三　へつらひ　二　虛榮　二
だらしのない生活　二　借りて返さぬこと　二　人を疑ふ　二
人を困らせる　二　人の犠牲となりてしたる惡　二　憎む　二

その他、單に一例に過ぎぬけれども、特別の事項を擧げたるものがあつた。それは次の如くであつた。

紙を捨ること。短氣。皮肉を言ふこと。贅澤。誘惑に負けること。愚痴をいふ。すねること。試驗の時他所を見る。覗き見をすること。人に善い感じを與へぬ。長生き。小言をいふ。一寸した反抗。不注意。眞似。無禮。何もせぬこと。人の道をふまぬこと。思ふことを實行せぬ。不正直。貧のために犯す罪。人前で惡るいことをする。內所話をすること。小さな怪我。無慈悲。命令を忘れること。良者を罰する。心の苦しみ。學則に反くこと。餘計なお菓子が食べたいこと。我々がこのやうに暮すことは罪惡である。自分の罪深いことを知らず、人を裁くこと。自分の內に起るすべての欲望。其他略す。

これによりて見るに、余等の場合にありて罪惡とせられたるものは自身に法律及び道德の法に背きたることが意識せられたるもの、若しくは人々の行爲をば他より評價せるものであることが知られる。勿論、咄嗟の質問に應じて、偶ま思ひ出したる事項を擧げて答へたものであるから、單に罪惡とのみいひて、その意味の明瞭ならざる質問に對して、或はこれを法律上の罪惡と解し、或はこれを道德上の罪惡と解したのは無理のないことである。しかしながら、法律上の罪惡にしても、道德上の罪惡にしても、同じく善惡正邪の道德を本とするものであるから、余等の例の大多數にありて、たとひ深淺の差はあるにもせよ、道德的意識が、そのすべてに於て明かにあらはれて居つたことは認められるのである。

○

眞正なる宗教性感情は此の如き道德的意識の存在の上にあらはれるもので、人々がその行爲につきて善惡正邪の判斷をなし、その正善は爲すべし、邪惡は爲すべからずとの道德的意識を明かにした後に、自己の意志がいかにも薄弱にして、その道德的意識のままにこれを實行するだけの力が無いと感ずるところに苦惱があらはれる。さうして、この苦惱は內省が深くなればなるほど、その度を增すもので、しかも自分の力にてはこれを如何ともすることの出來ぬことが明かに知られるのである。この低格感情[1]は全く自己を低下して、その無智・無能・無力を感知せしめる。實際に、宗教性感情は此の如き狀態の場合にあらはれるものであるから、宗教の心のあらはれることには、その道德的意識の明瞭であることを前提とする。しかしながら、宗教は道德的意識とは全然別異のものである。余等の例にありては、かなり多數のものが良心そのものをば直ちに神佛と見て差支ないとしたのであるが（上章、「神佛の本質」の條下を見よ）、これは決して正當の思考とすべきでない。良心と名づけられるところの道德的意識が明瞭になりて後に、低格感情があらはれて自己が低下せられて始めて宗教性感情が起るのであるから、實際の方面から見れば道德的意識が明瞭となつた上に、內省のいよ〳〵深きことが宗教の心をあらはす上に重要のことである。余等の例にありても明かにこの事實を示すべきものが存在したのである。

(1) Minderwertigkeitsgefühl

神佛の能力

『神や佛は何でも出來ると思ふか』との質問に對しては

出來ると思ふと答へたもの　七六〇例

出來ないと思ふと答へたもの　二二二例

分らぬと答へたもの　六〇例

何等答へなかつたもの　五二例

『神や佛は何でも出來ると思ふ』と答へたる場合は、無論神佛をば人間に類似せる形態と、さうして偉大なる力を有するものであるとせるものであつた。それは固より人間の目には見えざるものであるが、しかもその能力は甚大にして、到底人間の及ぶところでないと信ぜるのであつた。その大多數のものは家庭又は世間にて多くの人々が神佛につきて說けるものを輕信せるものであつたことが、他の事項に對する答辯によりて、よく窺はれるのである。

これに對して『出來ないと思ふ』と答へたる場合は、神佛の能力にも一定の制限があるとして、出來ないことがあると考へるか、或は例へば世の中に幸不幸のあるは神佛が何でも出來るものでない證據であるとし、或は若し神佛が何でも出來るとすればただ神佛を信じて居ればよいとすべきかと理論的に神佛の能力を限定するものであつた。

『分らぬ』と答へたものの中には、種々の理由を說明したものがあつた。その數例を次に擧げる。

〔例〕(一)第二學年、ハ、チ、。神や佛が出來るのでなく、心から信じ敬ふ人こそ出來ると思ふ。

(二)第三學年、シ、ヨ、。出來るか出來ないか實際私達は神や佛に遇て話をしたわけでもないから、知らないが、何しろ私達が正しいことをして居れば神樣や佛樣が私達を導いてくれるからだといふ、しかしそんなことはないと思ふ、自分が正しいことをすればそれでよい。

(三)第五學年、シ、ユ、。信心次第だと思ふ、神は何でも出來ると思つたら出來、出來ないと思つたら出來ない、私には兩者がありて明かに言へない。

(四)第五學年、ミ、タ、。神や佛の存在をはつきりと肯定出來ぬ以上、何とも言ふことが出來ませぬ。

(五)第四學年、イ、キ、。自分で一心にならないで、神や佛を信じたからといつて、自分の思ふ通りなことを神や佛はして下さらないでせう。

(六)第二學年、ミ、テ、。そんなことは考へたことはありませぬ、私の思つて居る神樣や佛樣は物事が出來る出來ない等といふこととは違つたある人間以上のものです。

(七)第三學年、ヒ、ク、。自分が一生懸命やれば、そこに神樣がして下さつたものと思ひ感謝するので、神樣が何でも出來るのでなく、私達のすることが神樣がなさつたのです。

(八)第五學年、ハ、ソ、。我々の生活の主體は自分なのです、そしてその生活を精神的に助けてくれ

る力それが神です、神は我々に出來ないやうな偉大なる力を持つて居ると信じてそれにすがり自分の進むべき道を見出して行くのです、その信ずる力、すがる力の大小によりて出來る出來ないの問題も違つて來ます。神や佛が存在して事實何でもやつて呉れるのではなく、無いものを有ると信ずる、ただこれ一とつです。

これによりて見ると、高等女學校時代の少女にありても、その多數のものは神佛の能力の甚大なることを輕信するのであるが、しかしながら、神佛の能力が甚大であるといふ普通の所說を批判して、相當深刻なる思考をなしたものも亦尠なくないといふことが認められる。

極樂の存否

『天國或は極樂とはどういふ所であると思ふか』との質問に對して

無しと否定したるもの　二九例

何等答辯をせぬもの　六二例

分らぬと答辯したるもの　五五例

を除き、極樂又は天國につきて答辯したるものの中に、大體に於て極樂又は天國とは人々が死して行く所とせるもの　七〇三例

が多數であつた。

〔例〕(一)第一學年、ス、ヒ、。何事もなく平和なところで神樣佛樣がいらつしやつて綺麗な所だと思ひます。

(二)第一學年、シ、ト、。天國は天使が居ていつも清い、いつも春のやうな所だと思ひます。極樂はいろ〳〵な花が咲いて下は地獄になつてゐる所だと思ひます。

(三)第一學年、ヲ、フ、。天國は生きて居る中善いことをした人が行く所で美しくて、樂しいところだと思ひます。極樂は生きてゐる中惡いことをした人が行くところであつて暗く、苦しいところだと思ひます。

(四)第四學年、オ、ト、。天國とは死んだら必ず行くところで空の上にあるのだと思つてゐます。極樂とは生きてゐる中によい事をした善人の行く所だと思つてゐます。極樂には、蓮の花が咲きほこり、そのまわりを善人達がとりかこんで喜びにみちた顏で方々漂つてゐる所と想像してゐます。

(五)第一學年、ス、マ、。天國とは、キリスト教で死ぬと行く所、極樂は、佛を信じ此の世で善いことをした人が行く所。

(六)第三學年、マ、ヒ、。私はお寺で五十二の階段があつて、極樂は一番上で人間世界の上が天國だと聞いてゐました。そして極樂に居れば自分の思ふ通りになると聞いてゐました。

(七)第一學年、ヤ、キ、。極樂は心の美しい人ばかりが行つてゐる所で美しい所で世界を西へ西へ行くとあると思ひます。

(八)第一學年、ワ、ヤ。にしきの雲が浮いて、蓮の花がきれいに咲き亂れてゐて、何となく春のやうなぼか〳〵としてゐて、又蓮の花ばかりでなく色々な花が咲いてゐて、好い香が漂つてゐて天女のやうな薄い長い着物を着てゐて、天國などに行く人をその人が迎へ好い香の中へ連れて行くやうにして何となく美しい所だと思ひます。

(九)第一學年、カ、ハ。天國は羽衣と、太陽と、月とお星樣の住んでゐる所であると思ひます。極樂は善良な行をした人が行く所であつて、毎日樂にすごせるところであると思ひます。地獄の反對。

此の如きは、大體に於て、佛教又は基督教の說教より得たる知識に本づきて考へられたものであると見らるべく、言はば受賣である。しかし此の如き意味にて單に他人の考を受賣したものでなく、極樂又は天國につきて、それ〴〵自己獨自の考と認めらるべきものを記述したものも亦尠なくなかつた。今これをその記述の內容によりて類別して擧ぐるときは、次の通ほりである。

(イ)極樂又は天國は人々の心の境地であるとするもの　七一例

此類に屬する答辯の內容を列記すれば『人間が全く安心を得られたる境地。此世のすべての惡から離れて心の平和が保たれる。正直にして懈怠なき心の生活。その人の心持によりてあるもの。神と一體になりておだやかな滿足に充ちたる感情の味ひ。神や佛をさとつたときの心。自分で善い事をしたときに嬉しいと感ずる心。自身の善い生活。神や佛に合掌して自分のあらゆる事をささげぬかづくこと。自分の心に苦しみ、なやみ等があるときは地獄で、心に苦しみも惱みもなく朗に明るいときが極樂。生きて居る間の心に愉快さを味ふこと』。かやうな言葉にて說明せられて居る。これによりて明かであるやうに、極樂又は天國は人々の心の中にありて存し、しかもその一種特別の心の境地であるとせられるのである。

(ロ)極樂又は天國は誠の心を持ち、正しい行をして人道に背くことのないこととせるもの　三九例

此類の答辯の內容を列記すれば『人道にそれない正しい行をなし悔ゆることなきこと。眞の生活無垢な心を持つて居る人達の世界。天地に恥なき生活をした結果としての明るい精神。正道を踏むだときに味ふ幸福感。立派な生活をして居る世界そのもの。良い人が良いことをして居る間。立派に生活して一つの暗影もないとき。一生懸命に努力して淸い心になつたとき』。かやうに說明せられて居る。これによりて見ると、極樂又は天國は人々の死後に行くところではなく、現在生きて居る間の心の上に感知せられるものである。しかもそれは一種の心の狀態であるとせられるのである。

(ハ)極樂又は天國は自分が心から喜び幸福であることを感ずることであるとせるもの　三〇例

此類に屬するものの答辯の內容を列記すれば『心に苦痛なく安樂に暮すこと。衣食が足りて一家が平和に暮すこと。自分の心に何一つ心配なく、和かなることを感ずること。人生に於て最も樂しい幸福なこと。自分の心に安さを持たせて果れ、本當の自分を見出して何に迷ふこともなく、安らかに生活すること。』これによりて見ると、極樂又は天國は人々が喜びを感ずる場合の心の狀態に外ならぬものであると考へられたのである。

(ニ)極樂又は天國は勸善懲惡のために說かれたものであるとせるもの　二二例

此類に屬する答辯の內容を檢するに『善いことをしなければならぬ、惡るいことをしてはいけないといふことを示すために極樂又は天國が說かれたのであらう。人々を善に導くための言葉。人の心を美しくする敎。生きて居る內に善い行をなさしめるためのもの』等である。かういふ風に勸善懲惡の目的にて極樂又は天國が說かれたのであるとするのである。無論、これ等の場合にありて、極樂又は天國がこの世界の外にあるといふことはこれを信ぜぬのである。

(ホ)極樂又は天國は自分の周圍に存するものであるとせるもの　三一例

此類に屬する答辯の內容は『私達が生きて存する周圍にある。此世で每日〳〵行はれて居る。人間現世にあると思ふ。私達の住むで居るこの世界にある。』かやうな說明は、極樂又は天國が死後に行く所であるとするのに反對してそれが現在に存在するものであるといふので、上段(イ)(ロ)(ハ)(ニ)に擧げたるものも無論、これに屬するものであるから、この世に極樂の存在を認むるものの數は百九十一例の多きに達して居るのである。

(ヘ)極樂又は天國は假定のもの、若しくは空想のものであるとせるもの　二五例

〔例〕(一)第五學年、タ、シ、。天國又は極樂などこの世の人々がつけた名前で、事實あるかどうかは分りませんが、あると假定して天國に行かれる人にならなければならないと思ひます。

(二)第五學年、セ、ム、。唯空想的に死んでから良いことをしたむくいとして行くところだと言はれ

ても、私にはそれを理解する力がありません。唯この現在に於て自分が善い考へに滿ちて本當に他の人のためを考へ自分が何のため生存してゐるのか考へ善くならうといふ一瞬間、善のみに自分がしめられた時が天國或は極樂だと信じてゐます。

(三)第三學年、タ、カ、。これは佛敎の上の事ではないのでせうか。ほんとうにこの事を考へたことはありません。空想上のやうな氣がいたします。

(四)第二學年、ヤ、ヨ、。天國や極樂は世の中にはないと思ひます。そしてその天國や極樂は、人が考へる所である。天國や極樂はないのに人があるものだと考へてゐるのである。

(五)第五學年、イ、フ、。人間性に何時知らず根ざした不死の願ひ、無限のあこがれが生んだ觀念であると思ふ。決して存在するものではないが、人の心に存在する。

(六)第四學年、サ、キ、。一種のまぼろしだと思ふ。

(七)第四學年、ヒ、カ、。佛敎上假想の所であり、今の世からけがれを取り去つた最上の世の中を假想したと思ふ。

(八)第五學年、シ、ユ、。人間の想像にすぎない。此の世にも存在すると思ふ。本當の人間になつて正しい行をした時に、それは天國極樂であると思ふ。

天國又は極樂は空想のもので、一種の精神の狀態をあらはす場合に名づけたものである。上記の(イ)及び(ロ)の答辯と大體同一であると言ふべきである。

（ト）極樂又は天國は愚夫愚婦に對して教として說けるものであるとせるもの　二例

此類に屬する答辯の內容は『佛教でいふところの極樂は信仰の對象として愚夫愚婦に教へたもの。極樂とは美しい所、善惡なく、すべてが淸らかな平和な慈悲にみちた佛の心の樣に美しい所である。かう說明するのは無邪氣な小供や年老たる人々には適當して居ると思ふ。』の類である。

○

以上所記の他に極樂又は天國の存否につきて、特別の所見を叙述したものが數例あつた。二三の例を擧ぐれば次の通ほりである。

〔例〕（一）第四學年、ナ、シ。人の心や頭の中に描いて居る最も理想的の天地で、それが宗教的な場所に結びつけられた所と思ふ。天國・極樂がそのままあるとは思はれぬ。

（二）第一學年、ア、ヒ。天國は神樣のおいでになり又私共の淸い靈魂がここに行くと思ひます。極樂は無いと思ひます。

（三）第三學年、ノ、チ。極樂や天國は樂しみばかりある所だと人々が言ひますが、苦勞のない所は決して樂しくはないと思ひます、ですから此世の中のきらひな人は決して行かれない處が天國で、天國はやつぱり苦勞も樂しみもあるが、其處に住む人の心が皆、それに打勝つて行かれる勇氣を持つた人々だけが住む所だと思ひます。

（四）第二學年、ヒ、ト。その宗教の精神にたどりついた時、屹度そこには天國又は極樂が待つて居

るかも知れませんが、しかし我々人間は到底この事は實現することが出來ないと思ふ。

（五）第二學年、ナ、レ。天國とか極樂とかなどは馬鹿らしい感じが、私にはします。

（六）第五學年、ウ、ハ。何だか物質的な感じがいたします。天國・極樂など考へず、ただ神を信じ、修養したいと思ひます。

（七）第三學年、タ、ト。生如來樣のお話では大層美しく決して惡心の人は行けぬ所と聞きました、でも今日の私はだん〳〵信じられなくなりました、子供の時の邪心のない時には信じられたものが年が增すにつれ理屈で考へ出したためと存じます。

これ等の答辯は皆これ極樂又は天國の說を聞いて、理性的に批判したものに外ならぬ、中にはかやうなことを考へるのは馬鹿らしいと思ふとまで卒直に自分の考を言ひあらはしたものもある。

○

極樂又は天國と名づけられるものは、宗教の心理學上より言へば、我々の經驗を超越したるもので、これを我々の經驗の內にあるところの經驗的世界に對して超越的世界と名づけられるのである。しかしながら、超越的世界と名づけても、それが空間的にこの現實の經驗的世界の外に存在するといふのではない。これを超越的と言ふのも全く精神的のもので、實際の心理狀態より見れば超越的の新しい世界が創造せられて、さうしてその實在性が强く信ぜられるのである。現實の經驗的の世界に滿足することが出來ぬ感情が、强くはたらきて、ここに超越的の世界が創造せられて、さうして、その

實在性が強くあらはれるのである。それ故に、宗教の心理學の上から言へば、極樂又は天國が果して存在するか否かを討議することは意味のないことで、實際、宗教的思考の上にあらはれたる極樂又は天國の實在性が強いか否かといふことが重要の事項である。余等の例にありては、極樂又は天國の存在を否定したもの並に何等の答辯をしなかつたもの百四十六例を除きて、殘餘の七百三例は極樂又は天國を以て人々が死して後に行くところであるとして、全く地理的にこの世界と區別せられたる世界を考へたのである。しかしながら、これは他の人から授けられたる宗教的思考で、しかもその思考は甚だ漠然たるものであると言はねばならぬ。これに反して極樂又は天國を以て死後の世界とせずして、これは現實の世界にありて人々の心の狀態が一種特別である場合を指すものもあつた。この場合、極樂又は天國は地理的に區劃せられたる別の世界ではなく、ただ人々の心から虛僞・邪惡から離れたることを指していふやうに思はれる。固よりこれも死後の世界であるとするのと同じやうに、その宗教的思考はまことに漠然たるものであると言はねばならぬ。ただし傳統的に世間の人々に盲信せられて居るところの極樂又は天國につきて批判的に考へを起して居るものも尠なからぬことは注意を要する件である。

奇蹟の問題

宗教上にて所謂奇蹟とせられるところのものは、生きたる神のはたらきと認められるところの不思議の現象である。基督教などにて說かれるところの奇蹟とはすべての事物及び出來事の上に神のはたらきと攝理とを見るもので、しかもその神のはたらきと攝理とは我々の知識のはたらきによりてはこれを說明することが出來ないとせられて居るのである。これを要するに、神や佛は不思議の力を持つて居るがために從つて神佛は不思議の行動をなすものであるとの見地より所謂奇蹟の說が唱へられるのである。それ故に、眞に奇蹟とすべきものはその個人の宗教的生活の健全と純正と程度とに關係して、その內部の宗教的生活の顯現として示されるものである。余等の例にありては、此の如き眞の意味にての奇蹟でなく、所謂奇蹟として傳へられるものにつきて、如何に思ふかとの質問をなしたのであるから、これに對する答辯はその人の宗教的感情の如何を見るためにあらず、ただその人の宗教的思考の如何なるかを知るために役に立つだけのものであると言はねばならぬ。ここにその答辯の內容を分類すれば『神や佛はあらいお方であるからその行動も不思議である』とせるもの四三四例、それから『それは神佛を信ずる心のはたらきとして感ぜられるものである』とせるもの六六例、自然の力であるとせるもの五例、科學又は普通の理屈にてはわからぬとせるもの六例、これを總計すれば五一一例の多數のものは所謂奇蹟を信じて居るのであつた。これに對して所謂奇蹟をば半は信じ、半は疑ひ、これを肯定もせず、又否定もせざるものが六一例であつた。

全然所謂奇蹟を否定せるものは三八例、それに就て『考へたことがない』とて全然無關心なることを示せるもの一三例、『分りませぬ』と答へたるもの八〇例、それに何等答辯しなかつたものが三一四

例であつた。この外に、批判的の答辯をしたものが二十一例ほどあつた。これによりて見ると、所謂奇蹟を信ぜざるもの、及び少なくとも積極的に所謂奇蹟を信ぜざるものは四六六例の多きに達して居るのである。

所謂奇蹟につきて批判的の答辯をなしたものの例の二三を次に掲げる。

〔例〕（一）第一學年、カ、レ。それは本當にあつた事などでなく、傳說であると思ふ。

（二）第一學年、ヨ、セ。ないと思ふ。色々の事があるがそれは皆人がした事で不思議な事があるとすぐ迷信のやうなことを言ふからないと思ふ。

（三）第一學年、ヤ、マ。神や佛のやうに心の眞直な人は不思議なことでも出來るといふやうな私達の教だらうと思ひます。

（四）第二學年、キ、モ。人には奇蹟とか不思議に思へても、それが運命だと思へば何でもありません。しかしさう考へるより、その奇蹟、不思議をそのまま信じて行く方がよいと思ひます。

（五）第五學年、マ、ミ。それはそれとしてみとめるが、その奇蹟を材料に宗教を宣傳するのはいやだ。勿論宗教信仰に科學的根據を求めるなんか愚の骨頂ではあるが。

（六）第五學年、フ、ミ。心の狀態に依つて、どうにでも解釋出來ると思ひます。理屈ばかり考へてゐるときには奇蹟などはない、本當にそれがあるといふことは馬鹿げた事だと思ひますが、理屈抜きに致しますと神や佛を本當に信仰するならばこれらは有り得べき事、又あらねばならない事だと

思ひます。

神佛禮拜

神を祭り佛を拜むことなどの宗教の儀式（廣く神社、寺院、禮拜、儀式、讀經など）につきて如何なる考を持つて居るかといふ問に對しては、ただ單簡に『それは善い事であると思ふ』と答辯したものが大多數で九六四例の多きに及むで居る。次ぎに何等答辯しなかつたものが七九例、『わからぬ』と答へたものが七例、『別にどうとも思はぬ』と答へたものが一例ほどあつた。この外に神佛禮拜につきて特別の意見を叙述したものがあつた。それを內容によりて大別すれば次の通ほりであつた。

（イ）敬虔の態度にて心より神佛を禮拜することは善い事であるとせるもの　二〇例

（ロ）形式の末に走り、眞實の心から離れては意味なしとせるもの　二五例

（ハ）熱狂的なるは善くないとせるもの　九例

（ニ）讀經は無意味なりとせるもの　八例

（ホ）修行のための方便であるとせるもの　一例

（ヘ）一とつの風俗習慣であるとせるもの　一例

（ト）迷信と思ふと答へたるもの　一例

（チ）儀式に對して反感を持てるもの　一例

（リ）神佛禮拜の必要なしとせるもの　一例

〔例〕（一）第五學年、マ、シ。人間が信仰を持ち、それにすがるといふことは良い事だと思ふが、唯名前だけの形式的なものは嫌だ、私は現在のお寺（これは私が見たもので全般的でなく、又私の偏見なる事をお斷する）で壇家からお金を取り立て（この金額の多いほど成佛するといつたやうな事をわきまへて居る可愛さうな老人もある、そして無い中からお金を上げる）自分等、僧達の必要以上の生活費或は贅澤費となつて居るのを見ると、坊主憎けりや袈裟まで憎いで、その寺、ひいては佛様にまで反感をもつことがしば〳〵ある。だが神を祭り佛を拜むことは勿論よい事と思ふ。

（二）第一學年、タ、ク。神社をまつるといふことはよい事だと思ひます、寺院などはおがまなくてもよいと思ひます、儀式はやらなくてはならぬと思ひます、讀經はやらなくても善いと思ひます。

（三）第五學年、ウ、ア。神を祭り佛を拜むことは神佛を崇める純心の心持で、最初は作られたのであらうが、神社、寺院はなくともよいと思ふ、此頃は寺院などもすばらしく立派になり、色々と金錢を取るのはよくないことだと思ひます。眞の宗教、崇拜であるならばすべてそれはかざらない心であるから何も神社、寺院は必要だとは思ひません。

神佛禮拜を始め、宗教の儀式として從來行はれて居るところのものに對して、ただ傳統的に教へられたるままに『それは善い事である』とするものが大多數であつたが、しかしながら、『既成宗教の形式に拘泥することは善くない』といひ、或はそれに對して反抗の心をあらはしたものも尠なくなか

つた。中には現在の宗教家と自稱するものの弊風を指摘し、その非宗教的の行爲を非難したものもあつた。元來、傳統は歴史の神聖を重んずるのであるが、この年齢期に於ける少女にありて、歴史そのものが神聖なりと感ぜられず、已に行はれて居るところの固定の形式が、自身の內的生活と相應せざるがために、かやうな形式に對して反抗せざるを得ぬのである。

これを要するに、余等の例にありて、多數の少女は在來行はれて居るところの宗教的の儀式によく適合することが出來ることが認められる。勿論、宗教的儀式は宗教的行動に屬するもので、心理學的に言へば、我々人間が超越的世界に對する態度に外ならぬもので、畢竟するに、この主觀的の態度が外方に現はれたものに外ならぬ。それ故に、これを主觀的に見るときにその宗教的の意味が存するのであるが、上記の答辯の多數の場合に見るが如くに、全く客觀的に見てその可否を說くやうでは、それが眞實の宗教上の意味に考へられたものであるか否かが疑はれるのである。殊に神佛をば客觀的に存在するものと考へて、それに對して祈願するといふやうな心持にて禮拜することなどは眞實の宗教上の意味を離れて居ることは言ふまでもない。

兒童の神佛禮拜

他の兒童が神佛を禮拜するのを見たときいかなる感情があらはれるかを知らむがために『子供が神をまつり佛を拜むのを見てどう思ふか』の質問を提出したのであつた。この質問に對して何等答辯を

しなかつたものが八十九例ほどあつたが、その餘の一〇三〇例にありては、兒童が神佛を禮拜するのを見て、『とてもいぢらしく思ふ、感心な小供であると思ふ、かはゆらしく思ふ、何となく神々しく思ふ、尊といと思ふ、純心で可愛らしいと思ふ、美しいことであると思ふ、ゑらいと思ふ』などと答へたのである。

中にも、他の兒童が神佛を禮拜するのを見て、『自分が何となく嬉しく感じ、ありがたい心が湧き出づる思がする、又羨ましく思ふ、さうして自分も一處に拜みたいやうな氣分になる、自分を顧みてはづかしく感ずる』などと答へたものもあつた。

〔例〕（一）第一學年、ハ、ユ、。子供でありながら神佛を拜むといふことは私達のよい手本と思ひます、又あまり善い行をしてない人は耻づることでせう。

（二）第一學年、イ、ト、。まだ物事のよいか惡るいかを知らない小供でさへ神や佛を拜むことを知つて居る、小供でさへさうであるならば私はなほさら神や佛をまつり拜まなくてはいけない。

（三）第一學年、キ、ネ、。子供までが神佛のありがたいことをさとつて居ると思ふと一層ありがたい心が湧き出づる思ひがします。

（四）第一學年、ム、サ、。子供でも神佛を尊ぶと思ひ、嬉しく思ふ。

（五）第四學年、ヒ、ヨ、。神が何か佛がどうしたのかといふやうな、又俗界に居て俗界を知らず唯無心に拜む姿！此處に法悅の世界があるのではないかと思ふ、疑を持ち初めし身のしら〳〵しくも、

神佛にひざまづくは何か苦しい氣がする。

（六）第一學年、フ、キ、。まじりけのない純な心で拜むで居るのを見ると、その子供がいかにも神々しく見え、自然に頭が下ります、又こんな小さな小供が神や佛を知つて居るのだと思ふと涙が出るやうに思ひます。

此の如きは、感動性の强い少女が、兒童が神佛を禮拜する態度を見て、感傷の情を動かす場合の多きことを示すものである。さうして、それが果して宗教性感情に屬するものであるか否かにつきては、更に十分の精査を要することである。

これに對して、兒童の神佛を禮拜するを見て、『何等の感じが起らず』又『別にどうとも思はぬ』と無關心のものもあつた。更にこれに反して兒童の神佛禮拜に對して一種の反感をあらはしたものもあつた。

〔例〕（一）第四學年、シ、ミ、。大變よい事と思ひます。でも口の中で、親の眞似して、モゴ〳〵言つてるのは厭です。子供らしく神樣や佛樣の前では禮拜をするといふ習慣によつて、キチンと禮拜をしてゐるのを見ると大變嬉しく思ひます。

（二）第二學年、ス、マ、。私が學校へ來る道にある小學校の生徒は皆その氏神樣におじぎをして通つて行くのを毎朝見るが小供達は皆形式的にお辭儀をして行きます。そんなのを見ますときつと學校で言はれてゐるのでお辭儀をして行くのだと思ひ、餘り感心致しません。

(三)第五學年、ワ、リ。惡い氣は致しませんがあまりよい氣も致しません。いぢらしいとも思ひます。

(四)第四學年、オ、レ。あまりませくれて、鼻にかけたりするのは此の上なく不快です。そして結局、そんな子は何の信仰心も起りません、つつましく、言はれた通り拜む子はやがて形式から眞の神佛を見出すことが出來るのです。人に見せびらかすやうな子供の信仰ほど醜いものはありません。

(五)第四學年、ソ、ハ。あまり好まない、自分自身讀經などは自分の修養としてよいと思ふ。殊更にわざ〳〵神をまつり佛を拜む儀式的の事は好まない。

固より此等の場合にありては、客觀的に見たる態度を批判せるもので、その主觀の狀態にまで立ち入りて觀察したるものでないことは明かであるが、その餘の二百五十七例にありては兒童が神佛を禮拜することにつきて、批判的に見て、『兒童が神佛を禮拜することは善い事である、たとひ形式的にもせよ幼少の時から神佛を禮拜するといふ習慣をつけるのは善いことである、それは宗教心を養ふために善いことであるといふやうに考へる』と答へたものがかなり澤山であつた。又『それはただ形式的のもので本當に心から神佛を拜むのではないと思ふ』と批判し、或は『神佛はえらい方だと教へ込まれ大人の眞似をするに過ぎず、意味はないものである』と排斥するものもあつた。

神佛に對する態度

神佛に對する態度の一端を知るために『神や佛に祈つたことがあるか、若しあつたらばどういふ場合であつたか』の答辯を求めた。この質問に對して『祈つたことはありませぬ』と答辯したものが二十八名、何等答辯をせざりしものが二十六名、合計五十四名を除く他の一千五十五名は『祈つたことがある』と答辯した。その答辯の內容によりて分類するときは次の通ほりである。

(第一) 近親、自己及び友人などの病氣がなほるやうにと神佛に祈つたもの　四六二例

〔例〕(一)第三學年、マ、ヒ。父母が病にかかつた時どのやうに貧乏してもよいから、皆が丈夫に暮すやうにと祈つた。

(二)第三學年、ワ、シ。母が病院に入院をして救かるかどうか分らないことがありました。その時こそ神や佛に手を合して母が早くなほりますやうにと祈りました。

(三)第三學年、カ、フ。妹がまだやつと三つになり、父母もその成長を喜んでゐたが病氣になつて死ぬ前に一生懸命にあの時は妹がどうぞ死なないで、いつまでも〳〵生きてて下さいと手を合せて祈つた。

(四)第一學年、タ、シ。父が怪我をして一週間百度まいりをいたしましてたすかりました。

(第二) 入學試驗及び學期試驗に際して成績の良好なるやうにと神佛に祈つたもの　二七七例

〔例〕（一）第三學年、ツ、フ。女學校の入學試驗の時、勉强ならば自分の力ですれば出來るが、くじ引となると天命です。私はこの時始めて心の底から神佛を祈りました。

（二）第三學年、オ、ヨ。試驗に及第できるやうに、朝早く近所の社を參拜しました。

（三）第一學年、カ、ケ。私が入學試驗の時に毎朝明治神宮にお友達と行つた。

（四）第三學年、タ、マ。神や佛に祈りたいが、どうも恐しくて一心には祈られません、考査の時なんかに祈る時もあります。

（第三）天災、自己及び他人が災難に遭ひたるとき並に何か苦惱のあつたとき、その災難及び苦惱から免かれることが出來るやうにと神佛に祈つたもの　三六一例

〔例〕（一）第三學年、ヤ、チ。自分がもうたよりにするものがなくなつた時、ほんとうに神や佛に合掌する。

（二）第三學年、ア、ト。大低夜寢る前には神も佛も兩方に祈つて寢る。又常に信じ、けがれのない生活をしてゐれば神や佛が守つて下さる事を知りながら困つた事のあつた時には祈らずには居られない。小さな事でもすぐお祈してお縋りしたくなる。

（三）第二學年、ナ、ス。去年日照で田の中に大きなひびきが入り水が無く毎日よい天氣ばかり續くのでどうなる事であらうと思つて、朝晩佛にお祈り致しました。

（四）第一學年、ヒ、ト。祈つた事が何度もあります。以前は自分が苦んだり、惱んだり、困つたり

自分の身に災難が押しよせて來た時や又祖父母の命日の日や、神社、寺院の前を通つた時だつたのですが、今では母と土曜日には大概何處かへお參りに行きます。

（五）第二學年、ミ、タ。船中、大波に會つた時に神佛に祈りました。

（六）第一學年、タ、シ。卒業間近に受持の先生が自動車に轢かれた時友達と一緒に近くの神社にお詣りに參りました。

（七）第四學年、ス、カ。佛（如來）のみめぐみにより、私もどうぞお育てをうけるやうにとお念佛をして居ります。

（八）第二學年、ス、マ。一生懸命に祈るといふのではないが朝學校へ來る時神社或はお寺の前を通ると自然に「今日は一日よい日でありますやうに」とか、もしその日に何かの試驗がある日であつたら、「今日の試驗はよく出來ますやうに」と祈る氣持になり又祈ります。

（九）第一學年、ア、チ。皆の人が、非常時々々などと言つてることを聞きますと、どうぞ戰爭などありませんやうにと祈る事があります。又地震や、側に火事の起つた場合。

（第四）自己又は他人の幸福を求むるがために、又自己の念願が達せられるやうにと、神佛に祈つたもの　二二八例

〔例〕（一）第二學年、カ、フ。死んだなら極樂に參らしていたゞく樣に、朝夕祈つて居ます、又父母が長命である樣、又は一家内がいつも樂しい樣にと祈る。

(二)第二學年、タ、ヒ。本年も前の年の様に可愛がつて下さいませ、と正月に祈る。

(三)第四學年、オ、ト。母に叱られた時は、いつも自分が怒つたりするので、どうか人間にして下さいと祈りました。「本當の人間にして下さい」(本當の人間になれば親孝行も出來る筈です。)小さい時、弟と喧嘩ばかりして居たので、二人で「もう止さう」といつて拜んだこともありました。

(四)第三學年、ヒ、ト。毎朝その日に災難のないやうに、私をお守り下さるやうに祈ります。

(五)第一學年、ヤ、ナ。夜寢る時、自分の恩人の名を皆擧げて、その方々が無事にお暮しになる様にと祈つたことがあります。

(第五) 自己の精神生活の向上を求むるために神佛に祈つたもの　六一例

〔例〕(一)第二學年、カ、ト。自分の姿がこんなにいやな人になつた時、自分が反省すると、私は神と共に生活すれば、少しはよくなると思つて、「どうぞ神様は、私をお見放しにならないで下さい」とお祈りします。又よく〳〵自分の力で出來ないと信じると、お祈を心から致します。

(二)第四學年、ヨ、カ。神に祈つたことがあります。自分の本當の氣持は神と私の外に知る者はありません、自分の思ふ事は床の中へ入つて毎夜或者(神)にうつたへ安らかな氣持で眠りに着きます。

(三)第二學年、オ、ヨ。あります。自分が罪を犯した時は必ず神様にお詫びをし、又自分の心持をお傳へいたします。

(四)第二學年、ヤ、ヨ。祈るといふのかどういふのか知りませんけれど自分で自分の缺點をなほさうとする時にそれを神様にお告げし、そしてそれがなほることに少しでも御力添していただきたい等と祈つてゐます。

第六) 自己が無事に暮したことを神佛に感謝すると答へたるもの　四七例

〔例〕(一)第五學年、ナ、ミ。毎朝毎晩祈つて居ます、それは一日を無事に過させて下さつたと感謝するのであります。

(二)第四學年、ウ、ケ。毎日毎日靈に身體に必要な糧をいたゞいて本當に有難いと思ひます。

(三)第三學年、カ、ユ。自分の完全な人として生活して行かれる幸を與へて呉れたことを感謝した。

(四)第五學年、カ、ユ。私の祈るのは大變感謝の時、又過失を許していたゞく時です。

(五)第三學年、シ、ユ。皇太子様がお產れになつた時などは本當に心の底から感謝しながら祈つた。

(六)第二學年、ム、イ。今日無事で過したことを感謝して祈る。

宗教の上に於て、神佛に祈禱するといふことは、神佛に對して話すことである。彼の犧牲といふものは神佛に對して何か形態のある物品を供へるのであるが、祈禱は言葉と思考とを神佛に供へるのである。それ故に祈禱は犧牲の內面化であると言ふべきであるが、何れにしても何等かの念願が達せら

れるやうに神佛に對して話しかけるのである。

祈禱に於ける精神的作用には固より種々の程度がありて、祈禱の權力によりてある奇驗をあらはすことを求むるのが最低度のものである。余等の場合にありては此の如き初歩的の祈禱は認められず、所謂請願的祈禱と名づけられるものが、多數の場合にあらはれたのである。さうして、それは自己又は他人の災難を救ひ、幸福を求むるといふものが多數であつた。更に神佛と我々人間とがお互に利益の交換をするといふやうな意味の祈禱もあつた。『自分の心を誠直にしてさへ居れば神佛もたすけて下さるであらう』とするの類はこれに屬する。又更に進みて懺悔及び恭順の意味の祈禱もあつた。しかしながら此の如き功利的の念を捨てて、全く神佛の意志に從屬するのは歸依的祈禱と名づけられて、宗教的意識の最もよく發達した場合にあらはれるのであるが、余等の場合にありても、『自己が無事に暮したことを神佛に感謝する』と答辯したるものは此類に屬するか、少なくとも此類に近いものであるとすべきである。

環境と宗教的思考

兒童の宗教的思考が第一に家庭によりて傳へられたものであることは諸家の等しく認むるところである。家庭以外の環境よりして兒童が宗教的思考を獲る場合も決して尠くないと思はれる。しかしながら、環境がどの位に兒童の宗教的體驗の上に影響を及ぼすものであるかといふことを精確に研究す

ることは容易の業でない。余等はこの問題の研究につきての一材料を得むがために、環境狀態の相異したる三校の少女が神佛の思考につきて告白せるところを相對比して、次のやうな表紀を造つたのである。

表中〔甲〕とあるは東京にある高等女學校にして、その生徒の大多數のものは佛教殊に淨土眞宗の家庭のもので、又その學校に於て、課外にある程度の宗教的教育を受けたるものである。

〔乙〕とあるは廣島縣の地方にある高等女學校にして、その地方は殘らず淨土眞宗を奉ずる、しかしながら學校にありては特に宗教的教育を受けざりしものである。

〔丙〕とあるは東京にある高等女學校にして、その生徒の中には佛教の各派或は神道、或は基督教を奉ずる家庭に生長したるものがあり、學校に於ては特別に宗教的教育を受けざりしものである。

又表中の數字は各事項の實數であり、%數は全生徒の百分比例を示すものである。

神佛の思考	〔甲〕	〔乙〕	〔丙〕
(第一)人々をたすけるもの	四三	一六	一一
人をたすけるもの	一	一	四
願ひ事をかなへるもの	一	二	一
極樂へ參らせて下さるもの	一	一	一
死んだ者を地獄へ行かぬやうにするもの			
	一〇・四四%	一〇・九八%	三・四%

精神を安定せしめるもの	三	一	二	
(第二)人々を明るい世界に導くもの	六・〇〇%	六・五九%	五・二〇%	
	二七	一二	二六	
(第三)人々に對して慈愛の心を垂れるもの	八・八八%	四・五〇%	三・二〇%	
慈悲の深い方	二八	六	八	
寛大慈悲の心を有するもの	一	一	一	
慈愛の心を有するもの	九	一	七	
利他的のもの	一	一	一	
利已心なくして大慈悲を有するもの	一	一	一	
(第四)我々の生活を見守るもの	七・一一%	一〇・九八%	〇・六六%	
我々を監視する	一〇	一	八	
我々を守護するもの	二二	九	二三	
私達と一所に居られる	一	一	二	
(第五)一種特別の心の狀態	〇・六六%	三・八四%	七・八〇%	
自分の心	一	二	三	
心の中にあるもの	二	四	七	
信ずる心に存在する	一	一	二九	

法を求める心	一	一	一	
(第六)不思議なる偉大の力	一	三・二四%	七・八〇%	
偉大なる力	一	四	三四	
不思議のもの	一	二	四	
大きな力を有する大きなる存在	一	一	一	
(第七)偉人の死したるもの	七・五五%	六・〇四%	二・六〇%	
人のために盡した人	四	二	三	
生前德のあつた人	三	二	二	
生前世に盡した人	一	二	二	
忠義の人の死後	一	二	一	
偉い人の死後	五	一	一	
佛敎をお弘めになつた方	一	一	一	
昔の偉い神樣	一	一	一	
善行をつんだ人	二〇	二	三	
(第八)全智全能	四・六六%	三・八四%	三・〇〇%	
全智全能のもの	二一	六	一三	
精神上からも何からも缺けてゐないもの	一	一	一	

どこも隙のない立派なもの	一	一	一
絶對自由のもの	一	一	一
(第九)良心	〇・六六%	一・六四%	六・六〇%
人の良心	三	二	二七
正しい行、又は良心に反かぬこと	一	一	一
良心の中にあるもの	一	一	二
良心のまゝに行動するもの	一	一	一
良心に響くもの	一	一	一
良心を離れぬもの	一	一	一
良心のやうに一人々々についてゐてくれるもの	一	一	一
(第十)尊いもの	四・〇〇%	四・三九%	一・八〇%
尊いもの	一二	三	八
ありがたいもの	一	一	一
氣高い尊い方	五	五	一
(第十一)人が死んだ後のもの	二・六六%	一・七〇%	一・二〇%
亡くなられた人	一〇	三	六
淨土へ行きし人	二	一	一

(第十二)人間の靈魂	一・三三%	二・一九%	三・四〇%
亡くなつた人の魂	六	四	一六
靈的生命	一	一	一
(第十三)世の中のことを裁くもの	二・六六%	一〇・四三%	三・二〇%
善いものを救ひ惡いものを罰する	二二	二	一四
我等を罰し又は幸福にしてくれる	一	一	一
人の心を裁くもの	一	一	一
(第十四)心が清く正しく美しいもの	三・七七%	三・二九%	二・〇〇%
心の清いもの	五	一	二
心の美しい人	八	四	二
心の汚れのない人	一	一	一
心の圓滿な方	一	一	一
惡のない人	四	一	二
虚言いはぬ人	一	一	一
眞實を愛する人	一	一	一
(第十五)親又は理想の親	四・〇〇%	一・四三%	〇・二〇%
親のやうなもの	一四	二	一

心の親	二	一	一	一
遠久の親	一	一	一	一
理想の親	一	一	一	一
親心	一	一	一	一
(第十六)人間以上のもの	〇・二二%	〇・五四%	三・二〇%	
人間以上のもの	一	一	一五	
人間以上のすぐれた方	一	一	一	
(第十七)悟を開いたもの	一・三三%	三・八四%	〇・八〇%	
悟を開いた人	五	四	四	
修養のつんだ人	二	三	一	
(第十八)誠心	〇・二二%	一・〇四%	一・四〇%	
誠の心	一	一	七	
誠の心にてやりつくされたもの	一	一	一	
(第十九)徳のすぐれて高いもの	一・三三%	〇・六四%	〇・八〇%	
徳のすぐれたるもの	一	一	一	
徳の高い人	五	三	四	
(第二十)人格者	〇・八八%	三・八四%	二・〇〇%	

人格者	一	二	四	
最上人格の備はつた精神的の存在	一	一	一	
聖人	二	三	三	
理想の人	二	一	三	
神格	一	一	一	
(第二十一)忠孝を盡す人	二・六六%	一・六四%	一	
忠義を盡す人	八	二	一	
愛國心のある人	一	一	一	
親に孝行をする人	三	一	一	
(第二十二)人間の理想	〇・二二%	二・七四%	一・八〇%	
高遠の理想	一	一	五	
人々の求める眞理	一	一	一	
崇高の精神	一	三	一	
人間究極の委	一	三	三	
眞實な人間の委	一	二	一	
(第二十三)萬物を造り支配するもの	〇・六六%	—	〇・六〇%	
造物主	一	一	三	

萬物を支配するもの	二	—	一
(第二十四)運命若しくは運命を支配するもの	—	—	一・二〇%
運命	—	—	二
運命を支配するもの	—	—	四
(第二十五)自然そのもの	〇・二二%	〇・五四%	二・二〇%
大自然	—	—	三
宇宙に遍在するもの	—	—	四
太陽	—	—	—
月	—	—	—
天體	—	—	—
あらゆるもの總べて	—	—	—
(第二十六)精神的のもの	—	〇・五四%	一・二〇%
神秘的のもの	—	—	二
絶對のもの	—	—	三
精神的のもの	—	—	—
人の頭にある考	—	—	一
(第二十七)具體的の名稱にて示せるもの	二・〇〇%	一・六四%	一・六〇%

お釋迦樣	五	—	—
法然上人	—	—	—
親鸞聖人	—	—	—
觀音樣	—	—	—
地藏樣	—	—	—
天照太神	—	—	—
光明皇后	—	—	—
補正成、正行	—	—	—
キリスト	—	—	—
孔子樣	—	—	—
天皇樣	—	—	—
(第二十八)言葉に出すことが出來ぬ	—	—	二・〇〇%
言ふことが出來ぬ	—	—	五
とても想像が出來ぬ	—	—	一
神佛を考へずたゞあると信ず	—	—	三
人間に本體の分らぬもの	—	—	一
以上記述するが如く、神佛の思考を叙述するに際して、その環境を異にせる少女の間に、差異が認			

められる。その大要は次の通ほりである。

〔甲〕及び〔乙〕にありては神佛を以て『人々をたすけるもの』『人々に對して慈悲の心を垂れるもの』『我々の生活を見守るもの』『偉人の死したるもの』『尊いもの』『親又は理想の親』といふやうな、その特性にて示すものが著しく多く、又『具體的の名稱にて神佛を示せるもの』が甚だ多い。

〔丙〕にありては〔甲〕〔乙〕に反して『一種特別の心の狀態』『不思議なる偉大の力』『良心』『人間の靈魂』『人間以上のもの』『自然そのもの』『精神的のもの』『言葉に出すことが出來ぬ』と叙述せるものが多い。

右の如き差異の上に、環境の宗教的氣分が影響を及ぼして居ると考へられる點もあるが、しかしながら、余等のこの研究は、單に一側的に止まりて居るから、これにつきて明確の斷案を下すことが出來ぬのを遺憾とする。

研究成績の要略及び卑見

余等が高等女學校に在學せる少女の宗教に就て研究して得たる成績は大略、上章に叙述した通ほりである。しかも余等はなるべく事實を示すことを主として實例を列擧し、それに關する説明をばなるべく簡略にすることをつとめたのであるから、ここに研究成績の報告を了するに方りて、更に余等がこの研究によりて得たる成績の要旨を擧げ、又これに關しての余等の卑見を添へて上章叙述の足

らざりしところを補足しやうと思ふ。

（一）發育年齢期の精神狀態

余等が取扱ひたる被檢者は高等女學校の生徒にして、年齢は十四歳より十九歳に至るまでのものであつた。すなはち所謂發育年齢期[1]のものに屬する少女であつた。この年齢期に至れば、それまでは全く無活動の狀態にあつた生殖器がその機能を始めるために別に思春期[2]とも名づけられるのである。

この年齢期に於けるものは、それより以前の年齢期に於ける兒童に比してその精神狀態に於て特殊の點が著しく認められる。今、ここに極めて簡單に輓近心理學上の研究に本づきて我々が知り得たる要點を擧げるのは、この年齢期のものの宗教につきて研究するに方りて、先づこれを知悉することを必要と信ずるからである。

全體、兒童にありて感覺のはたらきが活潑であり、又外界のすべての事物に對する受領能力が甚だ大であることは普通に知られたる事實であるが、此の如き精神作用は前思春期時代[3]（凡そ十一歳から十三歳まで）に至りて最も强烈となり、思春期に至りては感覺の爾後の發達が歇止するのを常とする。ただ思春期の少女にありて嗅覺の增强するのは例外である。又、發育年齢期のものにありて、身體感覺が强劇となることがしば〳〵認められる。何れにしても、感覺のはたらきが發育年齢期にありて、以前に比して、本質的に變化することは無い。これに反して、觀念（表象）のはたらきは發育年

(1) Der Entwicklungsalter
(2) Der Pubertätsalter
(3) Der Praepubertätsalter

(1) Eidetiker

齢期にありて著しき變化を呈し、その活潑及び旺盛の度を増加し、又それまでは知覺と親密に結合して居つたものが、それから離れて別の道程を取るやうになる。しかしながら思春期にありて想像のはたらきがそれより以前の年齢期に比して強いのでなく、却てむしろその反對のことが多い。觀念のはたらきの強きことにつきて主觀的觀念像のことを擧げねばならぬが、前思春期のものに、この觀念像が著しくあらはれることは近時エー・エーンシュが研究によりて明かになつた。この觀念像は體驗したる原像の後像が根本の知覺と同樣の明瞭にてあらはれるもので、尋常の後像にてはその色が補色であるのに、この主觀的觀念像にありては原像と同一の色をあらはすのである。エー・エーンシュは此の如き主觀的觀念像を呈するものを「アイデチーケル」(1) と名づけ、年齢十三歳乃至十四歳のものに最も多いと言つて居る。思春期の初期に「アイデチーケル」を見ることは少なくないが、若し發育年齢期以後のものにありてこれを存するときはそれは前思春期時代の連續と見るべきものであるとせられる。

此の如く觀念のはたらきが活潑且つ旺盛となることは前思春期の頃より思春期にまで及ぶものであるが、それよりも一層著明なるは思春期に至りて感情のはたらきが劇甚となることである。これはこの期にありて衝動生活がまし〳〵發展することの影響によるものであるが、それがために時として理解のはたらきが排斥せられることがある。殊に危險なるはしば〳〵睡眠が妨げられ、惡夢を見、時としては醒覺時に種々の內容の夢を見ることである。さうして、氣分がこの期に特殊の變化をあらはして

所謂循環性或は不定性のものとなる。さうして、この氣分の變動は又特別の影響を感覺のはたらきの上に及ぼし、周圍の同じものをば、その氣分に應じて、時によりて全く別異に見ることがある。かやうにして、思春期は氣分の最も擺でたる時代と名づけられるほどである。快感情或は不快感情をあらはすことは幼若の兒童のやうに劇しくはないが、それが持續するのを例とする。それから、思春期にありては、その感情及び氣分が記憶の作用に關係するものである。元來幼若の兒童は過去よりもむしろ現在に生きて居るものであるが、思春期のものにありては、好みて從前の生活を回顧し、殊にその體驗の不愉快なりしものが考へ出されて、その苦痛が長時の間消失せぬやうなことがある。記憶は此の如く感情の影響を受くる外に、此期にありては多樣の變化を呈し、幼若の兒童期に盛であつた器械的記憶は進みて高級の記憶のはたらきをあらはすものである。

氣分の變動は又注意の上にも影響を致し、記憶の上の影響もそれに關係するものであるが、尙ほこの外に擧ぐべきものは暗示のために動かされることが多いといふことである。殊にこの年齢期の少女にありて然りとする。しかもそれは個々の直接の暗示でなくして、却て間接の一般的暗示に動かされて、それがために、記憶のはたらきの上にその影響を致すことが多いのである。

かやうに思春期のものにありては一方にありて感情及び感情調を帶びたる想像のはたらきが强くあらはれるものであるが、又一方にありては抽象的及び返照的の思考が著しく發達するものである。單に分量的にも直觀的の觀念に對して非直觀的の觀念が增し、個別的觀念に對して一般的觀念が增すの

である。殊にこの年齢期に至れば定義の能力が著しく發達するのであるが、類似の概念を區別することは定義を下すことよりも容易なるもので、この能力は思春期のものにありては著しくあらはれるものである。

意志も亦發育年齢期にありて種々の變化を呈するものである。無論、幼若なる兒童が全然衝動生活をなして居るのではなく、年齢に相應して意識的の意志生活をなして居るものである。さうして、それが漸次に變化することは明かに認められるが、前思春期に於ける意志の變化は第一に反抗としてあらはれるものである。すなはち一定の不可制的の生活快感に於て、意識的に或は無意識的に、すべての外的權威に對して反抗して自己の意志を貫徹しやうとするのである。それが思春期に至れば漸次に變化して無目的及び無內容の自我的意志から、一定の目的を有する意志となり、それも始めは暫定的のものであるが、漸次に强甚の感情によりて反抗から離れて漸次に强固の意志をなすものである。さうして、それが大成するのは思春期を過ぎてから後にあることは言ふまでもない。

思春期にありて、精神のはたらきが、此の如く種々の變化を呈する中に、更に重要なることは、自我の發見である。年齢の進むと共に個人の經驗が增加し、自身の周圍にあるところの種々の事物につきて、これを全體のものとして考へるやうになり、思考のはたらきも已に發達して直觀的に與へられたるものと概念的のものに變じ、具體的のものと抽象的のものとするやうに、精神のはたらきが發達して居るがために、種々の場合に際して、自分の思ふ通ほりに事が行はれず、又周圍の事情に對し

て、衝突せねばならぬことが自覺せられるときに、自己の世界を發揮せねばならぬやうになりて、遂に自我の發見をなし、自分が有するところの生活力、希望、計畫及び生活の期待などをば自ら觀察するによりて、自我の價値を認むるに至るのである。かやうに、自我が發見せられて後に、生活の企劃が立てられ、種々の文化及び價値領域に入り込むのであるが、宗教も亦その一部に屬するのである。

幼若なる兒童が、已に宗教の感情をあらはすものであるか否かは疑問である。スターバツクは兒童の宗教を說きて、それは輕信を以てその特徵とすることを示して居る。さうして、それはすべての驚異的・架空的のものが特殊の感情を以て承認せられるのであるとするのであるが、それが果して眞の宗教であるか、これを確證することは困難である。兒童の年齢が進みて前思春期の頃（大約十一歲乃至十三歲）に至れば前記の精神狀態に加つて、兒童はその生活の範圍を擴大することを願求し、又新しき人格と關係を結ぶことを要請することが强烈であるがために、一定の場合に方りて、人間以上の或物を求める、さうして、恐怖及び熱望の如き原始的・利己的感情を本として神佛をば觀念の上に造り出すことがある。此の如きはカービツシユ(1)が言ふところの空想の宗教(2)で、眞の宗教と稱すべきものではない。前思春期のものにありては、この空想の宗教に併びて經驗の宗教(3)と稱せられるものがある。それは兒童が自然界を見て自分の智識の達せぬところがあると知り、又自分の力にてはどうすることも出來ぬといふことを感じたる場合、そこに人間より以上の何物かの存在を考へ、それと接觸し、その力に賴るやうになるのである。さうして、この經驗の宗教は、彼の空想の宗教よりも兒童の

(1) Kabisch-Tögel, Wie lernen wir Religion ? 7. Aufl.
(2) Religion der Phantasie
(3) Religion der Erfahrung

生活の上に強度の感作を致すものである。それから又、前思春期にありては、その宗教の上に變化をあらはして、或は現に世に行はるる宗教の事項に對して疑惑を懷き、反抗的の批判をなし、その儀式などを冷笑するものもある。それもただ疑惑を懷くといふことだけで徹底的の批判を下すのではない。或はこれに反して從來行はれたる宗教に傾むくものもあるが、これは信ずべきであるか、信ずべからざるものであるかを自から判斷しての上のことで、幼若の兒童に於けるやうに、輕信するのではない。

既に思春期（十四歳乃至十八九歳）に至れば、眞に宗教の體驗をなすべき前提があらはれ、その身體及び精神の狀態に相應して宗教的感情の發揚が著甚となることが明かに認められるのである。さうして、これはこの年齢期にありて、性慾的刺戟が始まること、不定又は新奇の事項に對して疑懼すること、現實の生活の上に滿足することが出來ぬもののあること、形而上學的に思考すること、永遠の生命を得たいこと、氣分及び感情の動搖して止まぬこと、すべて此等の諸項が原因となりて思春期のものをしてその宗教的生活を深刻にせしむるための素地をなすに由るのである。余等の研究も亦此等の事實を確認し得たのである。固より別に新しい事實を發見したのではないが、しかしながら、余等はこの研究によりて、少女の宗教の眞相を明かにし、又それによりて宗教教育の上に、一定の標準とすべきものを得たと信ずるのである。

(二) 精神的宗教

余等がこの研究をなすに方りて問題とせるところの宗教とは果してどういふものであるか、といふことにつきて一言を要する。宗教は我々人間の精神の現象にして、その形式はまことに種々雜多であるが、これを精神の狀態よりして言へば、それは自我がある一定の對象に面してあらはしたる態度に外ならぬのである。さうして、自我がその周圍に對してあらはすところの態度は普通に感情と名づけられて居るものであるから、宗教といはるるものは感情の特殊のものに屬するものとすべきである。しかも、その感情は兒童の宗教や野蠻人の宗教に於て見らるるやうに原始的・利己的のものでなく、ある一定の對象に對して自からにして起るところの恭順・謙虛・讃歎・喜悅・歸依などの非功利的の感情である。それ故に、勿論、宗教は感情に本づくものであるとすべきことは當然であるが、しかしながら、我々の精神の中には感情のみが獨立して存在するのではなく、又感情はそれ自身に實現せらるべきものではないから、一旦感情が動くときは、それに次ぎて智能のはたらきが起りて、その感情を實現せしめるものである。かやうにして宗教の感情も、これを智能の內容に移されて、その感情が固定せられるのである。さうして、その感情は、普通にては知覺すべからざるものを知覺し、普通にては觀念すべからざるものを觀念して、遂に超越的世界の觀念を造り上げるのである。これをその感情のはたらき自己よりして言へば、制限ある經驗世界を超越したる自由の世界を要求するもので、か

やうにして象徴的に考へられたる主觀が、客觀化せられて超越的世界があらはれるのである。宗教と名づけられる精神の現象は、此の如くにして我々の心の上に創造せられたる超越的世界に對して、我々の自我が當面して、その時にあらはれるところの自我の態度に外ならぬものである。余等がここに精神的宗教といふところのものは全く此の如き精神の狀態を指すのである。さうして、これが眞の宗教であると言はねばならぬものである。

(三) 神佛の觀念

宗教の意味にていふところの神及び佛は、すなはち前に言ふところの超越的世界のことである。(西洋の宗教にていふところのゴットなどを神とし、佛教にて佛といふものをも併せて神佛と併せ言ふ。これは調査の便宜上に從つたのである)。さうして、これを超越的とするのは我々の感覺による經驗を離れたものであるといふことを意味するもので、この現實の世界を離れたるところに別の世界が存するといふやうなことではない。心理學の言葉にて言へば我々の觀念として認められたるものである。これを指して神といひ、或は佛といふのは、宗教的觀念にして、この觀念が人間以上の或物として、人々の宗教的感情の對象となるのである。言葉を換て言へば、我々の精神が制限ある經驗世界を超えて自由の世界へ進出しやうとする感情の要求が客觀化せられたものが神佛である。さうして此の如き感情が客觀化せられるのは、想像及び思考などのはたらきによるのであるが、それは我々が經驗

の世界にありて得たるものを、象徴的に、いまだ經驗せざる世界に移すもので、これによりてあらはれたものが神佛である。その故にこれを觀念といふよりも思考といふ方がよい。しかもそれは尋常の思考でなくして、宗教的の思考で、直觀的・非論理的のものである。その思考が客觀化せられ、又人格化せられて神佛が創造せられるのであるから、神佛の觀念はその人が體驗せる宗教の內容を表現したものに外ならぬとせねばならぬ。

余等の場合にありて、神佛を以て人々の精神狀態の特別のものであるとして、その特別の狀態に神佛の名を附したるものとしたもの、更に卒直に神佛は我々の精神の產物であると言へるもの、又神佛とは神佛を信ずる精神の態度を指していふものであるといふやうに、神佛の本質をば心理學的に善く答辯したものは九百九十五名の中にて僅かに四十八例の少數で、百人中に五人足らずの僅かなる數であつた。多數のものは神佛は人々をたすけるもの、明るい世界へ導くもの、慈愛の心を垂れたまふ方、我々の生活を見守るもの、全智全能のものなどと、その特性を擧げて、しかもその神佛は我々の心の外に存在せるものの如くに考へたので、その數は百名中約三十名位であつた。その他、神佛を以て不思議なる偉大の力であるとし、或は偉人が死したるものが神佛であるとし、甚しきは普通の人でも死したる後は神佛となるとなし、或は單に人間以上のものであるとする等、原始的の神の標徴として野蠻人が擧げたる威力の負擔者として神佛を考へたるものも尠なくなかつた。神佛は人々を極樂・天國へ參らせて下さるものとしたり、白い長い著物を著たやさしい人としたり、或は釋迦、キリスト、

觀音、地藏などの名稱を擧ぐるなど、その神佛の觀念の極めて低級なるものもあつた。

かやうに、余等の場合にありて、神佛の本質につきての考が種々であつたことは別として、神佛につきての觀念が亂雜で、明瞭を缺いで居ることが明に認められるのである。この事實は少女が自から經驗せるところの宗教的感情及び從つて宗教的思考が眞實のものでなく、尠なくとも不明確のものであることを示せるものである。さうして、余等はこの事實を以て宗教的教育の實際上に注意を要すべき點であるとするのである。中には、その精神のはたらきの上には、明かに確實の宗教的感情をあらはしながら、これを十分に思考の上に移すことが出來ずして、それがために表現の言葉が不十分であつたものと認められるものが、余等の例に有つた。余等はこれもまた宗教的教育を受くることの不十分であつたことを示すところの一證左であると信ずる。

既に上章に述べたやうに、神佛の觀念は各人が體驗せる宗教的感情が智能の方面に移されたるものであるが、それが神とか佛とかといへる言葉（概念）となりて、その人の精神から離れて、廣く世の中に傳はるときは、刺戟語となりて、この言葉を聞知する人の精神を動かして、宗教的感情をあらはすことがある。これによりて、宗教は個人的體驗から出でて社會的作用をなすものである。余等の場合にありても、自分の精神に既に宗教的感情をあらはすべき素地の備はつて居つたものだ、一定の機會に際して、家庭又は世間にて聞知したる神佛のことを考へたと告白したものもあつた。しかしながら、その人の精神に、何等宗教的感情をあらはすべき素地の備はつて居ないものが、ただ概念として

の神佛の觀念に接しても、そこに眞の宗教的感情をあらはすといふことは甚だ疑はしい。余等の例にありても此類に屬するものと認めるべきものが大多數であつた。

かやうに、眞の宗教的感情があらはれるには、主觀的因子と、外緣としての刺戟語とを必要とするもので、刺戟語とは廣い意味にていふもので、單に言葉のみには限らず、むかしの高僧や擧實なる信徒の態度や說教や法話などをすべて刺戟語とするのである。それ等のものの中に一種の刺戟を含蓄して居り、それによりてこれに接する人の精神に宗教的感情があらはれるのである。しかし、それに對してただそれを理解し且つ記憶するだけに止まりては何等宗教的感情はあらはれぬのであるから、刺戟語に對する自我の態度即ち主觀的因子が宗教的感情をあらはす素地を有して居らねばならぬ。この點から考へて、宗教的教育を施すに方りて、ただ單に宗教的觀念を始として、刺戟語のみに重きを置くことは、その効果が十分ならざる所以であると言はねばならぬ。余等はこの回の研究の成績に徵して、一層この感を深くするのである。

ここに附けて一言すべきことは刺戟語として擧ぐべきものの內にて、聞法によりて神佛のことを考へたと答辯せるものは第四學年より第五學年に至りて最も多きに反して、宗教の會合に列せるとき、宗教の儀式に際して、神社佛閣參拜などの場合に神佛を考へたと答辯せるものは第一學年よりして漸次にその數を減じて第五學年には皆無の場合もあつたほどである。これによりて見ると、宗教的儀式によりて印象を受くることの强きは初學年級のものに多く、これに對して說教、講話、讀書等すべて

聞法によりて動かさるるものは高學年級のものに多いといふことが認められる。これも亦、宗教的教育の實際に於て注意すべきことであると思ふ。

（四）宗教的體驗

余等の場合にありて、神や佛を考へた動機の大多數のものは身體的苦痛及び精神的苦痛（死亡、疾病、苦惱、悲哀、災難等）に際して、恐怖と希望との感情よりして神や佛の救助を要求したことで、被檢者の約半數に近きものがさうであつた。しかしながら、此の如き功利的の感情を主とするものが果して宗教的體驗と言はるべきであるか、余等は此の如きものをば所謂自然的宗教の中に列すべきものと考へる。さうしてこれは眞の宗教に屬すべきものとすることは出來ぬと思ふ。

元來、眞の宗教的感情と名づくべきものがあらはれるのは兒童が一定の年齢に達したる後のことである。幼若なる兒童は固有の自我と自己意識とを有せずして、ただ感じ、又ただ思ふのみである。又自我意識の固有の中心核たる感情的及び意志的因子を知能化することも十分ではない。それが漸次に發達して前思春期の頃に至れば身體感情が強くなり、固有意志が成長して、漸次に固有の自我をば他の人格から區別するやうになるのであるが、思春期に至りて、始めて自我の發見をなすといふべきほどに、自我の相を意識し、その價値をも認むるに至るものであるが、かやうにして漸次に文化及び價値領域に入るに方りて、已に上章にも述べたやうに、不定又は新奇の事情に對して疑懼すること、現

實の生活の上に滿足することが出來ぬもののあること、形而上學的に思考すること、人間が無力であること、殊に自己が無能であるといふ低格感情があらはれることなどの諸項があらはれて、それ等が素地となりて始めて眞の宗教的感情があらはれるものである。更に約めてこれを言へば、思春期に至れば生活の問題につきて起るところの感情が、宇宙の根本及び意義を穿鑿することに始まり、ここに精神內部の困厄があらはれ、自責の念が起るによりて、眞に宗教的體驗をなすべき機會が與へられるのである。余等の場合にありて、此の如き素地ありて、眞の宗教的感情をあらはしたものと認むべきは地球の生滅、世界の成立、生死の問題、自然、自己の內面などに就て思考したるときに神佛を考へたと答辯したるもの七十六例の中に存するやうに思はれる。しかもそれは第五學年のもの（年齢十八歲乃至十九歲）に多いのである。固よりこの素地の如何は、個人の稟賦にもよるものであるが、教育の方法によりてある程度までこれを助長することが出來る筈であるから、宇宙及び人間の成立、人間の宇宙に於ける位置等を始として、自己を內觀して、それによりて宗教的感情の素地をなすべき要項を說き示すことは宗教的教育の根本義をなすものであると、余等は信じるのである。

（五）道德と宗教

宗教が道德から成長したものであるといふことは西洋學者の間にも行はれて居ることで、彼の哲學大家カントの如きも同樣の意見であつたといはれて居る。しかしながら歷史的・心理學的の事實は決

してそれと一致せぬ、却て宗教と道德とは全く相異したる根源を有するものであるといふことを證明する。又西洋の神學者の中にはすべての道德は宗教の上にその根據を有すると說いて居るものもあるが、實際この所見も的確のものでない。元來、宗教と道德とはそれ〴〵獨立の文化の一枝にして、その一方から他方のものが生長したのではないことは明かである。ミュルレル、フライエンフェルス氏の說に據れば、宗教と道德とは固よりその根源を異にするものであるが、長き發達の間に於て、兩者が相結合するもので、道德は宗教を利用してその要求に超越的の靈感を與へ、又一方にありては道德は宗教に對立して宗教的所見と倫理的所見とを結びつけるものである。それによりて宗教的觀念の中に道德的內容が入り込むので、現に基督教の如きは宗教の道德化をしたものであるといふことである。余等の考ふるところに據れば、宗教と道德とは固より相異せる精神的現象であることは言ふまでもないことであるが、眞の宗教の心のはたらきは道德的意識の明瞭であることを前提としてあらはれるものである(上章九三頁參照)。それ故に若し道德的意識が明瞭を缺いで居る場合には眞の宗教の心があらはれることがないと言はなければならぬ。しかしながら倫理的行爲は自我が超越的世界に對して直接にあらはすところのものではないから、これを宗教的行爲といふことは出來るが、その倫理的行爲がすなはち宗教であるといふことは出來ぬと思ふ。基督教及びその他の宗教にありては倫理的行爲が神に奉仕する最貴の業であるとせられて居るが、これは言ふまでもなく倫理的行爲が宗教的に尊崇せられるもので、倫理的の要求と戒律とが神の意志の表現の性質を有するのである。若し人々がそれを

十分に爲すときは神の意に叶ひ、その守護を得るとするのである。しかしながら眞の精神的宗教とすべきものにありては、神佛は善惡・正邪を度外視してすべての人々を救ふとするのであるから、そこに倫理的行爲によりて神の意を迎ふることを要せぬのである。余等の例にありても神佛は惡を懲し善を勸め、世の中のことを裁くとせるが如き(第五八、五九、六〇例)、或は神佛は人々の行爲を監視するものとせるが如き(第六八、六九例)、或は眞心(誠心)が直ちに神佛とせるが如き(第七六、七七例)、神佛を以て倫理的の眞理とせるものが少なくなかつた。余等の信ずるところに據れば、此の如く道德と宗教とを混同して考ふることは眞の宗教の心をあらはす上に障碍となることが少なくない。固より宗教が道德と矛盾するのでなく、却て道德を尊重してしかもその道德が實踐し得られざる苦惱の心からして宗教の心があらはれるのであるから(上章九三頁參照)、宗教の心は實際に於て道德の行爲を無視するものでなく、却てこれを確實ならしめるものであることは言ふまでもない。

(六) 宗教と知識

宗教が個人の精神現象に屬するものであるといふことは、上章にくりかへして叙述した通ほりであるが、しかしながらそれが人間の文化の一枝である以上、必ず他の文化の枝と接觸せねばならぬことであり、さうして、他の文化領域と接觸するに從ふて、宗教の形式がその影響を受ることも亦當然である。

元來が個々の人々の精神の深奥にあらはるるところの宗教的體驗は全然個人的のものであるが、それが他の文化領域と接觸するによりて、普遍化せられ、又客觀化せられ、さうして、更に倫理的・審美的・論理的（智能的）及び經濟的の要求に相應して、その形式が種々に變化せられるのである。かやうにして、個人的の宗教（むしろ宗教性といふべきか）は個人的の性質を失なひて社會的のものとなり所謂組織的宗教をなすに至るのである。しかしながら、組織的宗教となつて、客觀的の外觀を備ふるに至りても、實際にそれを體驗するがためには再び個人的の性質を得ねばならぬことは勿論である。

此の如く、宗教が元來個人的から社會的に變移すると同じやうに、審美的及び智能的生活も元來は個人的のものであるが、それが個人を離れて普遍化せられて一定の組織をなすに至りて遂に藝術と科學とが成立して、ここに客觀的の美と客觀的の眞とをあらはすに至るものである。さうして、宗教が藝術と科學と相併びて文化の領域を進む間に、相互の接觸が漸次に親密になりて、その結果、或は科學が宗教に從屬して、宗教の形式が科學の理論に相應することになるか、或は宗教が科學の要求を容れてその形式を變更することになるのである。印度の古代の宗教の如きは、宗教と哲學とが親密に結合して殆どこれを區別することが出來ぬほどであつた。希臘にありては自然哲學と宗教とは始めは相離れて居つたが、後に至りて漸次に形而上學が宗教の問題に接近するやうになつた。猶太の宗教にありては始め神學的思索の外に、哲學的思索とすべきものは殆ど皆無であつたために、ヘブライ人の强

き主智性は宗教の問題に沒頭し、種々の穿鑿をしたのであるが、後に基督の信仰と混淆して遂に「ノスチツク」教と稱せられるものを造り、基督教にて示さるるところの眞理を理性的に認識することを要すと唱道するに至つた。中古の歐洲にありては、なほ宗教と哲學との調和が策せられ、しかも宗教が上位を占めて居つた。しかるに近世に至りては宗教は漸次に哲學及び殊に近時勃興したる自然科學に對して防禦の位置に立たねばならぬやうな狀況になつた。

此の如き歷史的事實はしばらく措て問はず、心理學上より見るときは、各國に於ける宗教は近代に至りて、科學の影響を受けてその形式の上に種々の變化をあらはすに至つた。その第一に擧ぐべきことは自由の解釋にして、經典の內容でもその文字通ほりの解釋をせずして、その中に存するところの精神をつかむことを肝要とするに至つたのである。この意味に於て、基督教にありても、現にその宗教的思考の上に一大變化を致して居ることは、彼の素朴なる神人同形說を棄てて神は善或は「ロゴス」の理念であるとなし、或は絕對の理念であるとするなどを見れば明瞭である。此等の事は要するに、宗教の智能化（論理化）にして、これによりて宗教的の感情が、その知識と背馳することのない表現をしやうとする努力に外ならぬのである。

しかしながら、宗教的感情に本づきてあらはれるところの信仰と、知能のはたらきによりてあらはれるところの知識とは、全く相異したる精神現象であるから、兩者を合一せしむることも出來ず、又兩者が相衝突すべきこともなく、科學と宗教とは共に人間の文化の要素として相併びてその機能を發

揮すべきものであることは贅辯をまたぬところであらう。

（七）宗教的教育

この小報告を畢るに際して、余等はなほ宗教的教育のことにつきて少しく卑見を附錄して置かうと思ふ。

一。宗教は他の文化領域、哲學・科學及び藝術等と同じやうに、適當の教育を施すことを必要とするものである。しかるに、現在の狀勢にありて、他の文化領域にありてはそれ〴〵相當の教育法が講究せられ、又實施せられて居るに拘らず、ひとり宗教に於て、その事のまだ十分でないことは遺憾とせねばならぬことであると思ふ。

二。教育を廣き意味に考へれば、それは兒童の身體及び精神の發達を健全にし、又これを催進することである。生物學的に見れば、すべての生物個體は、その環境に對して、それに順應するやうに自己を變化せしめる、くわしく言へばその態度を變化せしむるものである。身體及び精神が發達するといふことは、かやうに身體及び精神がそれに對立する環境に順應するやうな態度を取ることによりて成立するものである。それ故に、若し環境が佳良（發達のために）であればそれに對する變化も亦佳良であるから、その發達が健全である。かやうにして、兒童の身體及び精神はその環境に順應して變化するのであるから、身體及び精神の先天性素質と、それに對立する環境の如何とによりて、その發

達はいかやうにもなるのである。これは生物學上の事實である。素質は固より遺傳（生れつき）のものであるが、それに對立する環境は一定度までは我々の力によりてこれを左右することが出來るのであるから、意識的にこの環境を左右してそれによりて身體及び精神の發達を健全にしやうとするのがすなはち狹義の教育である。しかしながら、さういふ狹義の教育のみでなく、兒童自身も意識せず、周圍の人々も意識することなくして、環境として兒童に對立するによりて兒童の身體及び精神にあらはるるところの變化は廣義の教育として、その影響するところはまことに重大である。

三。此の如くにして兒童は生れながらにして、その環境よりして廣義の教育を受けて居ると言はねばならぬ。宗教につきても、この廣義の教育を、その環境より受くるのであるから、宗教的教育の第一要件は、兒童の宗教的環境を適正にすることをつとむるにある。それには言ふまでもなく、宗教的思考を明確にし、又人々の宗教的行動（禮拜、祭祀、讀經等）を正規ならしめるやうにつとむべきである。已に明確なる宗教的思考を有し、又その宗教的行爲の正規である人々の間にありて、生長するところの兒童が、無意識的にその環境に對してあらはすところの態度（宗教的感情）の佳良であるべきことは言ふまでもない。さうして、この事は狹義の教育にありても、同樣で、その宗教的思考が明瞭でなく、從つてその宗教的行動が正規でない人々が、故意に狹義の教育を施したとしても、その効果の不十分であることは當然である。

四。宗教的教育の重要なる任務としては個々の兒童をして實際に宗教的體驗を醒起せしめ又それを

備進することをつとむべきである。さうして、その方法は固より個々の兒童の素質に相應して適當と認むべきものを撰ぶべきであるが、概して言ふに、道德的判斷を明かにして倫理的內省を深くせしむるを始とし、宗教的宇宙觀及び人生觀を示して、宇宙に於ける自己の地位を覺知せしめ、これにより て宗教的に自己を內觀する途を開かしめることが必要であると思ふ。思春期の年齡にありては、生活の問題に對する感情の發達が著しく、それに宇宙の根本や意義などにつきての穿鑿をなし、又精神的の苦惱などもありて宗教的體驗をなすべき豫備條件が始めて備はるのであるから、宗教的教育は高等女學校の第一學年からこれを始めるべきであると思ふ。

五。高等女學校生徒に對して、無暗に傳統的の宗教の形式を信奉せしめ、又その宗教的行爲を强制することなどは、眞にそのものをして宗教的感情を起さしめるの効力は甚だ弱いものであると言はねばならぬ。かやうに、他の人々から傳へられたる宗教的思考は、素朴的にこれを信ずることにより て、一時的にその精神現象の發呈を左右し得ることはあるが、その刺戟が去れば再び故に復するものであるから、眞に宗教のはたらきをするものではない。それに一旦强く信じたことでも何等かの機會にその信仰が破れて、再び前のやうな効果があらはれぬことが多い。現に余等の例にありても、傳統的の宗教の教義や形式などにつきて疑をいだくものが少なくなかつた。更にそれに對して反抗の態度を示したものも有つた。此等の事實は宗教的教育の實際上、大に顧慮すべきことであることと思ふ。

○

此の報告を終るに臨み、本問題の研究を余等に命じ、不斷の御指導と御鞭撻を賜はり、且つ精細なる御校閲の勞を忝うしたる恩師富士川先生に對し謹みて深き感謝の意を表し、又この研究につきて精神的並に物質的に多大の便を與へられし、我が中山文化研究所主中山太一氏に對して滿腔の謝意を致す、並に平素余等の研究を援助せられたる中山文化研究所員各位に謝意を表す。

尙、更に余等の研究の趣意を諒とせられ、資料を得るに當り、特別なる御便宜を賜はりたる各學校當局及び主任教諭各位の御厚意に對し深甚の謝意を呈する次第である。

○

參考書籍

1) *E. D. Starbuck*, The Psychology of Religion. 1901. Deutsch von Vorbrodt und Beta. 1909.
2) *W. James*, The Varieties of Religious Experience, 1902. Deutsch von Wobermin. 1907.
3) *Richard Müller-Freienfels*, Psychologie der Religion 1920.
4) *Gruehr*, Religionspsychologie. 1926.
5) *Erich Stern*, Jugend-Psychologie. 1931.
6) *Hans Schlemmer*, Die Seele des jungen Menschen im Entwicklungsalter. 1926.
7) *Spranger*, Psychologie des Jugendalters. 1927.
8) *Otto Tumlirz*, Einfülrung in die Jugendkunde. 1931.

9) *Charlotte Bühler,* Kindheit und Jugend. 1931.

10) *W. Illge,* Das Religiöse im Seelenleben des Volksschülers. Zeitschr. f. pädag. Psychologie. 1932.

11) *Sophie Kühnert,* Ein Beitrag zum religiössitlichen Leben des Jugendlichen. Zeitschr. f. pädag. Psychologie. 1932.

12) *Adolf Busemann,* Pädagogische Jugendkunde. 1931.

13) *Johannes Prüfer,* Wie erziehen wir unsere Kinder? 1929.

14) *Schreiner,* Pädagogik aus Glauben. 1931.

15) *Georg Wobbermin,* Religion. Die Methoden der religionspsychologischen Arbeit. 1921.

16) 關寛之氏。基本選定兒童群に於ける宗教意識の基礎的研究。兒童研究所紀要第十三卷

17) 海老澤亮氏。宗教々育の心理的基礎

18) 今田惠氏。宗教心理學

19) 江上秀雄氏。教化と心理

20) 富士川游氏。科學と宗教

21) 富士川游氏。宗教の心理

22) 富士川游氏。倫理と宗教

クラブ化粧品本店中山太陽堂經營 中山文化研究所 事業概要

文化生活の第一義諦

内的には精神生活の信念確立
外的には科學智識の理解應用

現代社會の眞摯なる要求は內的には精神生活の基本たる信念を確立して人格の完成に努め外的には科學智識を理解應用して生活諸般の改善を圖り精神文化と科學文化との結合により充實せる眞生活を實現するにあり。吾が中山太陽堂は大正十一年四月三日創業滿二十周年記念事業として如上の要求に應ぜんが爲め中山文化研究所を創立せるが、更に第二期事業として東京市麴町區內山下町東洋ビルヂング四階に文化研究機關を新設し、昭和元年二月十一日を以てその事業を開始せり、蓋しこれによりて主觀的及び客觀的文化の向上促進に資し以て所期の理想に到達せむことを企圖するなり

東京中山文化研究所事業要項

(一)婦人文化講座　婦人の生活にとりて最も必要なる科學的知識の應用と、精神生活の向上とを期するために、諸般の範圍に渉れる講座を開設す。今日までに開催したるは兒童教養講座、大乘起信論講座、原人論講座、中庸講座、實語教講座等にして數月に渉りて連續これを開催し、目下、毎月一回童子教講座を開催して居る。

(二)婦人文化研究及び調査　婦人文化に關する問題、殊に家庭教養及び精神生活につきて研究及び調査をなし、その成績を種々の形式にて報告す。

(三)科學と宗教講座　人々の宗教意識を明瞭にしてその精神生活の向上を期するために宗教の科學的説明をなすことを目的として、毎月定期に講座を開き、隨意聽講を許して居る。

(四)婦人精神文化研究會　婦人精神文化を促進する第一歩として、その根本たるべき宗教の研究をなすことを趣旨として、東京、京都、大阪の三處に於て、毎月定期に集會を開き、講話及び談話等を施行する。

(五)通俗展覽會　兒童教養、家庭文化を始めとして精神文化の各方面に關する通俗科學展覽會を隨時開設する。この通俗科學展覽會は當該問題に關する科學的知識の普及を圖ることを目的とするものにして、多紀の表紀、圖畫、寫眞、標品等を分類陳列して、それによりて當該問題に關する現代の科學的知識を一目の下に瞭然たらしめるやうに計畫してある。今日までにこの展覽會の催されたものは兒童教養、學童保健、家庭文化及び迷信に關す

るもので、東京、京都、大阪その他の都市に於て我が研究所自からこれを開催したる外、名古屋、廣島、神戸、岡山、吳、札幌、小樽、函館等各地に於ける各種團體又は學校等の希望に應じてこれを開催したること頻回であつた。さうしてこれは何時にても希望によりて無償開催の依頼に應ずるのである。

(六)談話室　研究所内に談話室を設け、無料にて婦人の學術に關する集會の使用に提供する。

(七)教養相談　兒童の教養殊に異常兒童の取扱に關する相談の求めに應ずる。

(八)精神文化　婦人文化に關する諸般の事項を報告するの機關として本研究所に於て「婦人文化」と題する月刊雜誌を刊行せしが、昭和元年これを改めて「精神文化」と題し、爾來引き續き毎月一回定期にこれを刊行して居る。これは精神文化に關する知識の普及を圖るを目的として、目下は宗教の通俗講話を誌上に掲げて居る。

(九)刊行物　本研究所に於ては右の定期刊行物の外に隨時、小冊子を編纂刊行する。これまで公にしたる刊行物の主要なるものは次の通ほりである。

愛兒の服裝	一冊	定價金三圓
兒童の教養	一冊	正價金一圓七十錢
迷信の研究	一冊	正價金二圓五十錢
眞實の道	十冊	絶板
釋尊の教	一冊	定價金一圓

親鸞聖人の宗教	一冊	金壹圓
婦人文化	三卷	絶板
內觀の法	一冊	定價金八十錢
彌陀教	一冊	定價金八十錢
中山文化研究所紀要 第一冊		非賣品
中山文化研究所紀要 第二冊		非賣品
倫理と宗教	一冊	定價金八十錢
新釋實語教	一冊	定價金五十錢
讀法童子教	一冊	定價金二十錢

東京市麹町區內山下町一丁目一番地東洋ビルヂング四階
中山文化研究所
電話銀座一二四番
振替口座東京二〇八七四番

所主 文學博士 中山太一
所長 醫學博士 富士川游

新刊

讀法 童子教

全一冊
定價 金貳拾錢
郵稅 金貳錢
施本用として十部以上一纏めに勝求せらるる方には定價を割引する

「童子教」は「實語教」と併びて、古くから我邦の民間教育の講本として行はれたる小冊子である。その著作の年代は明瞭でないが、これを選んだ人は天台宗の學僧で、有名なる五大院安然和尙であると傳へられて居る。當時行はれたる儒教と佛教との所論を主として、初學の童蒙に適切の教訓を說き示したもので、しかも、この書はこれまで久しき年月の間、庶民教育の講本として、專ら行はれたるものであるから、それが我邦の人々の精神文化の上に幾多の影響を致したことは言ふまでもない。それ故に、我儕が、現在の智識に基づきて、この書の內容を再吟味することも全く無用の業でないことを信じ、ここに讀法を附して、活版に上ぼし、廣くこれを世に頒つこととしたのである。

東京市麹町區內山下町一丁目一番地
東洋ビルヂング四階
發行所 中山文化研究所
振替口座東京二〇八七四
電話銀座一二四番

文學博士・醫學博士 富士川游 述

新釋 實語教

全一冊
定價金五十錢
郵稅四錢
施本用として十部以上一纏めに勝求せらるる方には定價を割引する

「實語教」は明治維新前にありては幼童の讀物として廣く行はれたものであるが、平安朝時代の末の頃既にこの名が諸書に見えて居る。佛教と儒教との所說を融和し、深切に人々のたましひをそだてることにつきて敍述せるものである。さうして、この書は長い時の間、我邦庶民教育の根本をなして居つたのであるから、精神文化の發展の上に多大の貢獻をしたことは改めて言ふまでもない。述者は新にその意義を解釋して、これを現代の人々の讀物として提供し、少なくとも現に家庭の主たる母親若くは將來に於て母親たるべき人々に對してこの書を一讀せられむことを要求して、これを刊行したのである。（述者曰）

東京市麹町區內山下町一丁目
東洋ビルヂング四階
發行所 中山文化研究所
振替口座東京二〇八七四

文學博士・醫學博士　富士川　游　講話

宗教生活

思ふに、我々の日常生活は貪慾・瞋恚・愚癡の三毒に滿ちたもので、これを除いて我々の心の中には何物もないのである。我々はどうにかしてこの三毒の煩惱がなくなるやうにと念願せざるを得ないのであるが、それは學問によりて得らるべきでなく、道德によりて達せらるべきでなく、ただ我々が正しい宗教生活を營むことによりてのみ成就せらるべきことである。此書は講師が親鸞聖人の言行を傳へたるものとして知られたる「嘆異鈔」の成文に據りて、婦人精神文化研究會に於て、宗教生活の方針を說かれたものを筆錄したものである。講述は平易で、誰人にも理解せらるべきものである。この道に志す人々にとりて裨益があることと信ずる。

全一冊〇定價金八拾錢〇郵稅金四錢

發行所　中山文化研究所

醫學博士・文學博士　富士川　游　述

友引の迷信

擇日をやかましく言ひて、その吉凶を問題とし、それによりて日常萬端の事を處することは我邦にありて古くから行はれたる迷信である。その中に就きて**友引**と名づけたる日に葬式を忌むことは現代昭和の聖世にありても尙ほ盛に行はれて居る。それがために自他共に多大の迷惑を被ふるは勿論、延いて世間に害毒を流すことの著しきは今更擧げて言ふまでもないほど著明の事實である。しかるに、今日所謂知識階級の人々の內にも深く此の如き迷信の由來する所を窮めず、又その內容の如何を考ふることをせず、ただ因襲の流れに從て世俗に倣ひ、强てこれを排斥するに及ばずと、平然としてすまして居るものがある。かかる人々の態度は、まことに嚴肅なるべき人生に對して全然遊戲半分であると評する外はない。苟も醉生夢地に甘ぜざる限り、人々はその生活の向上を願ひ常に多大の幸福を得むことを求めざるを得ぬ。しからば此の如き迷信のために我々の生活が傷つけられることを防護することにつきて眞面目に努力せねばならぬ。この小冊子には此の如き趣意に本づき友引の迷信を排斥せむと努力する人々のために一箇の資料を提供せむとするのである。

目次　序言〇六曜とは何か〇友引とは何ぞや〇日の吉凶

定價　一冊金十五錢郵稅二錢〇七冊以上割引〇七冊金一圓

發行所　中山文化研究所

文學博士・醫學博士　富士川　游　講話

釋尊の教

全一冊○定價金一圓○郵税金四錢

釋尊が説かれたる教は、言ふまでもなく、佛教と名づけられて、古くから我邦に傳はり、奈良朝時代から平安朝時代に及びて、その教はまた〳〵盛に行はれ、それに關する典籍はまことに汗牛充棟といふべきほどに多數である。しかしながら、それ等は多くは專門の學問に關するもので、宗派〳〵によりて種々の書物が行はれて居るにも拘らず、佛教をば宗教として味ふためにはあまりに學究的で、佛教專門の學問に通ぜぬ人々にありてはその要旨を捉ふることすら困難である。宗教は固より哲學でなく、又倫理でなく、生死の苦惱を解脱するためのものであるから、思辯や工夫は何等の用がなく、安心立命を得るためには釋尊が説かれたる教の精神を體得することが第一である。この一篇は前述の趣旨に本づきて中山文化研究所に於ける婦人精神文化研究會の席上にて十數回に渉りて連續的に講話せるものを筆錄したるものである。僅に百六十頁の小冊子であるが、その中に釋尊の宗教を極めて簡單に叙述してあるから、この道に志す人々に取りて參考の裨益があると信ずる。

發行所　中山文化研究所

中山文化研究所發行　文學博士・醫學博士　富士川　游　監修

迷信の研究

全一冊　菊判二八〇餘頁　精密圖畫多數挿入　正價　金貳圓五拾錢　郵税　金拾四錢

内容目次

總體・迷信・迷信の歴史・迷信の階段・迷信の根本・迷信と構想・迷信と暗示・迷信と妄想・科學と迷信・迷信と教育・生活と迷信・迷信の分類・思考の錯誤・迷信と偏見・錯視現象・迷信者の心理・迷信の光明面　**身體**・身體・人體十二宮配當・人體の七曜配當・人體五行配當・厄歳・厄歳の俗説・相尅・相生・男女相性・有氣・丙午の迷信・丙午のさとし書・丙午歳生れ子のさとし書・丙午の説・丙午の説・丙午明辨・丙午の川柳・運勢の迷信・運勢の判斷・開運求福　**精神**・精神・魂魄・イキズタマ(怨靈)・幽靈・魔・惡魔・鬼・鬼の圖・化物(妖怪)・百鬼夜行・天狗・憑靈・憑靈(二)・返魂の迷信・返魂香・再生の迷信・所謂秘密科學・神靈寫眞・海坊主　**疾病**・疾病・病魔・疱瘡神・療法の變遷・素人醫學・迷信的民間療法・醫術の變遷・疾病と迷信・黴菌恐怖・魔法・兇符・奉納物・小繪馬・合食禁・動物憑依　**姙娠及娩産**・姙娠及娩産・胎兒の男女・遺傳の迷信・不注意的缺陷・娩産の迷信・催生靈符・安産の神・安産護符・姙娠祈願・安産祈願・乳汁分泌祈願　**育兒**・育兒・胎毒の迷信・ちりげの灸・宮參・緣起玩具　**禁厭**・禁厭・急急如律令・禁厭の方法・　**相法**・相法・骨相術・人相術・看掌術・手蹟學・墨色判斷・姓名判斷・家相　**卜占**・卜占・卜筮・卜占の諸法・占夢術・夢占・寶船　**天文及び暦**・天文及び暦占星術・陰陽八卦説・十干・十二支・五行説・九星説・六曜占・方角の迷信・惠方・鬼門・俗暦・三鄰亡暗劍殺・不成就日・友引・本命星・淘宮術・鹿島要石　**犯罪**・犯罪・犯罪的迷信・迷信による犯罪の例　**宗教**・宗教・自然的宗教・精神的宗教・眞實の宗教・疑似の宗教・宗教と迷信・佛教と迷信・岐神(ふなとのかみ)・荒神・毘沙門天・鬼子母神・辯才天・閻魔・妙見・帝釋(さへのかみ)・庚申塚・神佛の像・不動・天聖・大黑・夷(えびす)・地藏・藥師・稲荷・觀音・俗信の神佛・「ファルス」崇拜・石崇拜・動物崇拜・植物崇拜・山岳崇拜・眞言立川流・石佛堂・禪祭

發兌書肆　東京市本郷區本富士町(振替東京三一八一〇番　電話小石川七七六七番)　養正書院

中山兒童教養研究所發行　文學博士・醫學博士　富士川　游　監修

兒童乃教養

全一冊○菊判○二百餘頁
○多數圖畫挿入○正價金
一圓七十錢○郵稅六錢

兒童をば善く且つ強く又我々國民の要求に副ふやうに教養するには、現代の科學の知識に基きて合理的にこれを教養せねばならぬ。我が富士川博士を所長とせる中山兒童教養研究所は深くこの點に鑑みるところがありて、兒童教養に關する現代の科學的知識の普及を圖るために兒童教養に關する通俗科學展覽會を開き、多數の表紀・圖畫・寫眞・標本等を蒐集し、これを總說、遺傳、發育、乳兒、幼兒、學齡期兒童、成熟期兒童、器官、榮養、衣服、住居、睡眠、疾病、異常兒童の部門に分ち、或はこれを內外諸家の論說に徵し、或はこれを自家經驗の所得に照し、その要を摘み、華を拔き、展觀の便に供せられた。この書はその內より更に實際に緊要なりと認められるものを選みたるもので、まことに現代に於ける兒童教養の科學的知識の精華を集めたるもので、多年の辛苦によりて始めて得らるべき知識が僅に數時間の間に得らるべき利益がある。世の母親たるもの、兒童保護の任に當るもの及び兒童教養の職にある方々のために最善の講本であることを信ずる。謹しみてこれを江湖に推奬する。

發兌書肆　東京市本郷區本富士町二番地（振替東京三一八一〇番　電話小石川七七六七番）　養正書院

昭和十年十一月八日印刷
昭和十年十一月十日發行
（非賣品）

發行者兼編輯者　東京市麹町區内山下町一丁目一番地東洋ビルヂング四階　中山文化研究所
右代表者　秋山不二

印刷者　東京市小石川區高田豐川町三〇番地　長宗泰造

印刷所　東京市小石川區高田豐川町三〇番地　厚德社

4.5
253

終